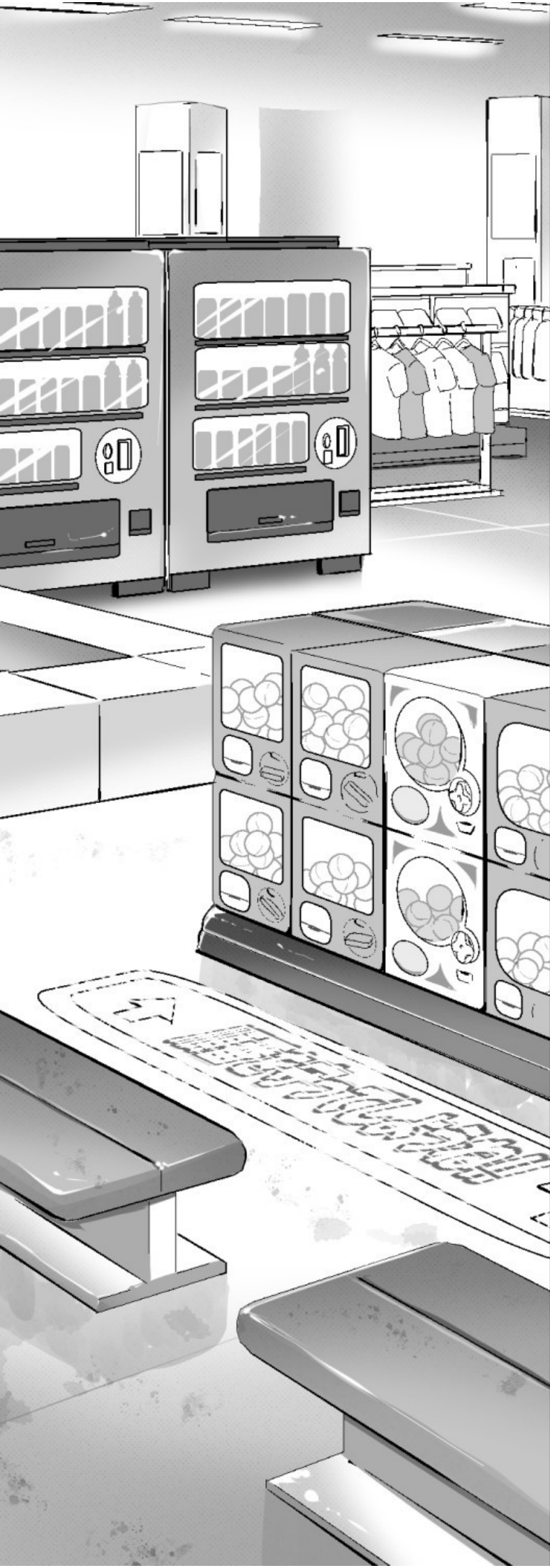




地元根付いた古き良き、といった夕
イプのデパートで清掃員として働く
吉田誠（よしだまこと）40代半ば。
今日も担当のフロア内で黙々と作業に
勤しんでいる。

やりがい：なんてものはそんなに感
じないが格段キツイこともない。
夏は涼しく冬は暖かい。
環境は決して悪くないだろう。

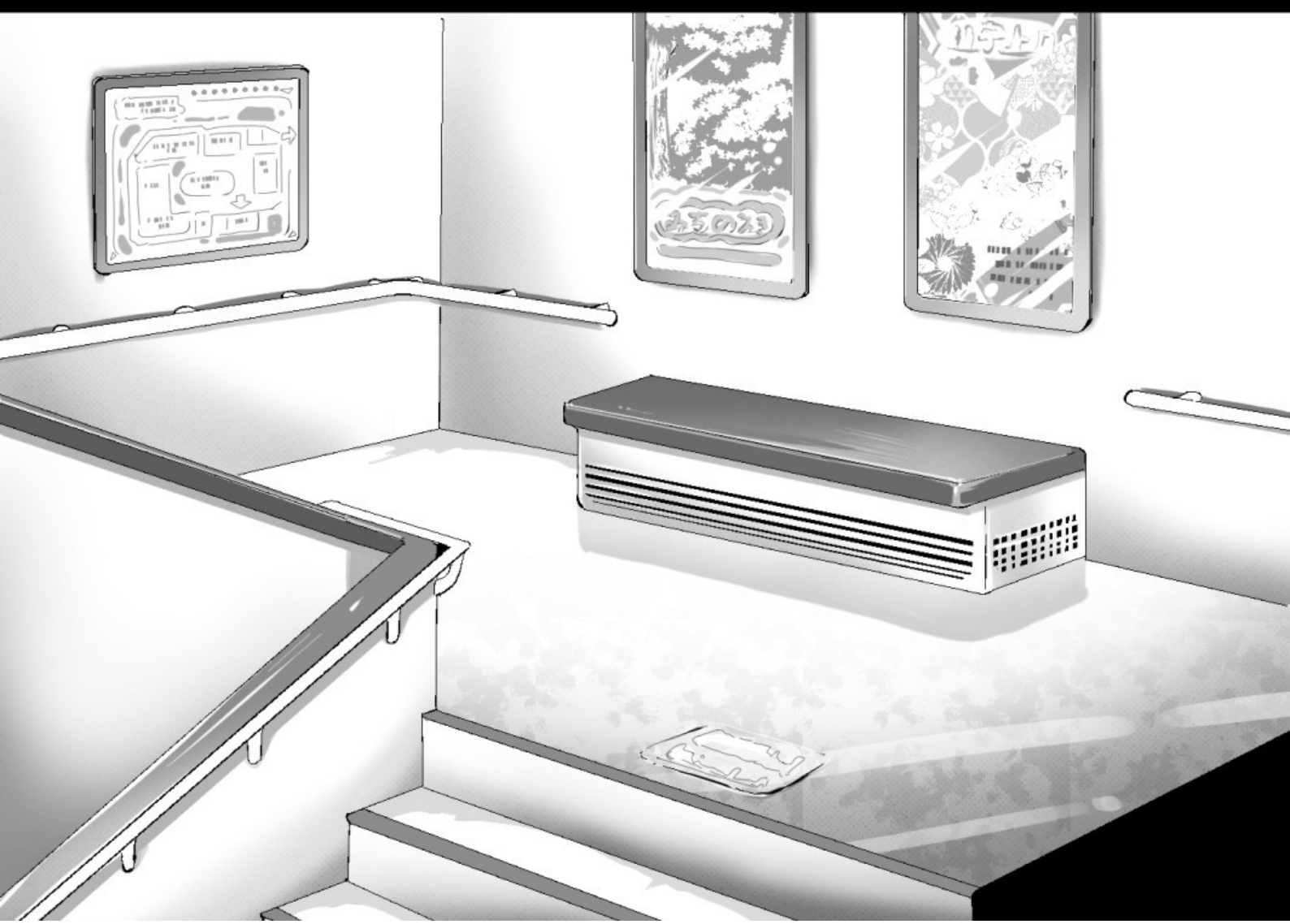


吉田「ふう、こんなもんだな」

階段の清掃を終えた吉田。

今は大型の施設ならば当然のようにエレベーターやエスカレーターが設置されているが、階段だってもちろんある。

利用者はほとんどいなくても、しっかり綺麗にはしておかないといけない。

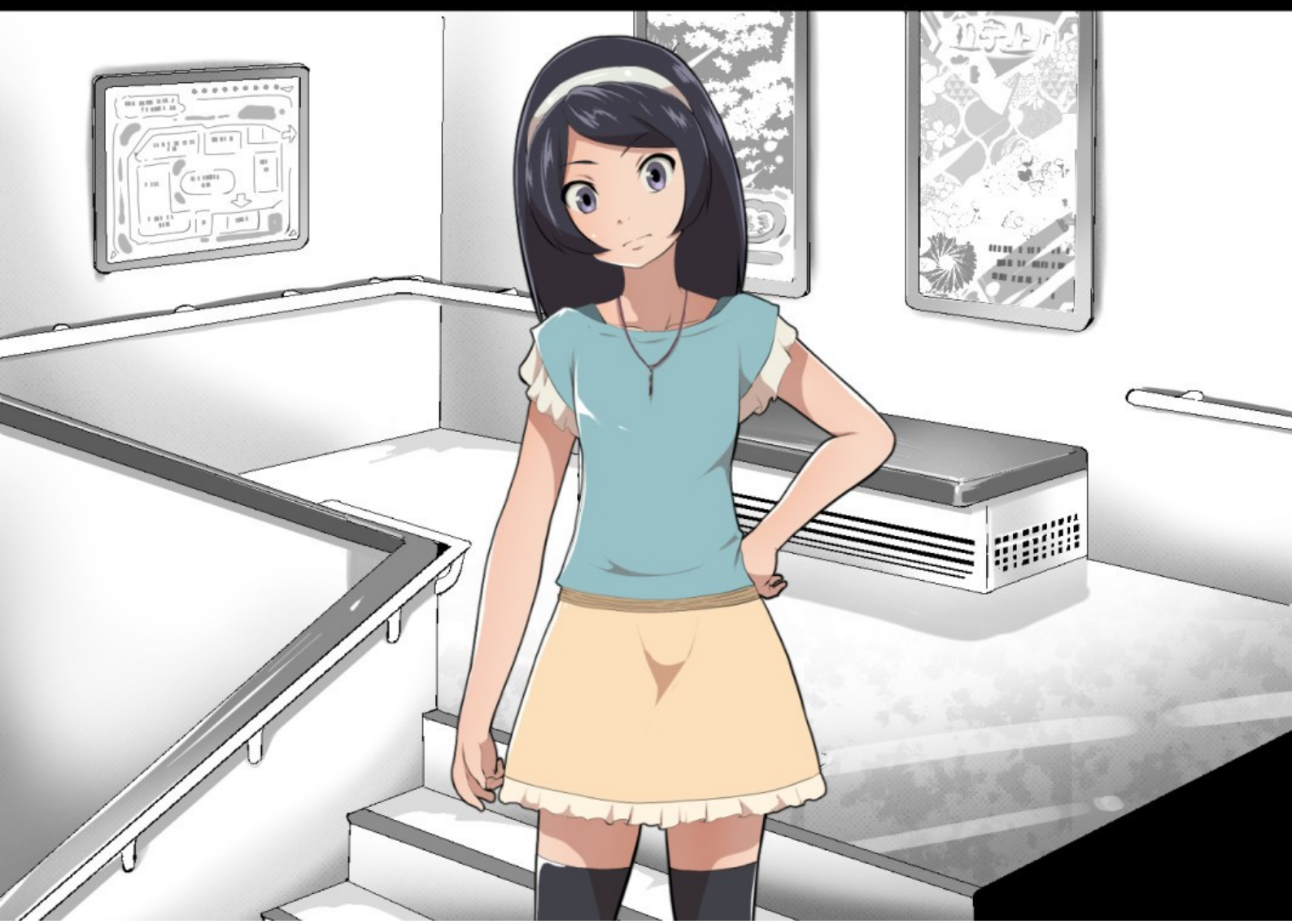


下の階へ移動しようと用具をまとめ
ていたら女の子が一人、エレベーター
に乗り込んでいるのが見えた。

黒髪のセミロングにヘアバンドをつ
けている。

芯がはっきりしてそうなパチっとし
た目。

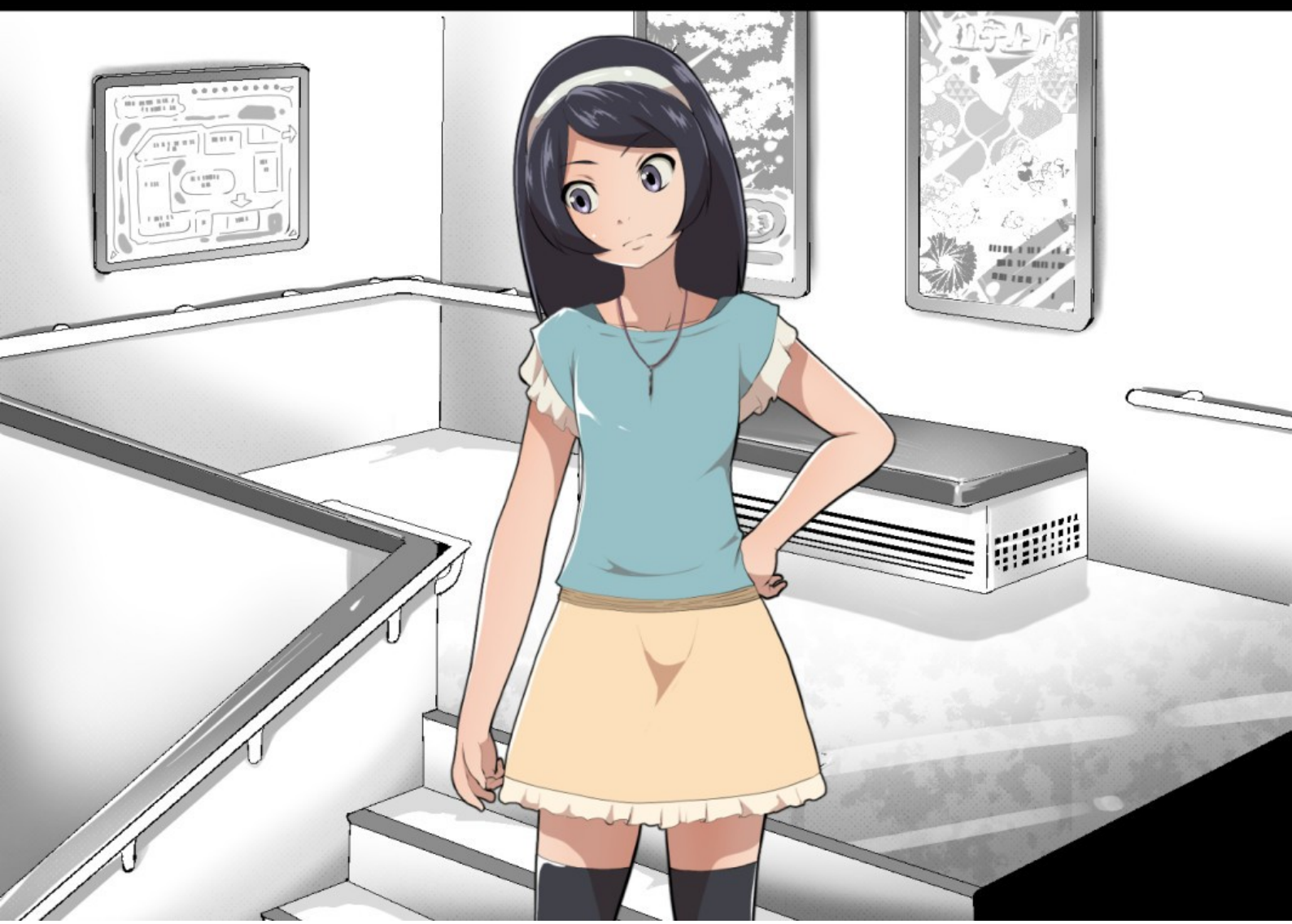
スリム、というよりは華奢といった
感じの体型。



女の子「…」

吉田「…あ、すみません！」

その女子は吉田がエレベーターに乗るものだと思ったのか開ボタンを押して待ってくれていた。



吉田は階段を利用するつもりだったが、思わず会釈をして乗り込んでしまった。

女の子「1階でいいですか？」

吉田「あ、そうですね！ありがとうございます！
います…」

何でもないようなやり取りだが冴えない中年からすれば可愛い女の子と喋れたという、ポジティブな感情が湧いた。

そして数秒してから我ながら気持ち悪いな…と感じ出した吉田。



女の子「…」

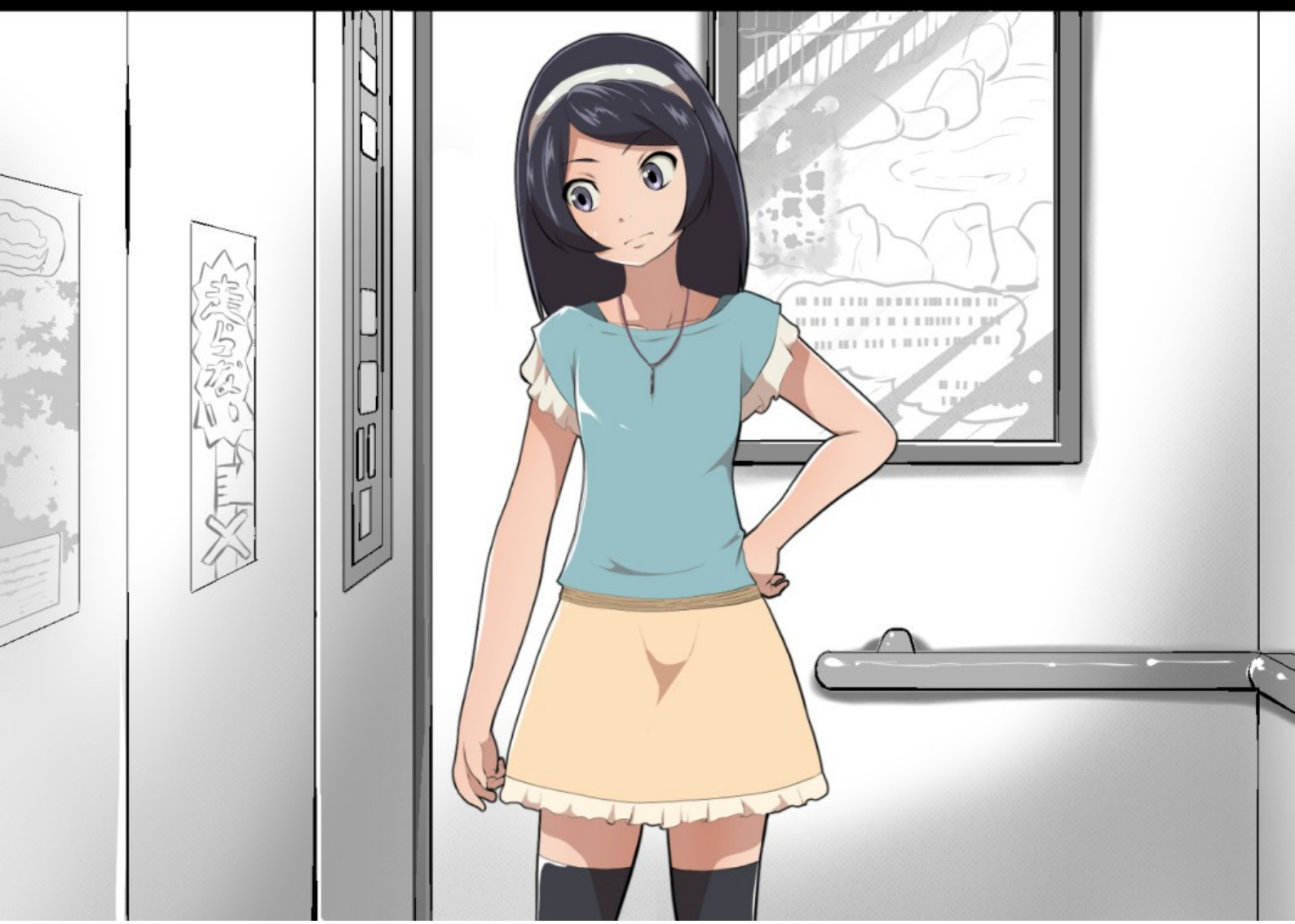
吉田「…」

吉田「…？」

このデパートは二階と屋上だけ。

10数秒で上下のフロアを移動できる
はず。

エレベーターが一向に止まる様子がない。



何か誤作動でも起こしているのか。

吉田は不安を感じ出したが、一応この
デパートの従業員であり年配としての立
場もある。

これ以上誤作動が続くようであれば毅
然とした態度で緊急用の外部連絡ボタン
を押そうと思っていた。

その時、女の子がペタンと床に尻をつ
き、そのまま壁に寄り掛かった。



吉田「！だ、大丈夫かキミ!!」

吉田は動揺したが、とっさに声をかけた。

若い女の子と二人きりでエレベーターに……などといった邪な気持ちは一瞬で消え去り、純粹に心配した。



女の子「…」

すーっすーっ小さく寝息を立てている。

寝てる…？　こんな状況で…？

吉田「ど、どういことだ…？」

エレベーターは変わらず動いたままだ。

…バラエティ番組のそういったドッキリ企画にでも巻き込まれているのだろうか。

エレベーターでのトラブルに一般素人はどうリアクションするのか、なんて。

次々と予測のできないことが起きすぎて、そんな訳がないのにもっともらしい理由をつけようとしてしまう。



吉田「!…」

急に眠気が襲ってきた。

味わったことのない重くのしかかる
ような眠気。

とても目を開けてはいられず自然と
瞼が落ちていく。

吉田「…」

そのまま眠りに落ちた。



1. $\frac{1}{2}$

2. $\frac{1}{3}$

3. $\frac{1}{4}$

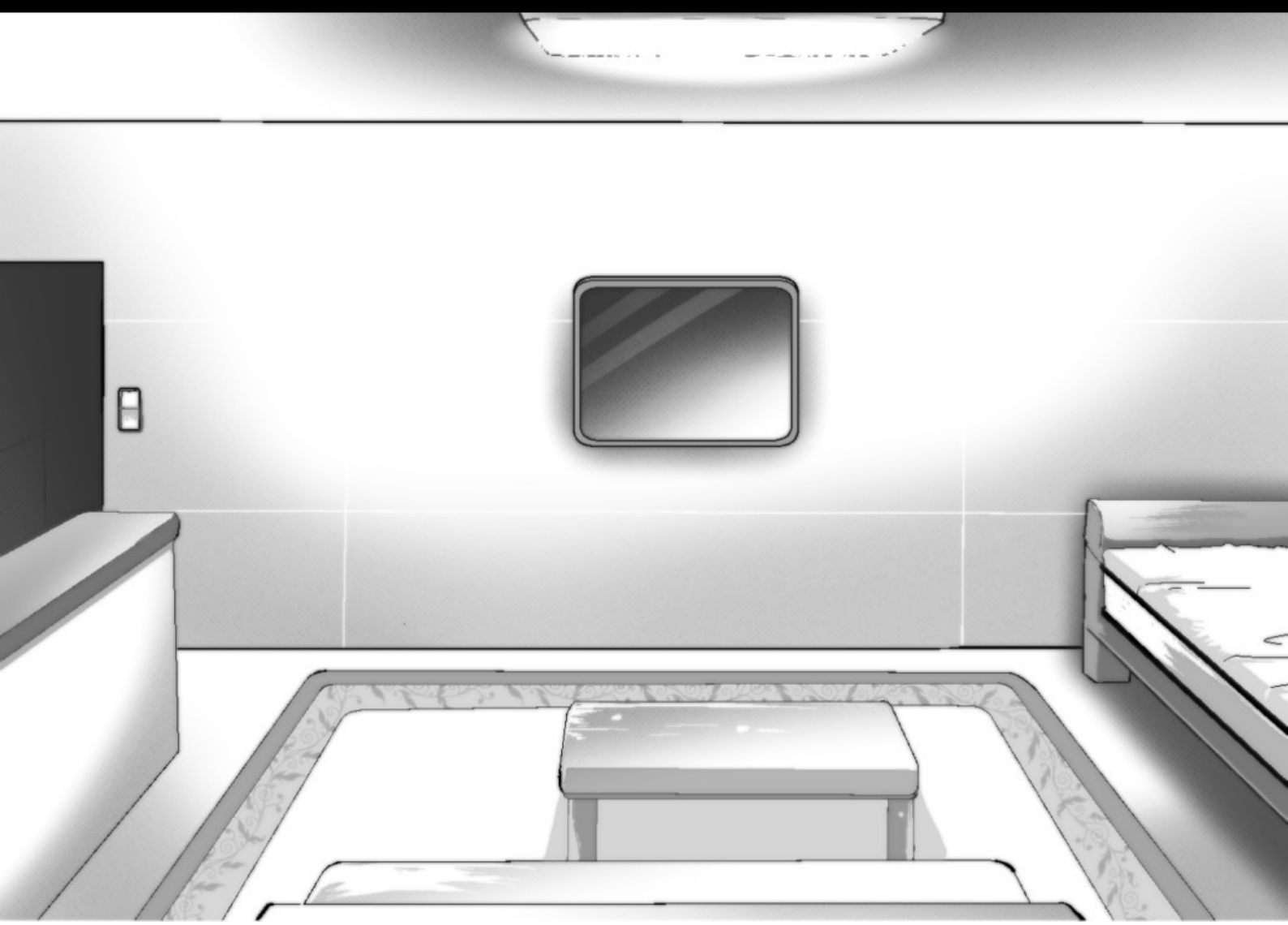
4. $\frac{1}{5}$

＝ ＝ ＝ ＝

目を覚ますと吉田は壁も天井も真っ白なワンルームの床に仰向けに寝転がっていた。

白いベッド。白いソファ。白いテーブル。意味あり気に壁に掛けられているテレビモニター。

最低限の家具、生活を監視するための簡易個室のようで、妙に整っているのが逆に不気味だった。



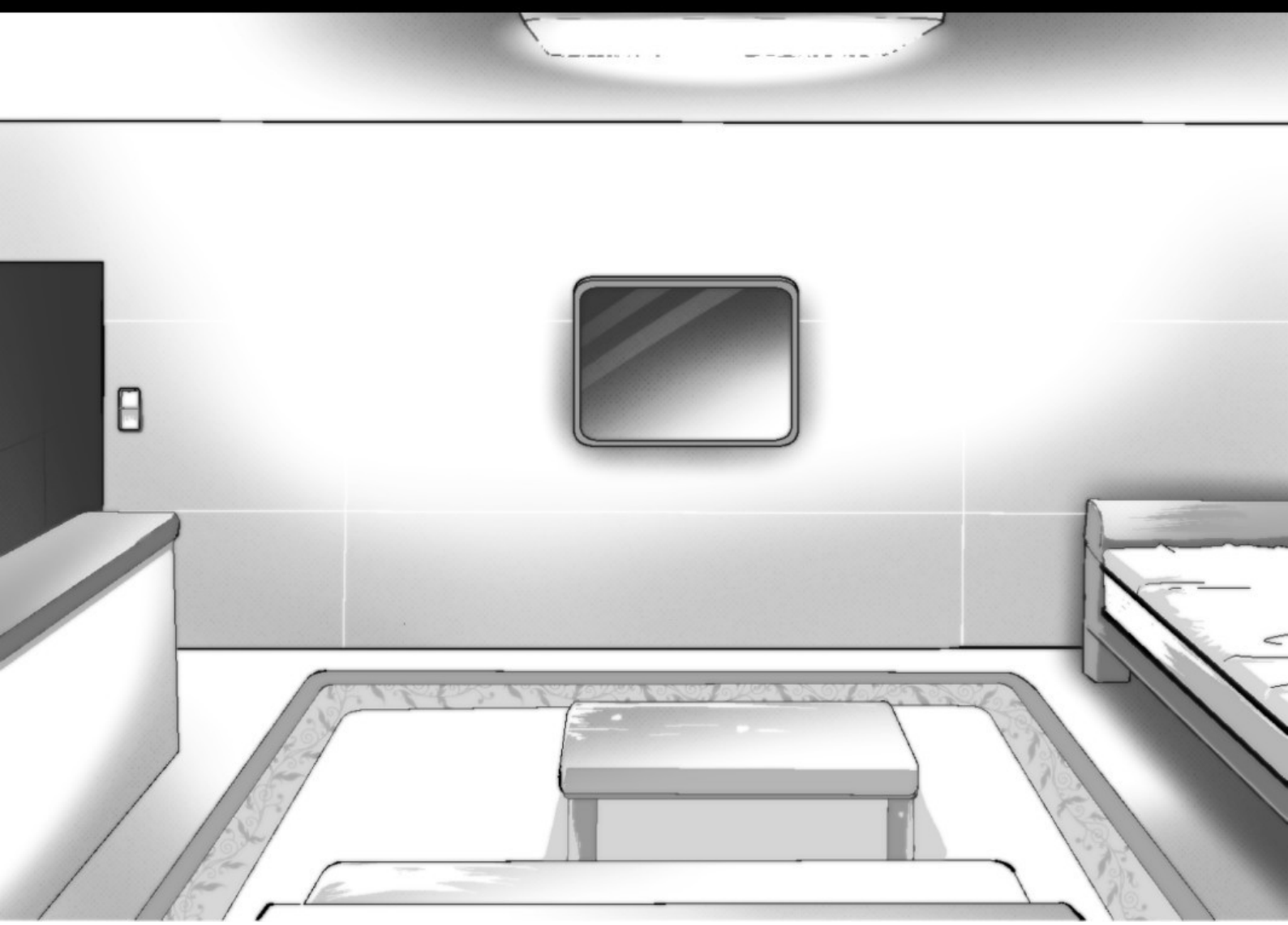
状況がまったく理解ない。

夢なのか現実なのか、その境目すら曖昧だった。

ふと、視界の端に先ほどまで目の前にいた女の子も横になっている。

吉田が声を掛けて軽く揺すったら目を覚ました。

意識がボーっとしているようだったが、状況を把握してじわじわ動揺しているのが表情で分かった。

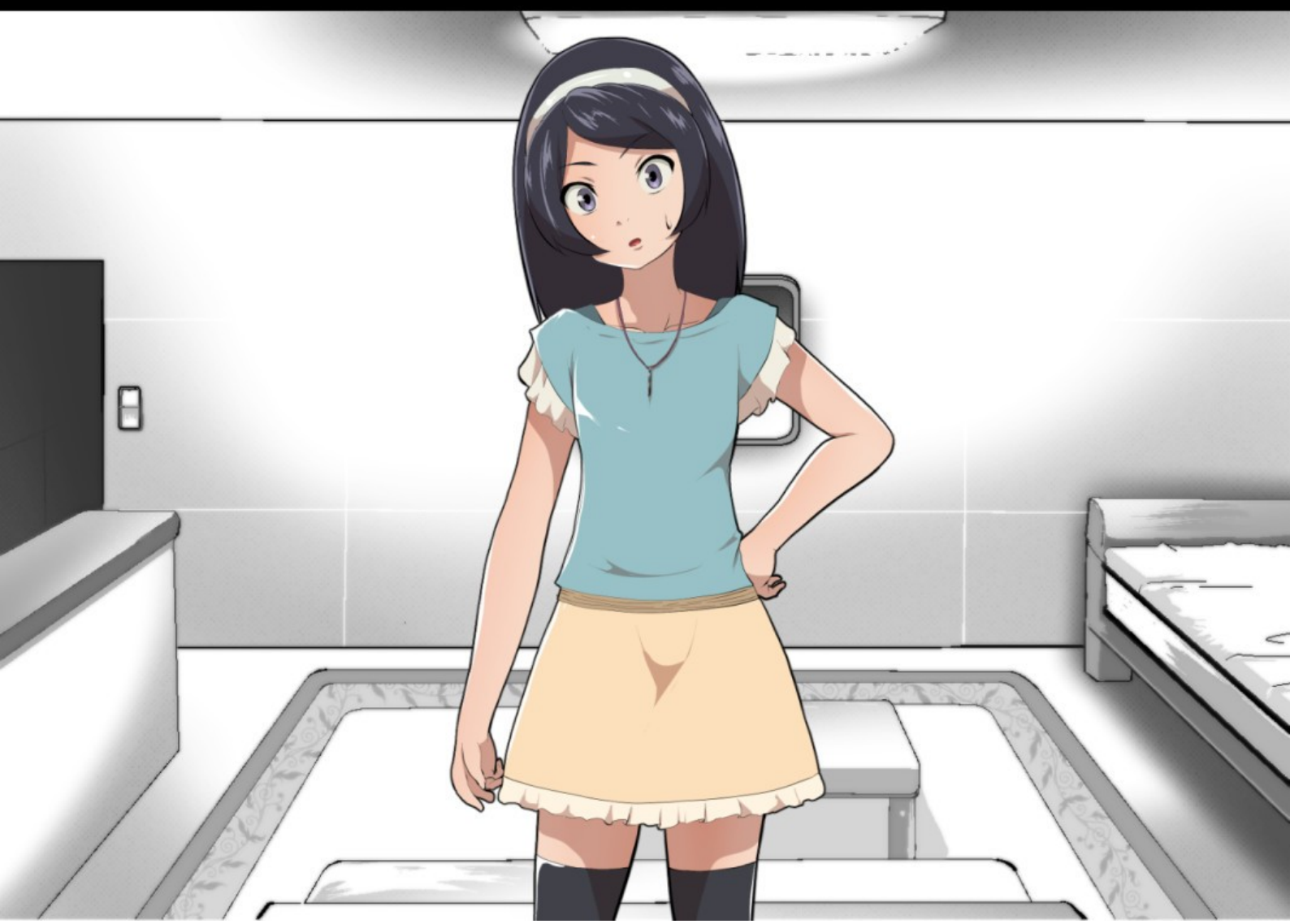


女の子「何、これ…ドッキリ？」

自分と同じことを思っていた女の子
に変に安心感を覚えた吉田だったが、
意識を切り替える。

吉田「とりあえず、出口探そうか」

女の子「あ……はい」



女の子は吉田と少し距離を図るように立つ。

それはそうかと思う吉田。

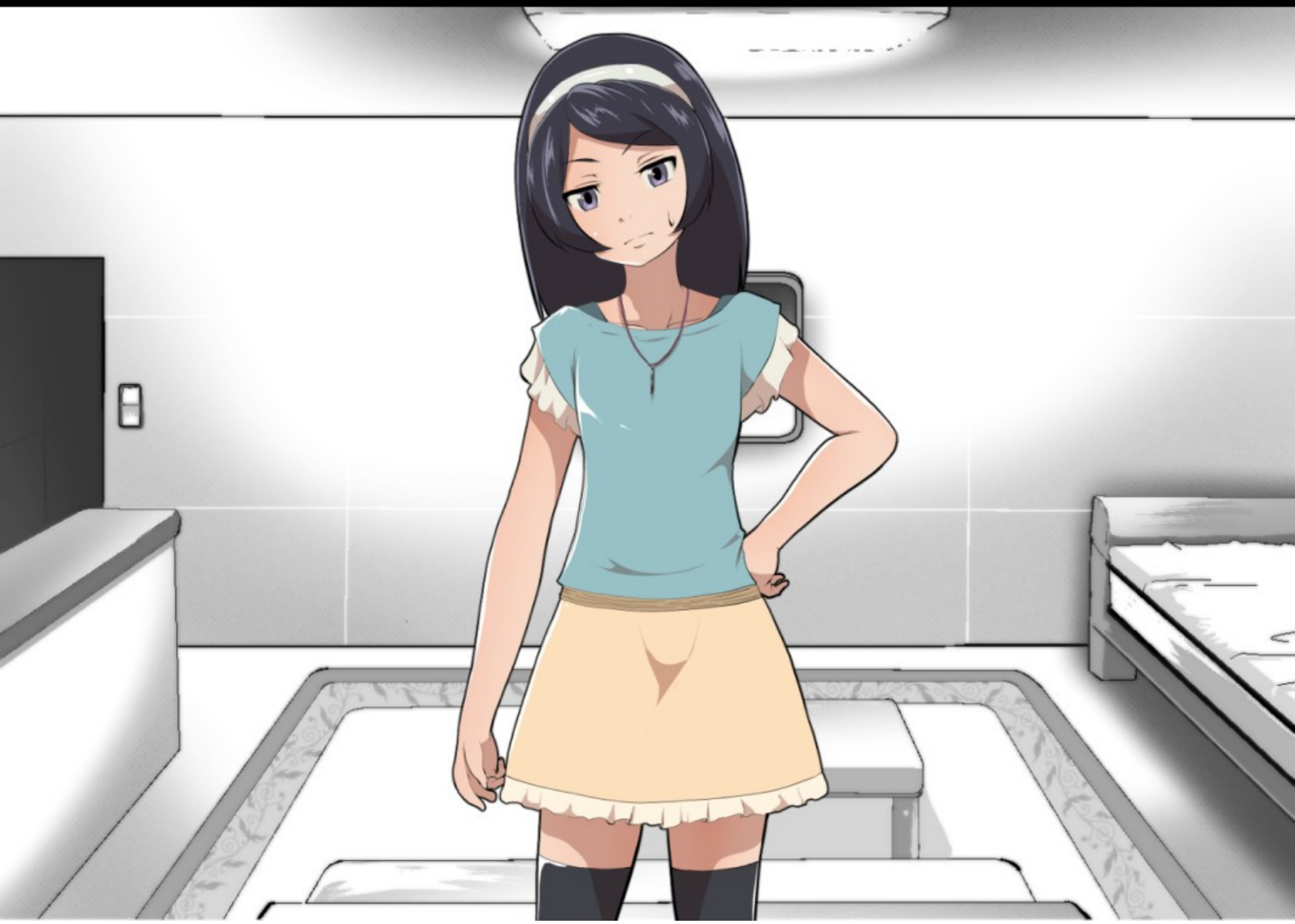
エレベーターで急に眠気に襲われたかと思えば、目を覚ましたら見知らぬ空間にいた。

それも中年男性と一緒に。
警戒するのは当然だろう。

その折、壁に掛けられたテレビモニターが急に点いた。

これ見よがしというか、いかにも意味ありげに設置されていたモニターだ。

二人は自然とそのモニターに視線を向ける。



『イチャラブバカップルにならないと
出られない部屋』

『この部屋から出る方法はただひとつ。
二人が相思相愛の

『イチャラブバカップル』
になることです。頑張ってください。』

『イチャラブバカップルにならない
出られない部屋』

『この部屋から出る方法はただひとつ。
あなたたち二人が相思相愛の
“イチャラブバカップル”
になることです。頑張ってください。』



そうメッセージが表記された。
続けて追記される。

『イチチャラブバカップル関係』

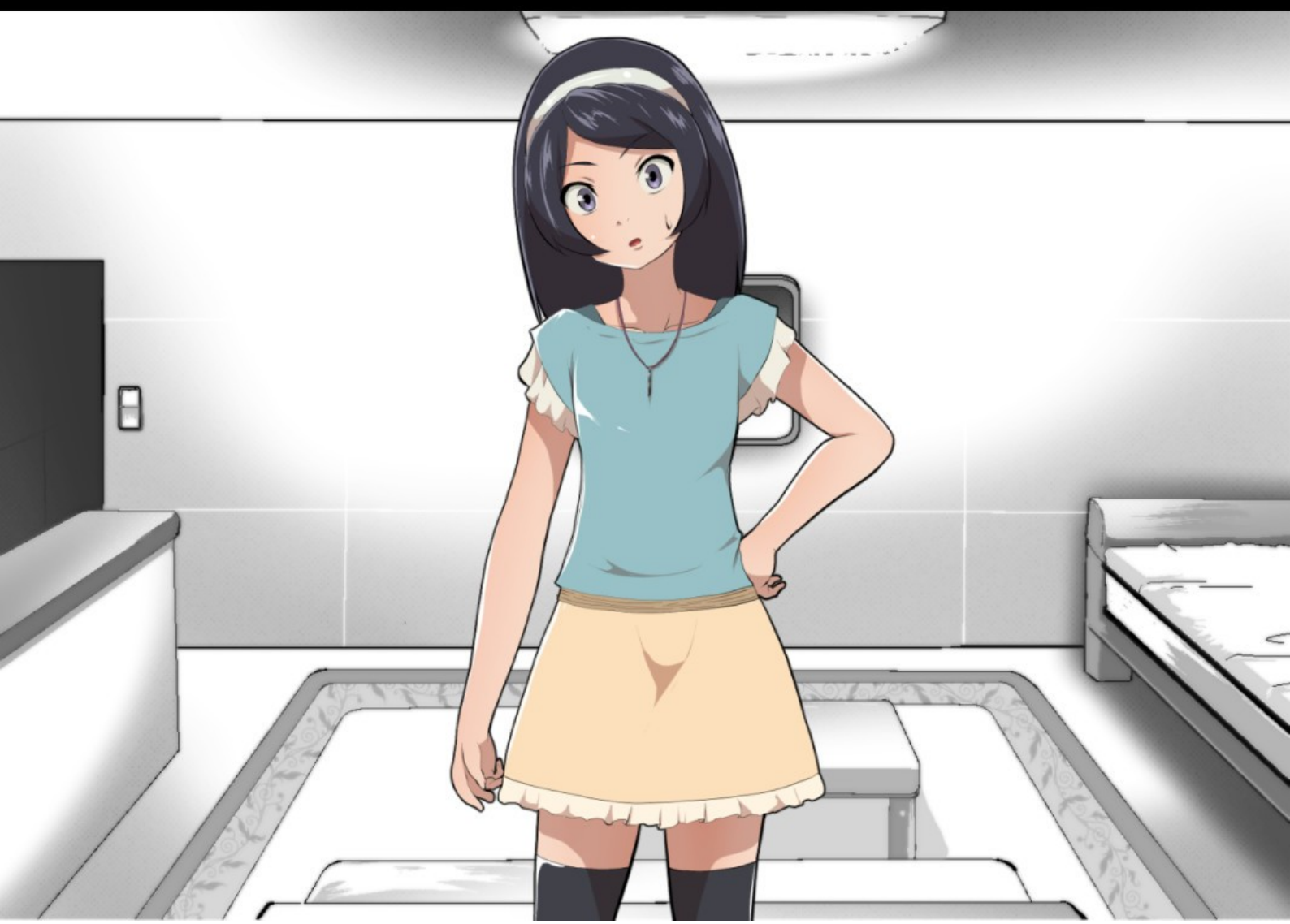
とは……』

・定義はありませんが、互いに心から相手を
愛し合う状態になること
・心の繋がりであり、形としての繋がりで
もあること

——この二つの条件を満たすことです

表記されていたのは映像ではなくメッセ
ージのみだった

二人はその内容を見て固まっている。



女の子「……イチャラブ……って、このおじ
さんと……?」

吉田「…」

同じエレベーターに乗り合わせただけ
の中年清掃員と若い女客の疑似的な2人
暮らしが始まった。

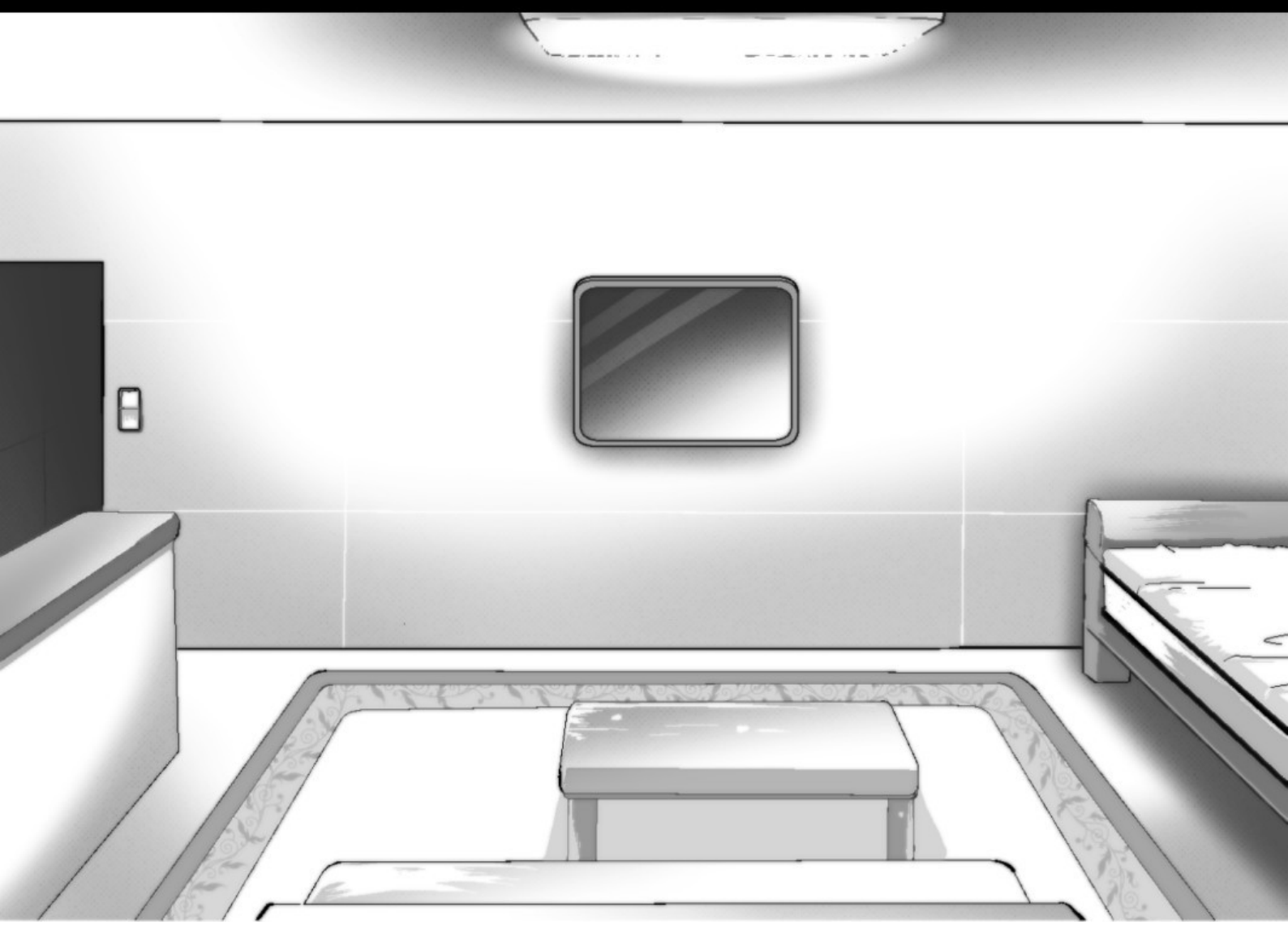


風呂、トイレ、食事、睡眠。

人としての最低限の生活リズムを繰り返すと何となく落ち着きは出てくる。

あれからとにかく部屋中散策したが、ドアも窓もなかった。

出口が一つもない。



電気や水は通っているようだった。
風呂やトイレといった最低限の設備どころか洗濯機や乾燥機、冷蔵庫に電子レンジなどなんでも備え付けられていた。
奥まったところに飲み物や食料、ティッシュやタオルなどが積まれた小部屋があった。



不思議なことに食料や日用的な消耗品はどれだけ使ってもいつの間にか補充されている。

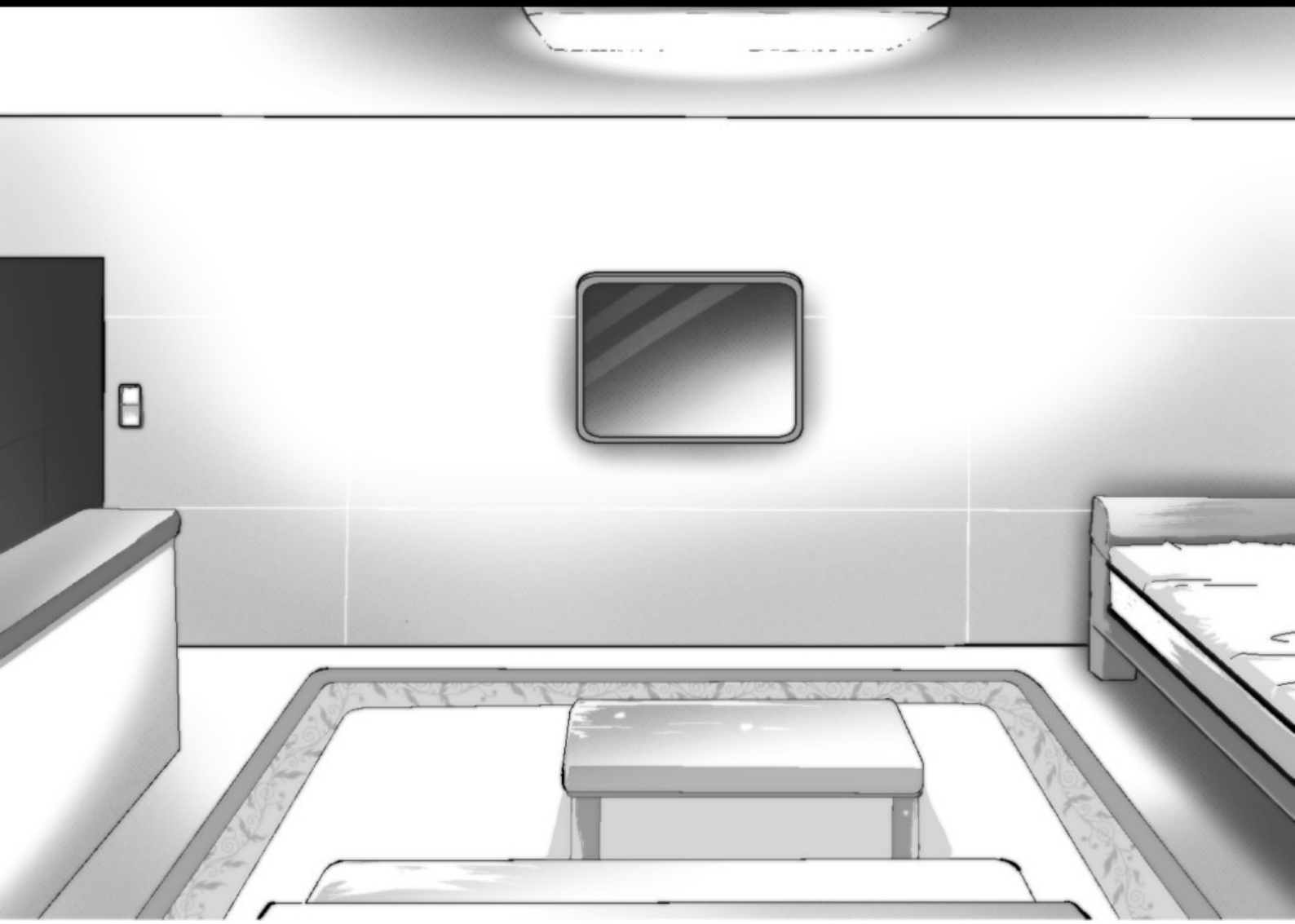
出たゴミも気づかない内にキレイさっぱりなくなる。

空調も整っていて快適な室温だった。

暑くもなく寒くもない。

娯楽と出口がないこと以外は不気味な程、生活環境が整い過ぎていた。

が、外部との連絡手段は一切ない。



あめり「おじさん、ご飯食べるの？ついでに私のも温めてくれない？」

吉田「ああ」

二人はとにかく会話した。

他にすることもないので必然的にやり取りが多くなる。

閉鎖空間での精神面を安定させる行為としてコミュニケーションは大事だろう。

女の子の名前は

岩田天璃（いわた あめり）といった。

デパートにフラッと買い出しに来た専門学生らしい。



あめり「おじさんの結構美味しそうじゃ
ん…」

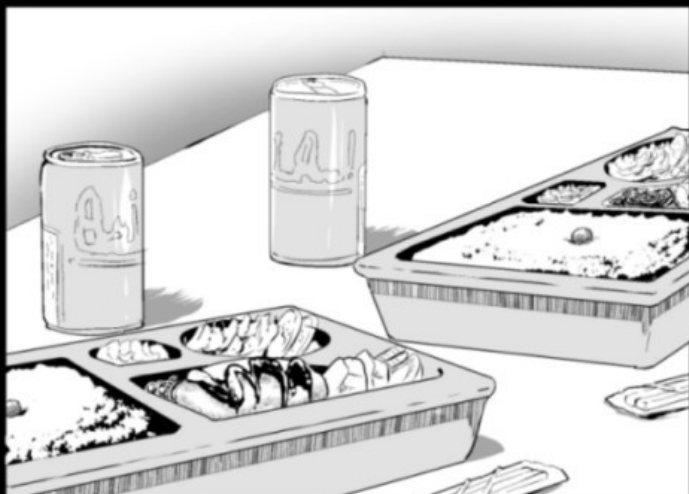
吉田「まあ、割とイケる…」

あめり「ちよつとちよーだい」

吉田「ー」

あめり「…ん！イケる!!私もこれにすれ
ばよかったな」

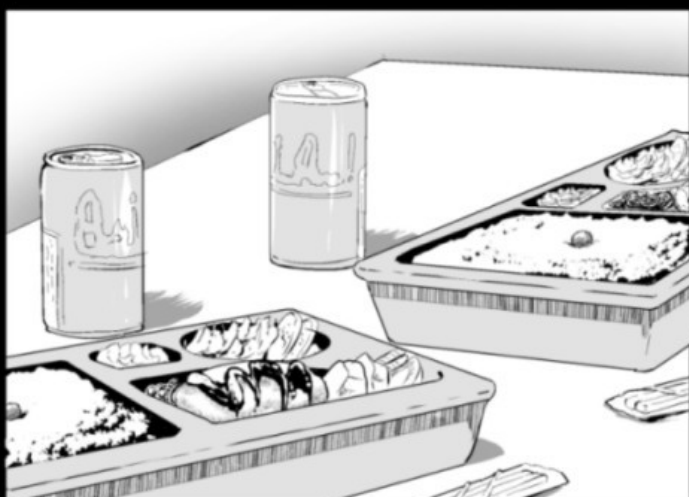
吉田「…ははっ」



『イチヤラブ関係にならないと出られない部屋』

そう指示を受けた二人は出来るだけそれっぽい行動を起こしていた。

というよりあめりが割と積極的に動いてくれていた。



恐らく父親よりも年上だろう中年男性とそんな関係になるなど、どう考えても嫌に決まっている。

あめり「嫌に決まってるじゃんそんなの」

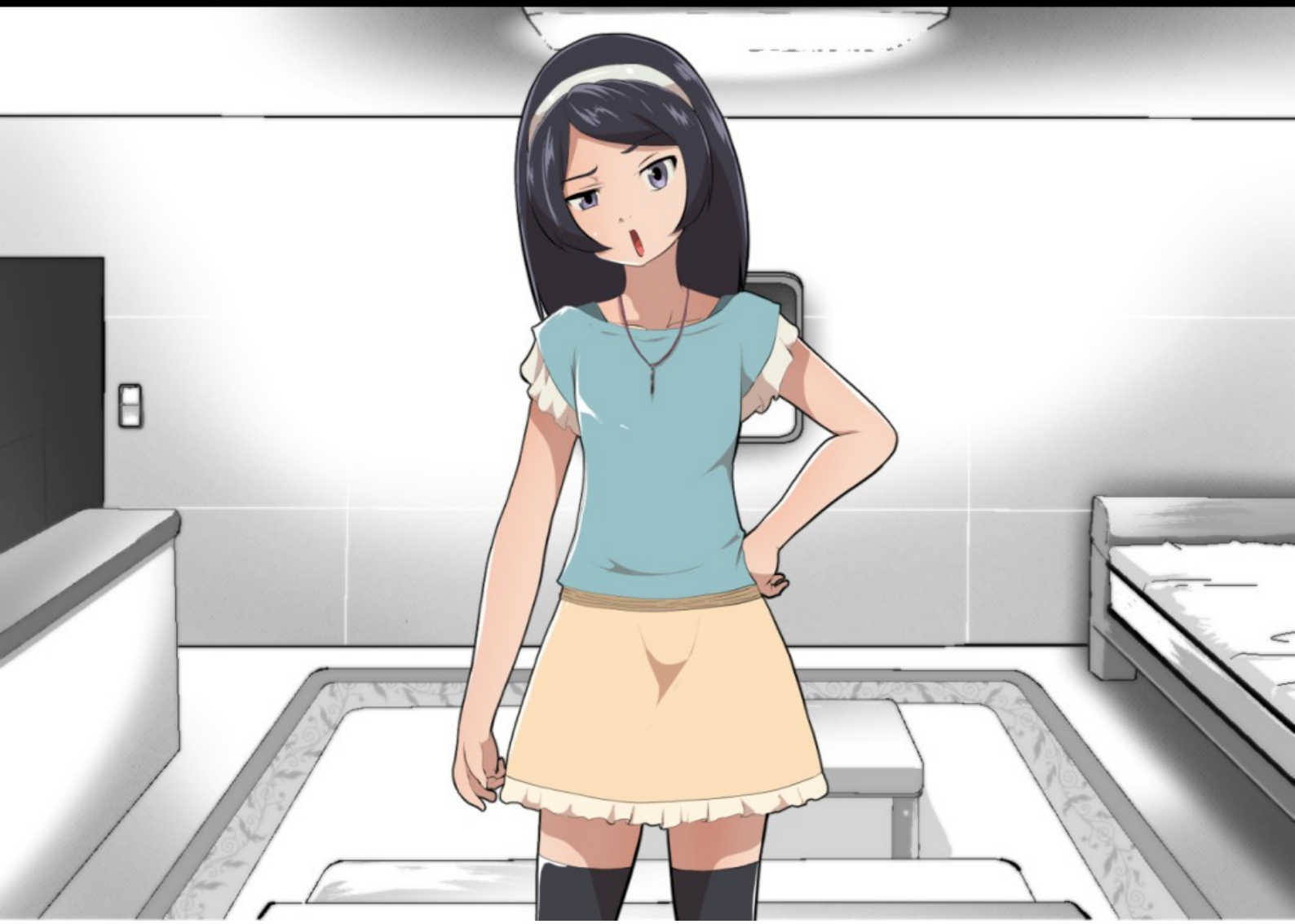
吉田「あ……うん」

あめり「ここから出るためなら仕方ないし」

チャキチャキの行動派というか、結構割り切っていた。

あめり「もちろん本当に恋人同士になるわけじゃないし、ここを出るまでの一時的な関係を築けばいいだけでしょ」

「嫌だけどやるしかないじゃん……!」



本当にそんな条件で出られるのかと疑問を持ったが、まずこんな空間に連れてこられたこと自体が説明もつかない状況なので妙に信憑性を感じてしまう。
とりあえず、そうするしかない。

吉田「…」

なんて、仕方がなく従っている体でいる吉田だが内心、この生活をポジティブに捉えている部分もあった。

若く可愛い女の子と疑似的な二人暮らし、そういった関係になるような行動言動を強制的にとらなくてはいけない状況。



吉田「あめり、ちゃんはカレシいたりとか……」

あめり「……今の子にそういうの聞くの、セクハラだよ？」

吉田「ぐ、ごめん」

あめり「てか、いたらこんな割り切って冴えないおじさんなんかと関係作らないっての」

「ん？……いや、いた方が割り切る……のかな？」

吉田「……はは」



あめり「おじさんこそ結婚して…ないか！」

吉田「おい！…まあしてないけど」

あめり「だよねw」

吉田「…」

あめり「ごめんごめん(笑)」

非現実的な状況下であつてもリアルな生活感の繰り返し心がなだめていくのだった。

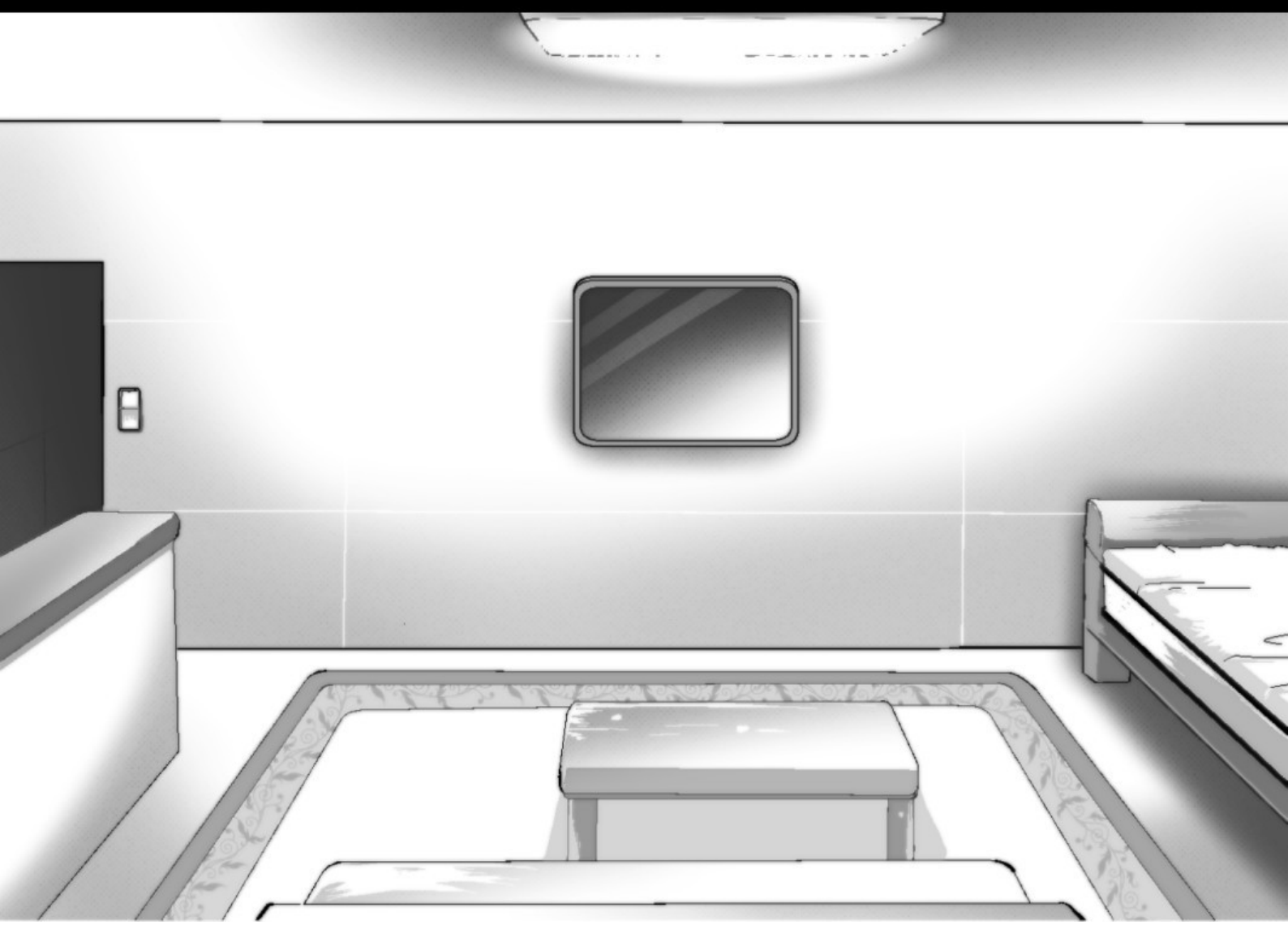


寝る時はあめりがベッド、吉田はソファで寝ている。

あめりも気を遣って本当に自分が使ってしまったていいのか聞いていたが立場を考えてのことなのか吉田はあめりに使わせていた。

初めの頃は着の身のままで寝ていたが、探っていたら寝巻きを見つけた。

無地の特にこれと言ったデザイン性もないモノだったが、吉田はただでさえ寝心地が悪かったのでせめて着心地くらいは快適でいようと抵抗することなく着た。あめりも吉田が着たのを確認してから洗面所に行って着替えていた。



あめり「おやすみおじさん」

吉田「ああ、電気消すぞ」

あめり「あ、待って！今のやり取りやり直
してーるー」

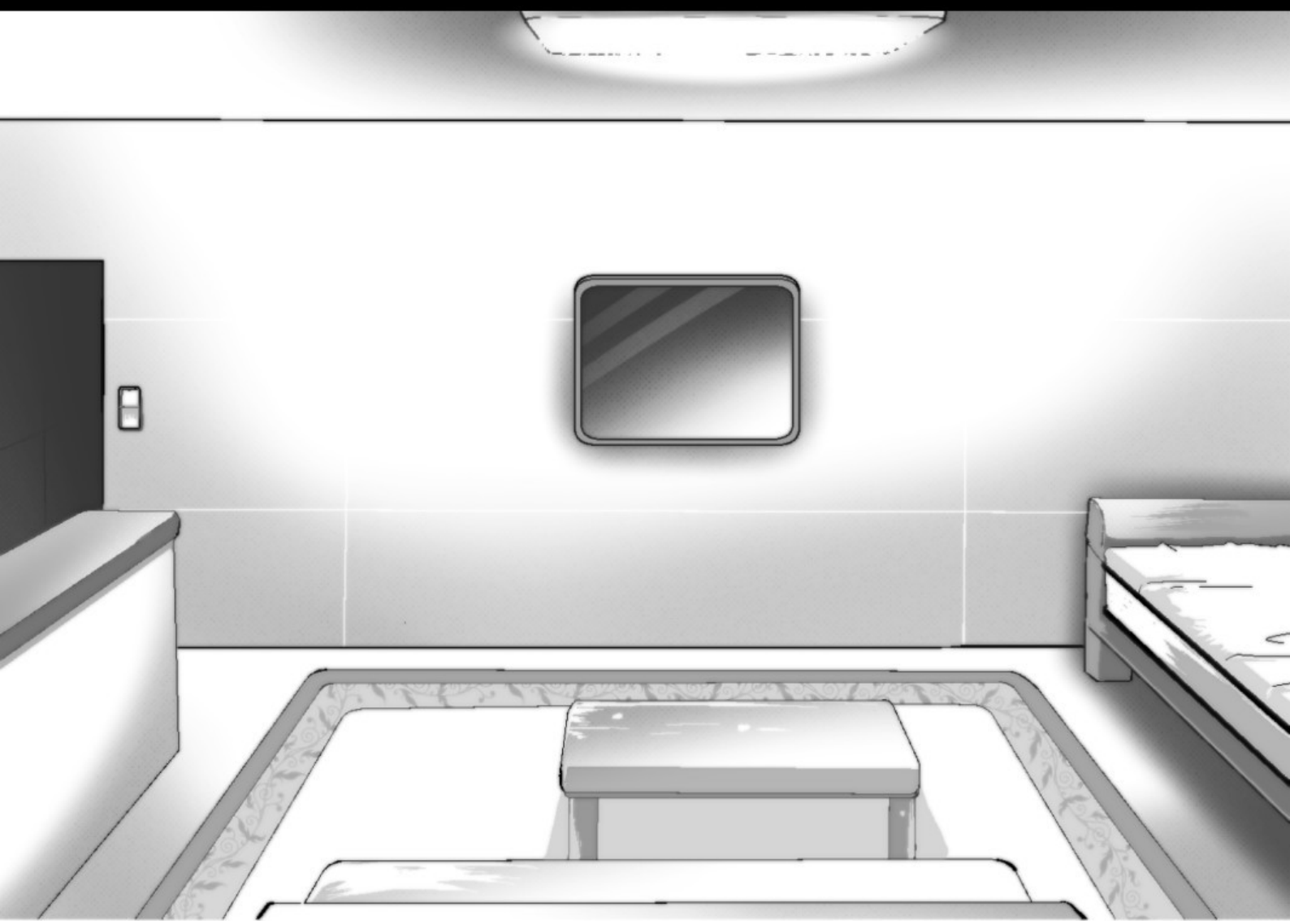
吉田「？」

あめり「…おやすみ、ダーリン」

「なんて(笑)」

吉田「…おやすみ」

あめり「(笑)」



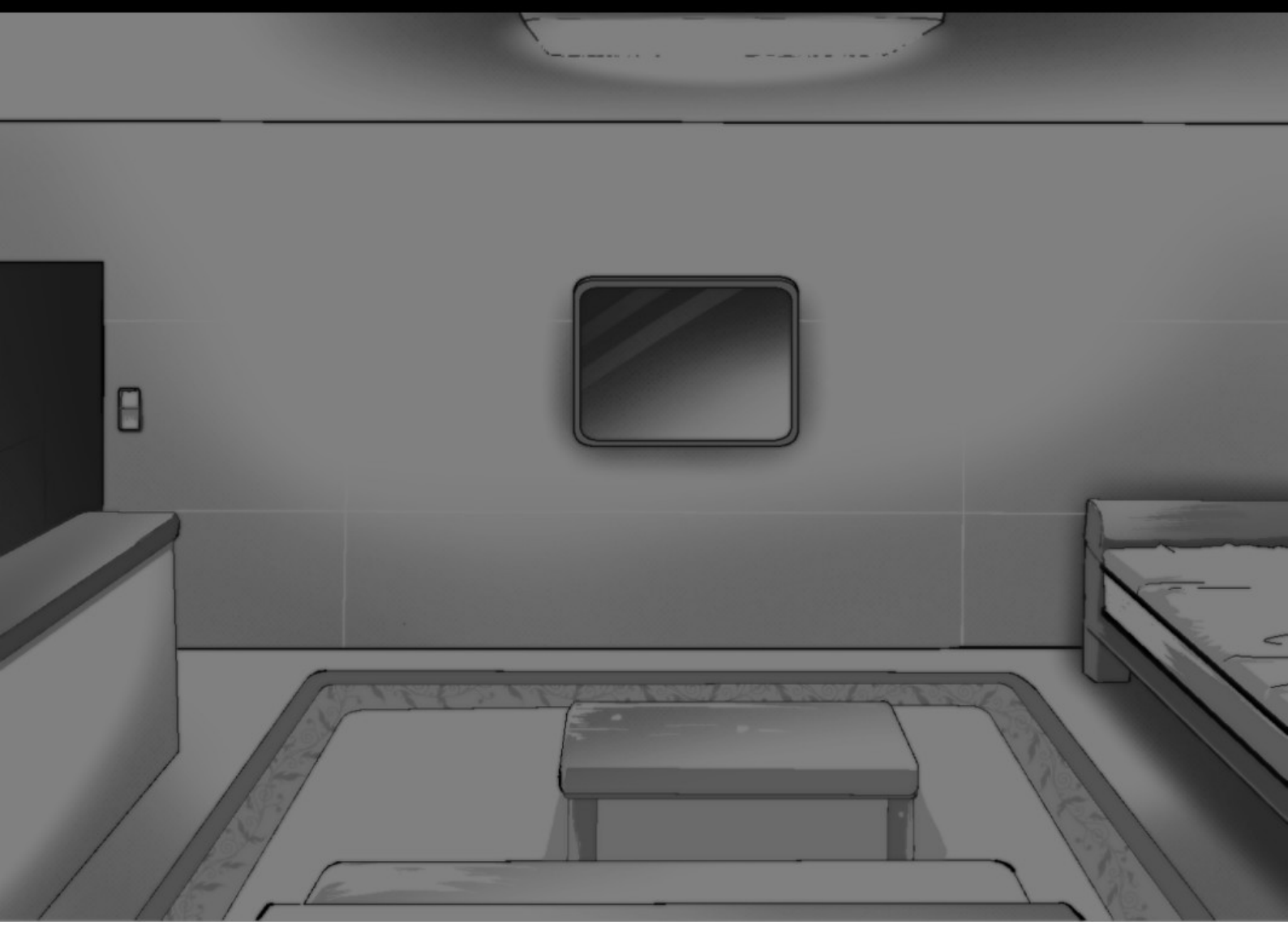
あめりなりにここから脱出しようと
積極的に行動を起こしてくれている。

こんな冴えない中年なんかと同じ空
間にいるのも嫌だろうに…。

現代っ子らしく飄々としているが、し
っかり気を使っているのも感じ取れる。

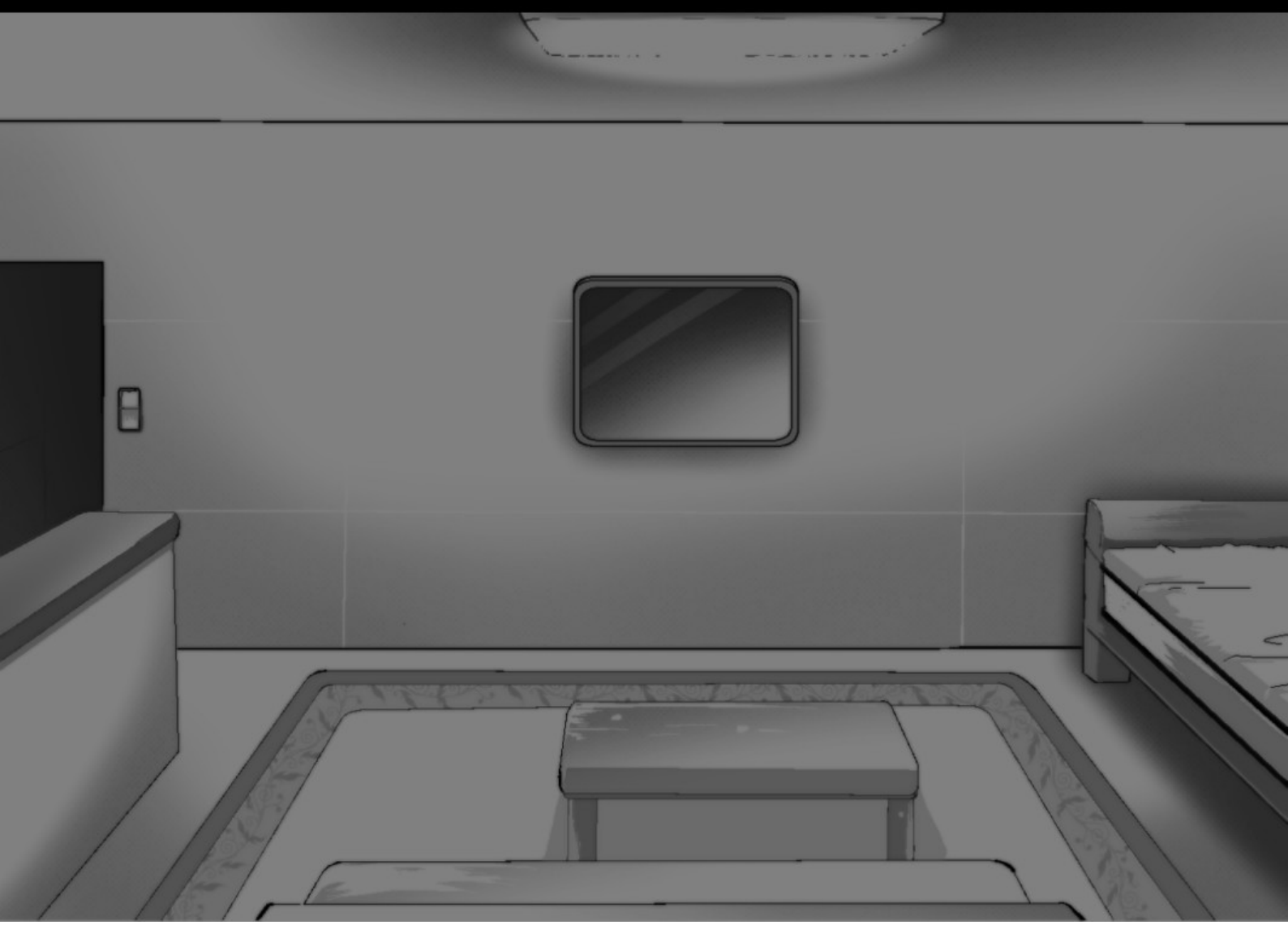
普通にいい子だった。

吉田「…」



こんな状況を密かに楽しんでいる部分もあるとは言ったが、それは一緒にの空間にいるだけで満足：

では治まらない感情もじわじわ湧き出していた。



==

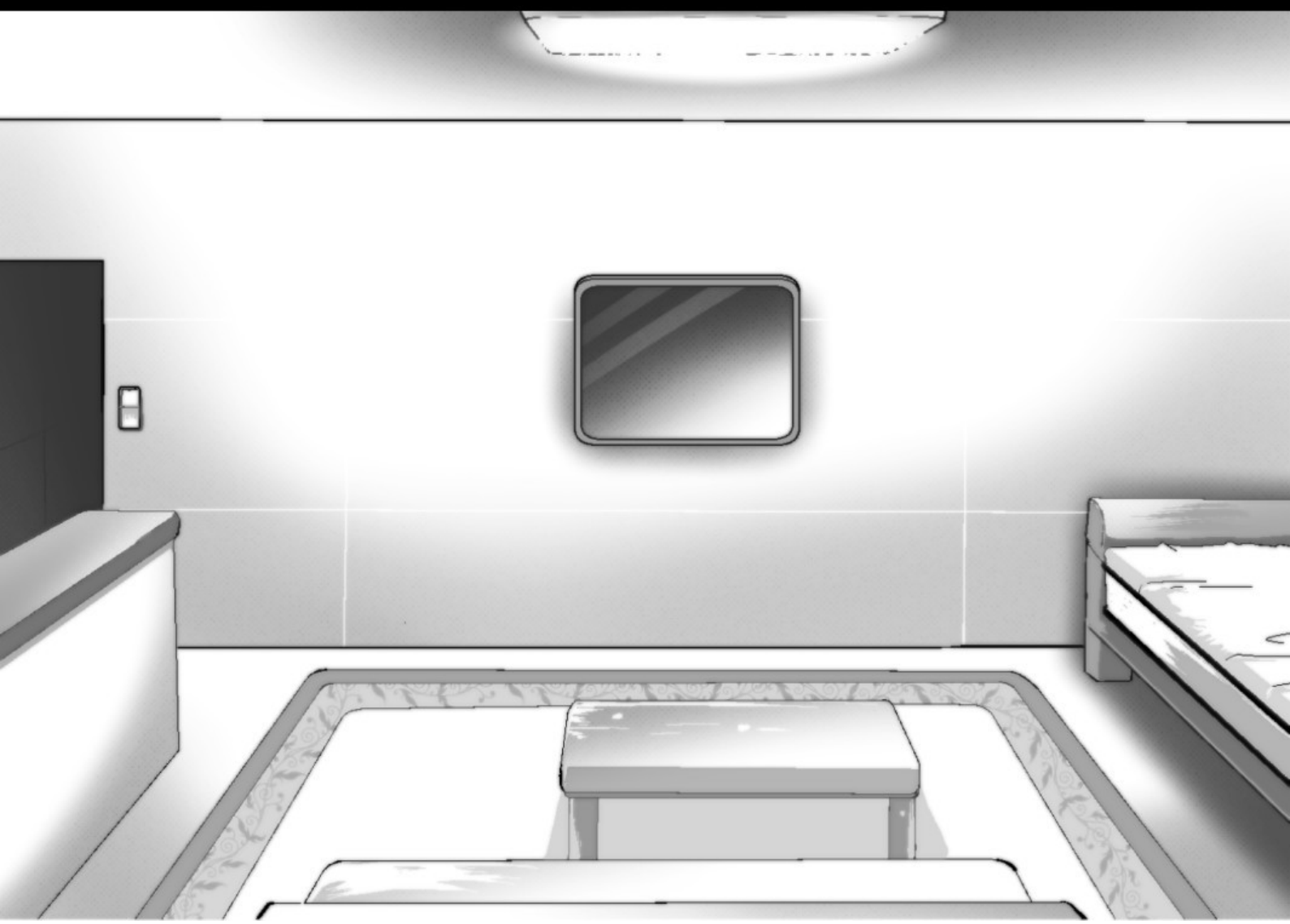
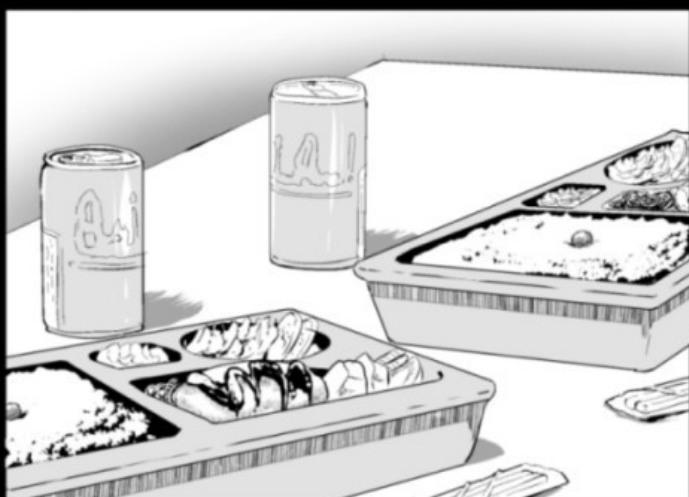
あめり「はい、おじさんあ〜ん♪」

吉田「…」

あめり「ほらっこんな若い女の子にあーん
してもらえてんだからもっと喜んでよ」

吉田「…」

あめり「おじさん…?」



あめりは食事中、露骨にそういったことをしてみる。

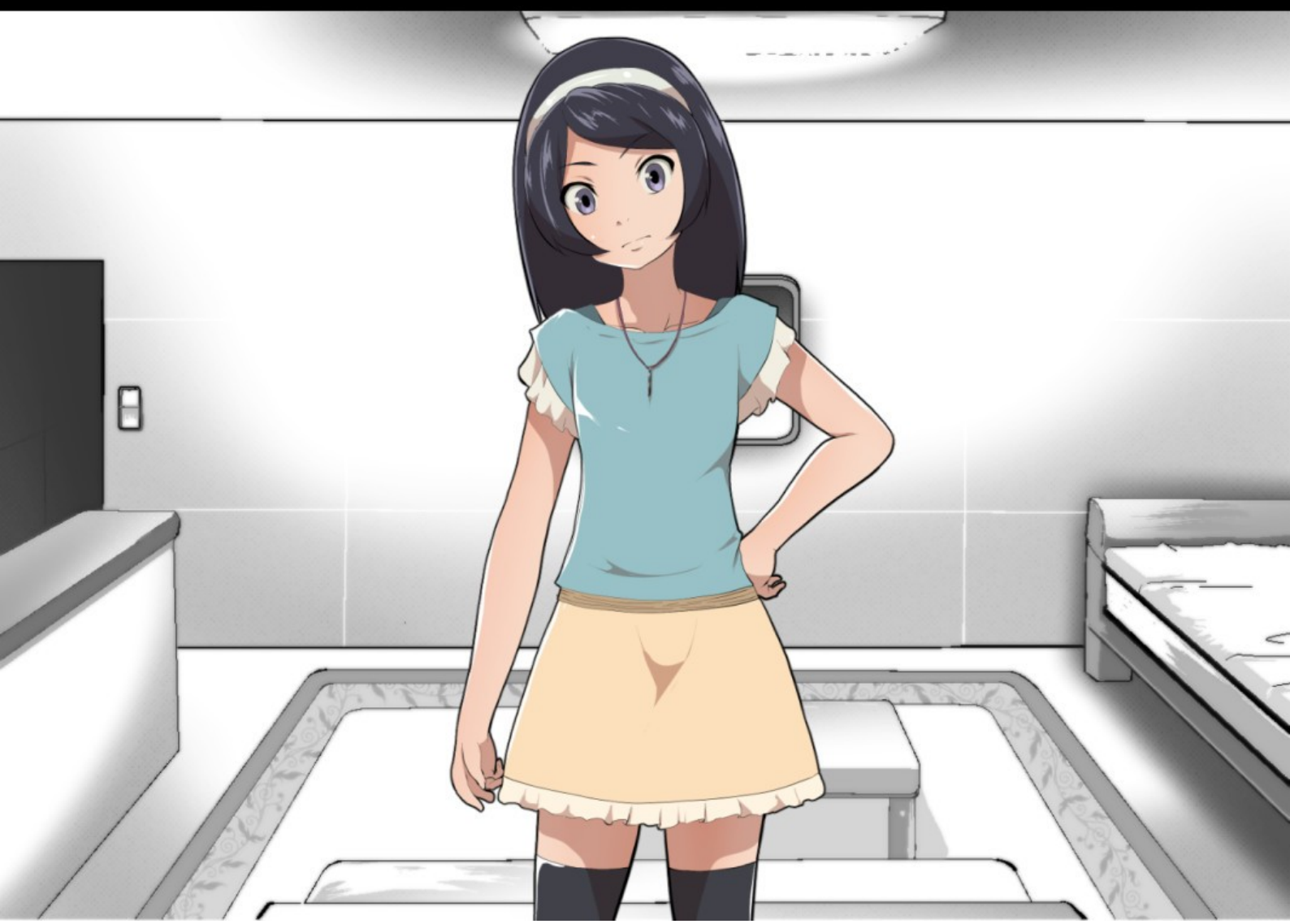
ここを出るために、指示された条件を達成するため。

誰なのか、もしかすれば人でもない十二力に見せつけるように。

吉田「あめりちゃん」

あめり「ん？」

吉田「…色々やってくれてありがとう、本当は年配の自分がもっと行動しなきゃいけないのに」



吉田「イチヤラブ関係にならないとく、なんて条件のためにおっさんがグイグイいくのも気持ち悪いだろうなって思っちゃって…」

あめり「そりゃ、まあ…キモいっっちゃキモいかもしんないけどさ…」

「そうしなきゃごうから出られない訳だし」

「寧ろおじさんももっとグイグイ来ていいよ(笑)さっさと出ようよこんな所w」

吉田「…めちゃくちゃキモいけどはつきり言っね」

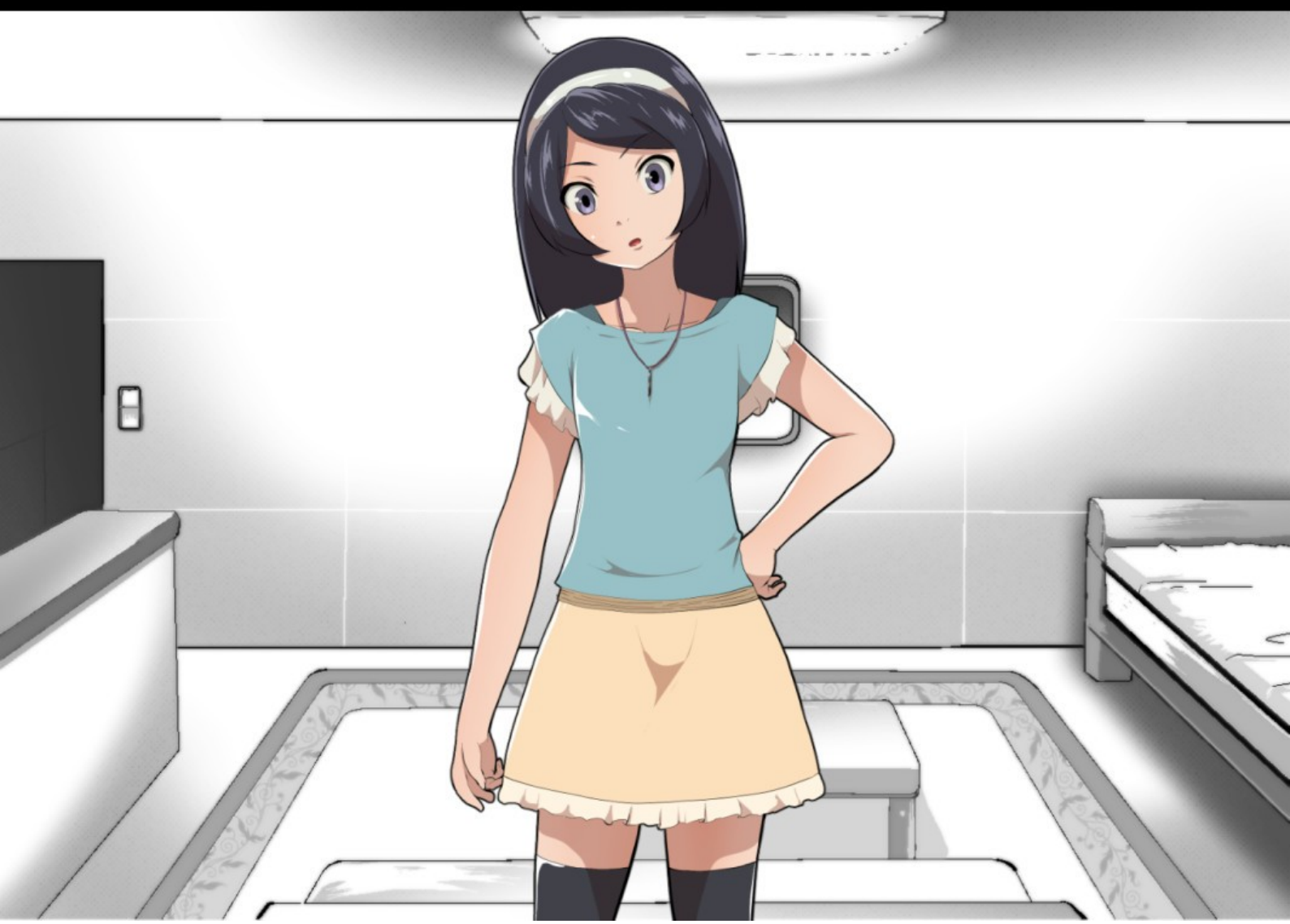


吉田「俺の思ってるイチャラブっていうのは…表面的な行動というより」

あめり「…」

吉田「もっと直接的というか、肉体的と
いうか…」

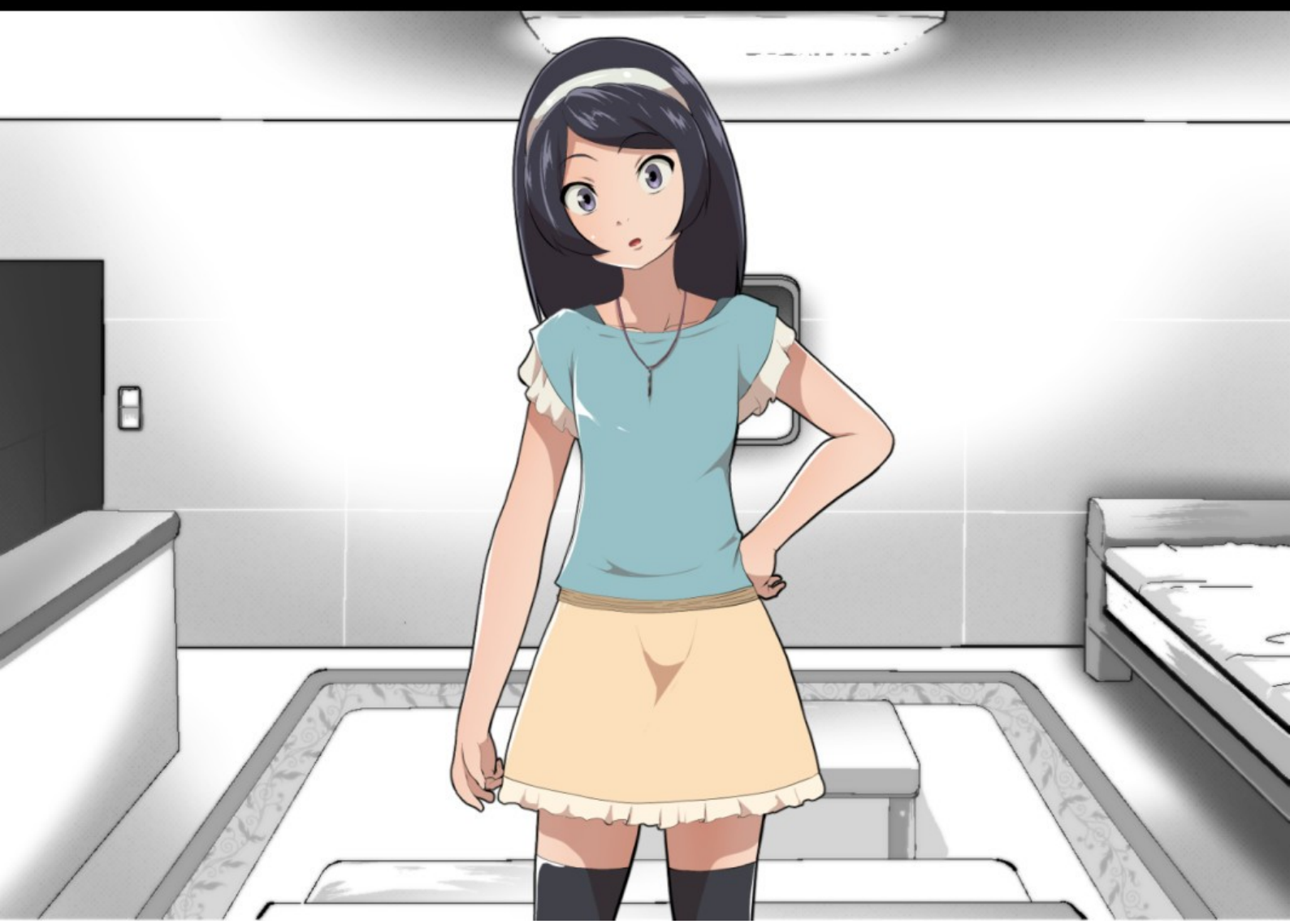
あめり「…」



吉田「…エロい事、というか」

あめり「…」

吉田「…」



あめり「…」

和田「…」

あめり「……」



あめり「…だよねえ」



あめりは一息ついて天井を見上げる。

あめり「あ〜！やっぱりそうなるか〜、
そうなるのかあ〜…！」

吉田「…」

あめり「…おっさんってマジでそうっつ
のなんだ〜…」

吉田が思っていたよりとびきり拒絶
するような反応ではなかった。

あめり「いや、フツーにキモいよ？おっ
さんキモ！とは思ってるよ」

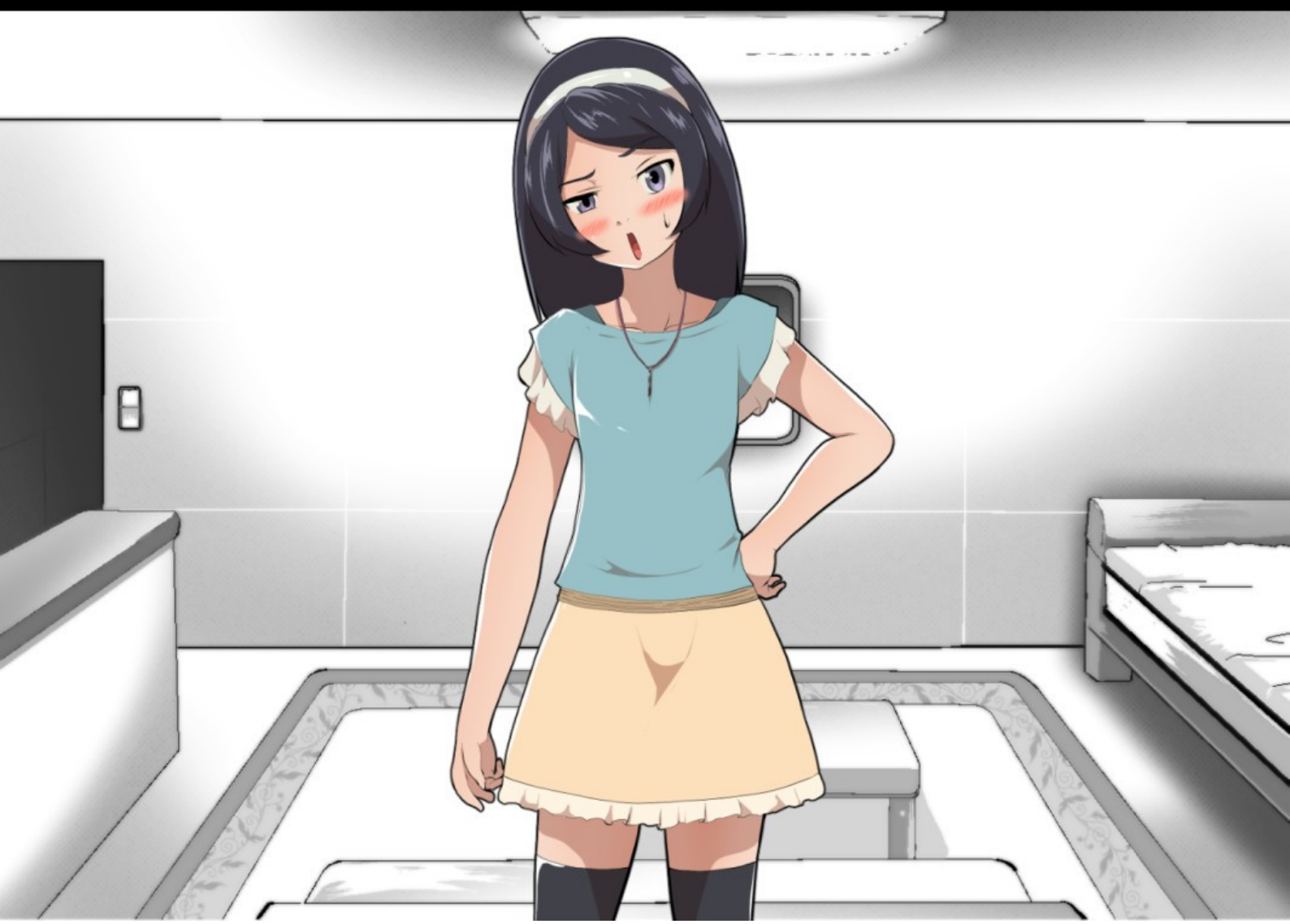
吉田「…」



あめり「…おごちゃんごうごのイチャ
ラブがそごうごうごなの？」

田田「ご…」

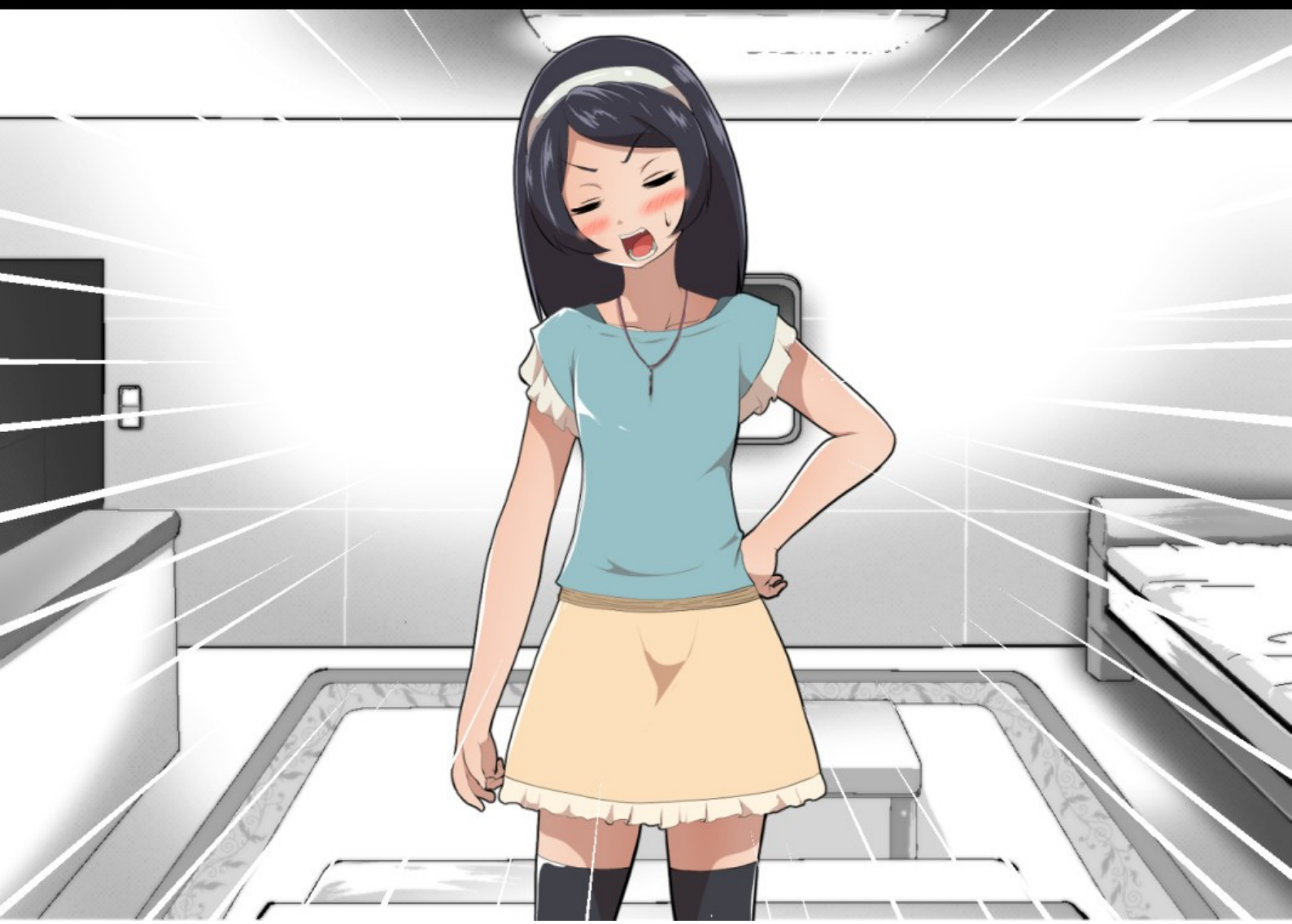
あめり「…」



あめり「あーもう！……分かった!!」

あめりが立ち上がり、声を張る。

吉田の方を向く。



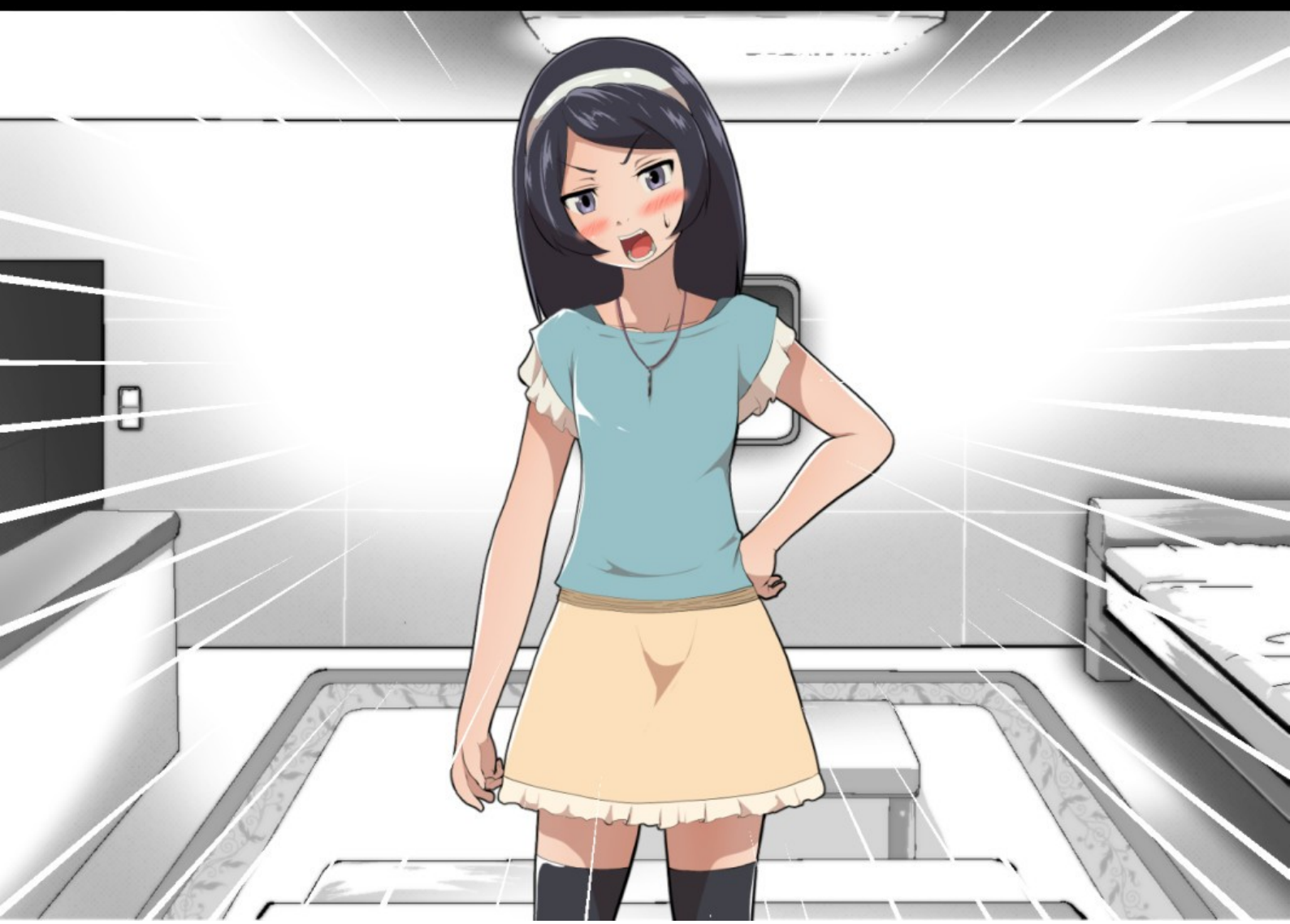
あめり「ヒロいことーやってやるっじゃ
ん…!」

吉田「本当にいいのか…!」

あめり「いいわけないけど…もう割り切
るしかないじゃん!」

「ここから出るために…!」

「出られたらここであつたことは完全
に忘れる!おじさんとももう会っ
たことないだろうっし!!」



あめり「ほりっ！ーやるなら早くしよー！」

吉田「ほ、本当の本当にいいのか…!?」

あめり「私の気分が変わらない内にさっさとやっちゃうからー！」

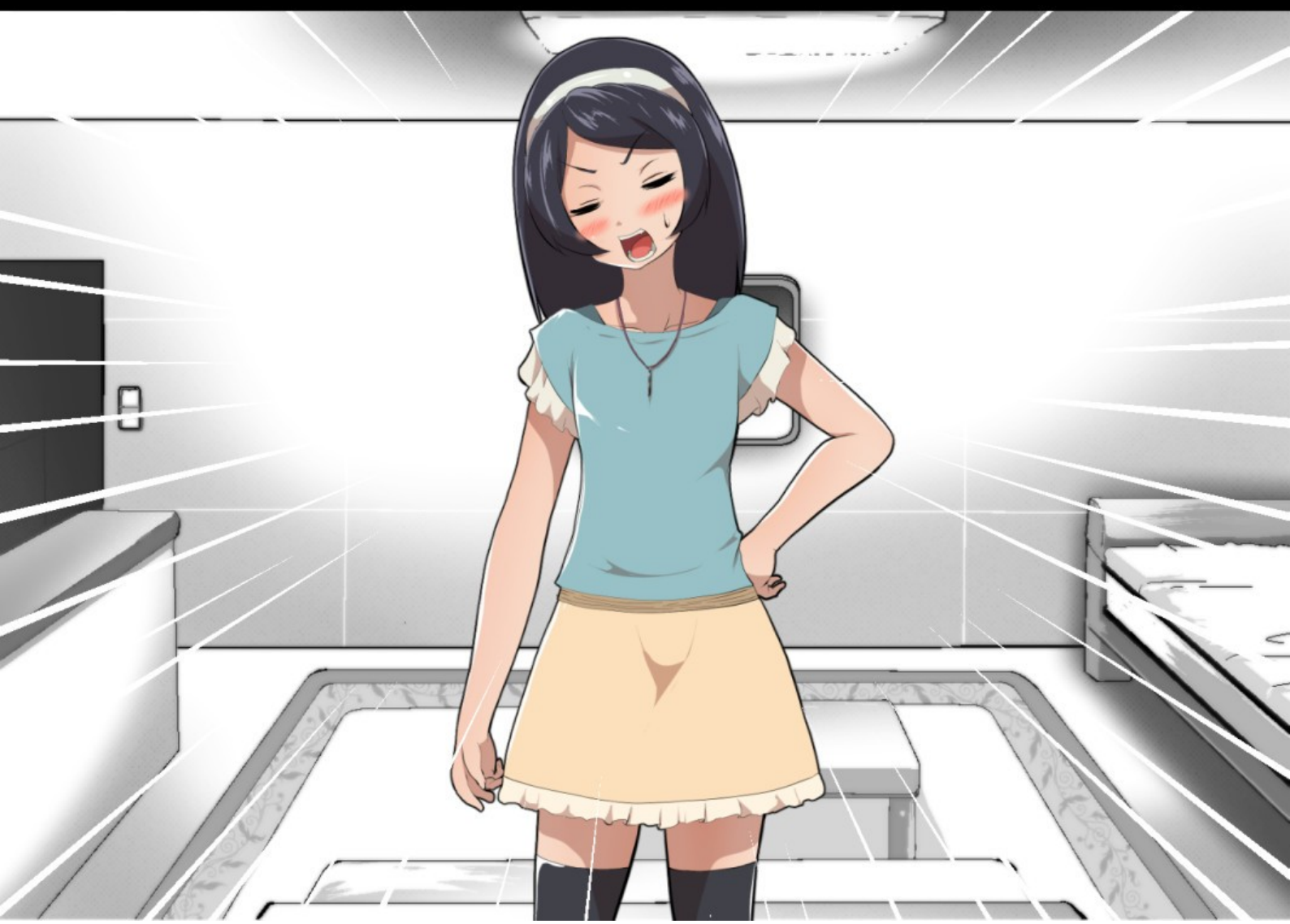
「早くっ、やるの？やらないの？？」

吉田「…やる」

あめりはもう吹っ切れ気味で事を進めた。

最早割り切りがいいなんて性格の話でもない気はした。

しかし吉田はあめりと…可愛い女の子と望んでいたことができるという現実で頭がいっぱいになっていた。



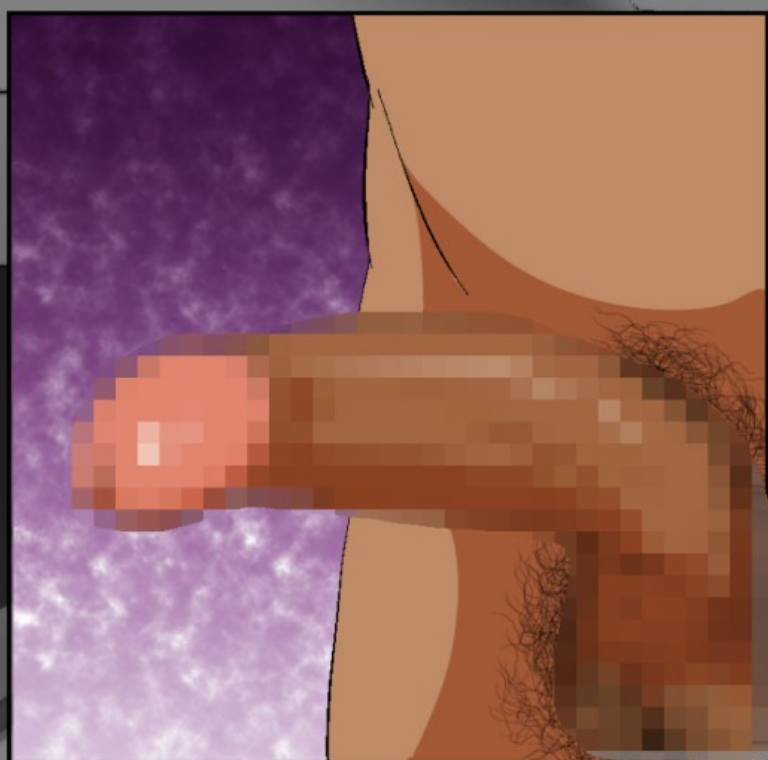
あめり「……デカツ!!」

吉田「ハアハア」

あめり「てか、長っ……!!」

吉田「ちんぽ……今まで見たことあった?」

あめり「……かなり昔だけどお父さんとお
風呂入ってる時に……ぶらぶらしてたイメ
ージは……」



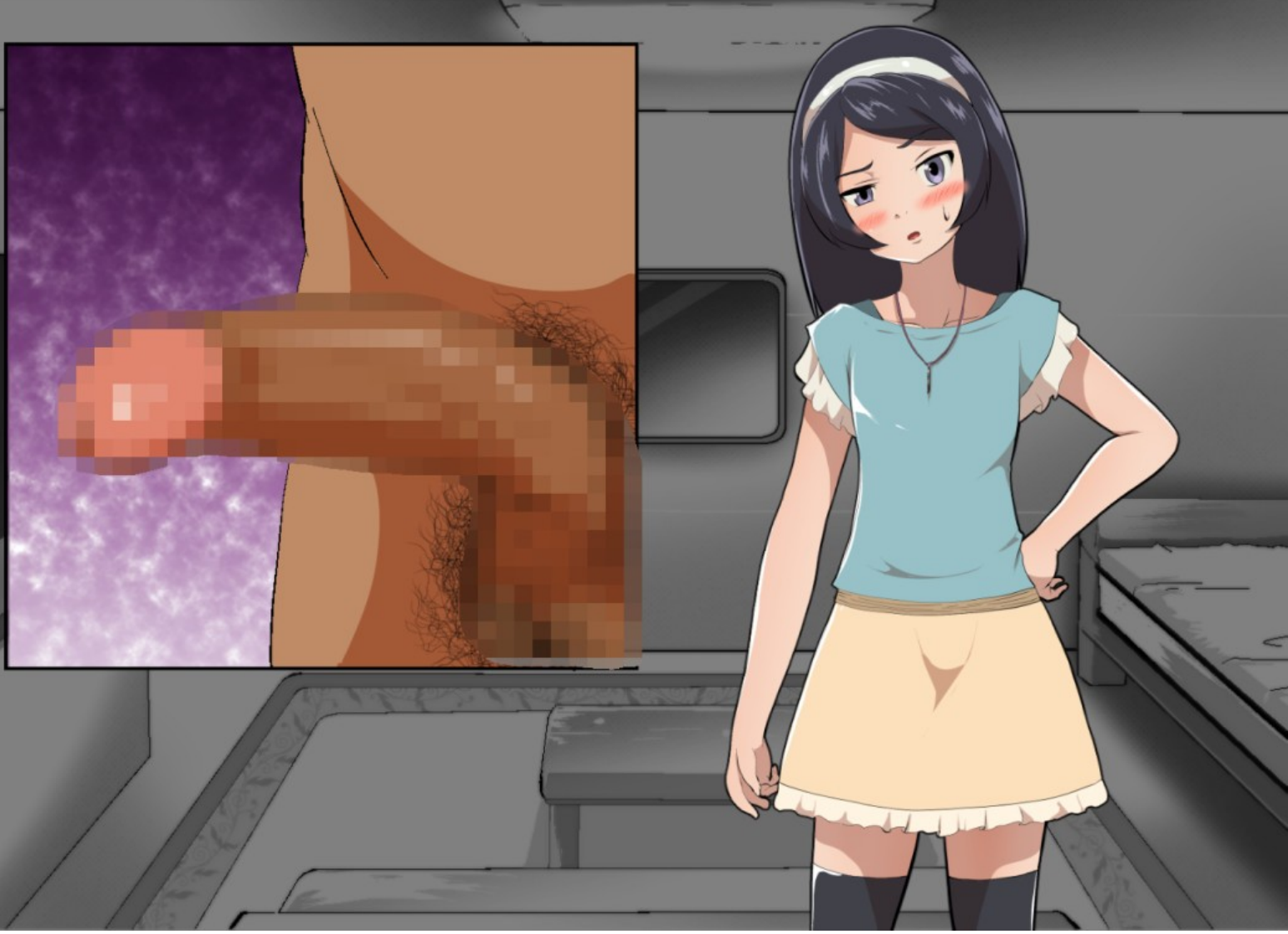
吉田「俺のはどっ?」

あめり「…シャキーンって感じ…?」

吉田「カッ」いい…?」

あめり「いや、なにソレ…カッ」いいって
言ってほしいの?」

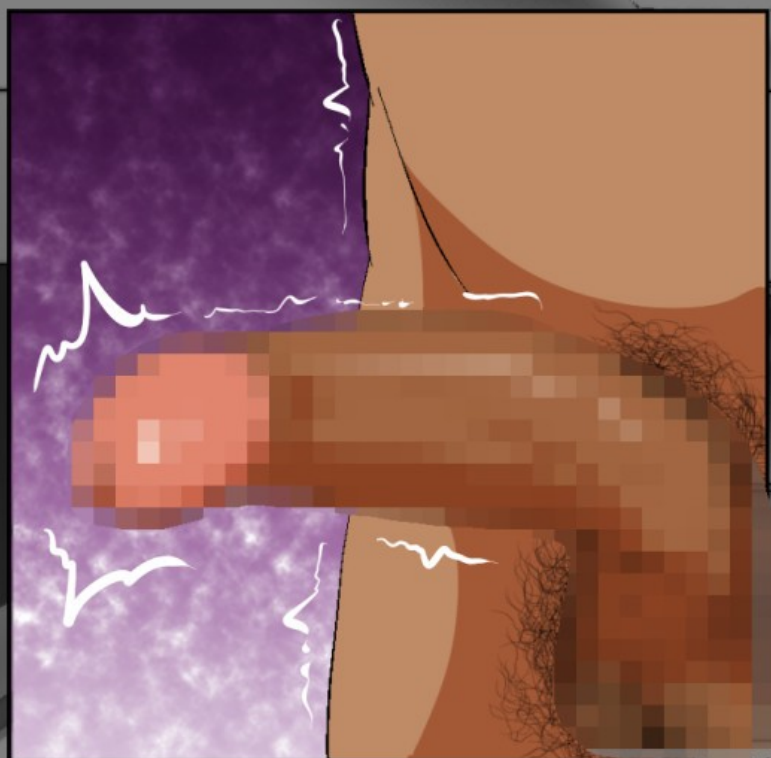
吉田「…」



あめり「…おじさんのちんちんカッ
いっ〜」

吉田「おお…!」

あめり「うわあ…!」



吉田「どうか…？初めて触ってみて」

あめり「熱い…あと、めっちゃ硬い…」

吉田「ハアハア…」



あめり「…男の人ってやっぱちんちんデカ
いとか硬いって言われるの嬉しいの…?」
吉田「…俺はその…長いって言ってもらっ
の興奮するっていうか…」

あめり「…まあ確かに長いけど…」

あめり「…おじさんの長いちんちんカッ」
いいよ…なが〜いちんちん素敵〜♪カ
ッ」いい〜♪」

吉田「〜〜〜っ…!」

あめり「(笑)」



そんなことを口にしながらあめりは何となくの認識で吉田のソレを上下に動かします。

年頃の女子であり、経験はなくとも友人とそういった話題になることはたまにあった。

吉田が短く呻き、見るからに気持ちよさそうにしているのでこんな感じでいいのかと行為を続ける。

あめり「ながながちんちんカッ」いいい
ながながちんちんカッ「いいい」



あめりもこんな冴えない中年が相手なのは不本意であるが、年頃の女子として異性の身体にそれなりには関心がある。

二人以外誰もいない空間だからこそ、相手はただの冴えないおじさんだからこそ変に気張らずこんなことが出来ていた。



吉田「~~~~っ!!」

あめり「わっ!!」

吉田の身体がビクンと跳ねるとあめり
の手で握られているソレの先から勢いよ
く白濁色の粘液が飛び出した。

腰をカクンカクンと動かし、少しずつそ
の威力は弱まりながら何度も発射される。
最後にじわっと溢れるように出てあめ
りの手を伝った。

吉田「ハアハア…」

あめり「…すげっ…射精ってマジでこんな
感じなんだ…」



吉田「…めちゃくちゃ気持ちよかった…」

あめり「あっそ…ヨカッタネ」

吉田「…ふう、ふう」

あめり「…おじさんの言うイチャラブって
こういう事する関係になるってことなん
だよね？」

吉田「…ああ」

あめり「…マジかあゝ」



頭を傾けなんとも腑に落ちないような表情をするあめり。

対する吉田は射精後の脱力感が体を巡りながらも、これからのあめりとの付き合い合い方に期待を抱いていた。



「んっんっん…」

「おお…お」

吉田「あめりちゃん、こっち見て」

あめり「…」

素直に吉田の方に顔を向ける。

二回以上年下の女の子が自分のソレを咥えながら、上目遣いで自分を見上げている。



あめりは初めての行為なのでどう動けばいいかもわからず、とにかく吉田の言う通りにするしかない。

吉田「口窄めて…ひよつとこみたいになつて…!」

あめり「…おじさん…私がやり方分からないのをいいことに、変なことでも指示すればしてくれると思ってない?」

吉田「いやそんなことは…お、俺はこっこのが好きだからそういっただけで」

あめり「…まあ、おじさんが喜ぶ形でするのが一番イチャラブ度上がるのかもしれないけど…」



吉田「吸って…結構強めでもいいよ」

あめり「んん…んっ…っ…」

吉田「ほおお…あ、イクーイクー…っ!!」

あめり「…っ!!」

吉田「…っ!!」



吉田「ハアハア…あめりちゃん、飲んで…
お願い」

あめり「…」

吉田の吐き出した粘液が口内を満たし、
頬が膨らんでいるあめり。

可愛い子はどんな表情をしていても結局可愛いのだろうが、その女の子の口の中には自分の性欲が物質化したものでいっぱいになっていると意識したら、吉田の興奮が治まることはなかった。



あめり「はあはあ…イチャラブっていう
か…これ、私の一方的な奉仕プレイって
感じじゃない？」

「おじさんは嬉しいかもしれないけど
さあ…何か私は命令されたことやらわ
れてるだけっていうか…」

吉田「そ、そうだね…じゃあ」



あめり「ちょっと…なにこれ！」

吉田「俺だけ楽しんでごめんね、今度はあめりちゃんにも気持ちよくなってもらおうからね」

「エロいことっていつのはあめりちゃん
の言った通り一方だけが満足して終わり、
なんて行為じゃないからね」

「お互いに気持ちよくななきゃ…」

あめり「いやっ、そういうこと言いたかったんじゃないくて…てか何でテーブルに縛り付けんの！大人しく括りつけられてた自分も自分だけど!!」



吉田「いただきます」

あめり「まって——！」

あめりの制止もスルーして頂きだした

吉田。

あめりの秘部に飛びつく。

あめり「~~~~~っ!!」



吉田「あめりちゃん気持ちいい？」

あめり「~~~~っ！バカ……！そんなのまだ、
分かん……ない……!!」

あめりにとって異性とのこういった行為
は、するのめされるのめ初めてである。

先ほどまでの啜える行為は吉田に快感を
与えるものだったが、これは自分が与えら
れる行為。

もどかしい、くすぐつたい、恥ずかしい。

いろんな感情が頭を駆け巡る。

はつきりとした気持ちいいという感覚は
まだなかった。



吉田「あめりちゃんめっちゃくちゃうま
いよ……！美味しすぎて止まなくなっちゃ
う」

あめり「言わなくていいからそういうの
……！」

お腹側なのか背中側なのか、身体の奥
の方からじわじわと快感と呼ばれるので
あろう感覚が伝ってきた。



あめり「あ……！……っ……っ……っ……！！」

気持ちいいという感覚が恥じらいを上回った。



あめり「はあはあ…」

吉田「あめりちゃん、これなんだか分かる？」

あめり「…そのくらい知ってるに決まってるでしょ」

吉田の手には避妊具が、コンドームがあつた。

食料や日用品の置かれた備蓄室の棚にしれつとあつた。

あめり自身も気づいてはいたがスル―していた。



吉田「…いい？」

あめり「…そういう相手に委ねるの嫌い」
「やりたいならそういうえばいいじゃん」

吉田「…ごめん、確かにその通りだ」

吉田「あめりちゃん、俺とセックスしてくれ」

あめり「…」



あめり「はあはあ…」

吉田「平気？」

あめり「んっ…もうなんともない…てか、なんか思ってたより別に痛みとかない、感じかも…」

吉田「十分慣らしたからね」



あめり「…おじさんちあゝわざと私のこと

恥ずかしがらせようとしてるよね」

吉田「あめりちゃん年の割には大人びてる

というが…しっかりしてるから」

あめり「…余裕かました小娘をひーひー

言わせたいってこと?」

吉田「どいぞこよひひひひ?」

あめり「~~~~っ!!」



吉田にそんな体でこられるので、あめりも悔しいのか意地でも表情に出さないように力んでいた。

しかし吉田からすれば、あめりのそういった年相応の反応がむしろ気持ちを滾らせた。

吉田「あめりちゃん…あめりちゃん…！
気持ちいいよ…！！」

あめり「ふう…んっ、…んい…！！」



吉田はあめりの表情を伺いながら腰を打ち付ける。

口には出さないだろうが恐らくあめりも気持ちよさは感じている。

吉田「~~~~っ!!」

あめり「~~~~っ!!」

閉鎖空間に閉じ込められるという窮屈な状況で得た刺激は、精神的にも肉体的にも味わったことのない解放感であめりの全身を満たしていた。



あめり「はあはあ…」

吉田「ハアハア…」

あめり「…気持ちよかった？おじさん」

吉田「あめりちゃんこそどうだった？」

あめり「いや、とりあえずおじさんどうだ

った？教えてよ…(笑)」

吉田「いやいや、あめりちゃんから…上手

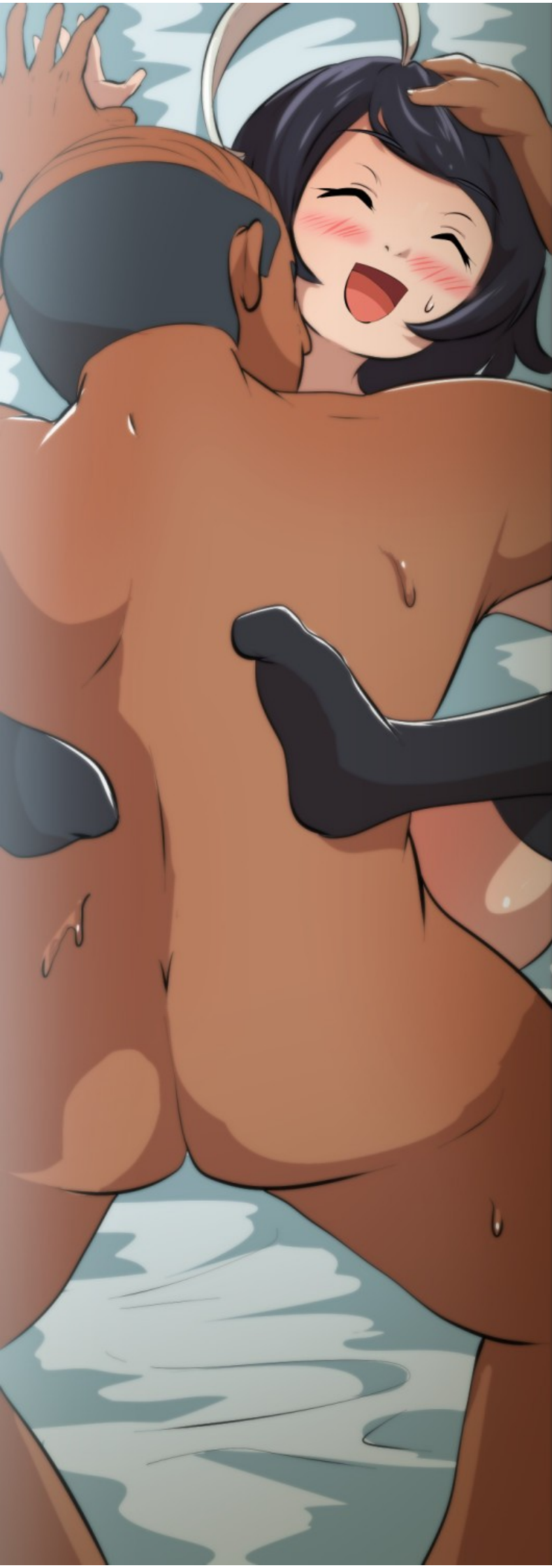
く出来てたか不安だし…(笑)」

あめり「いやいやいや…(笑)」

吉田「——！」

あめり「——!!」

そんなやり取りを数分した後、どちらも譲らなかったのもう一戦やった。



あめり「…ねえ、昨日の今日でよくできる
ね」

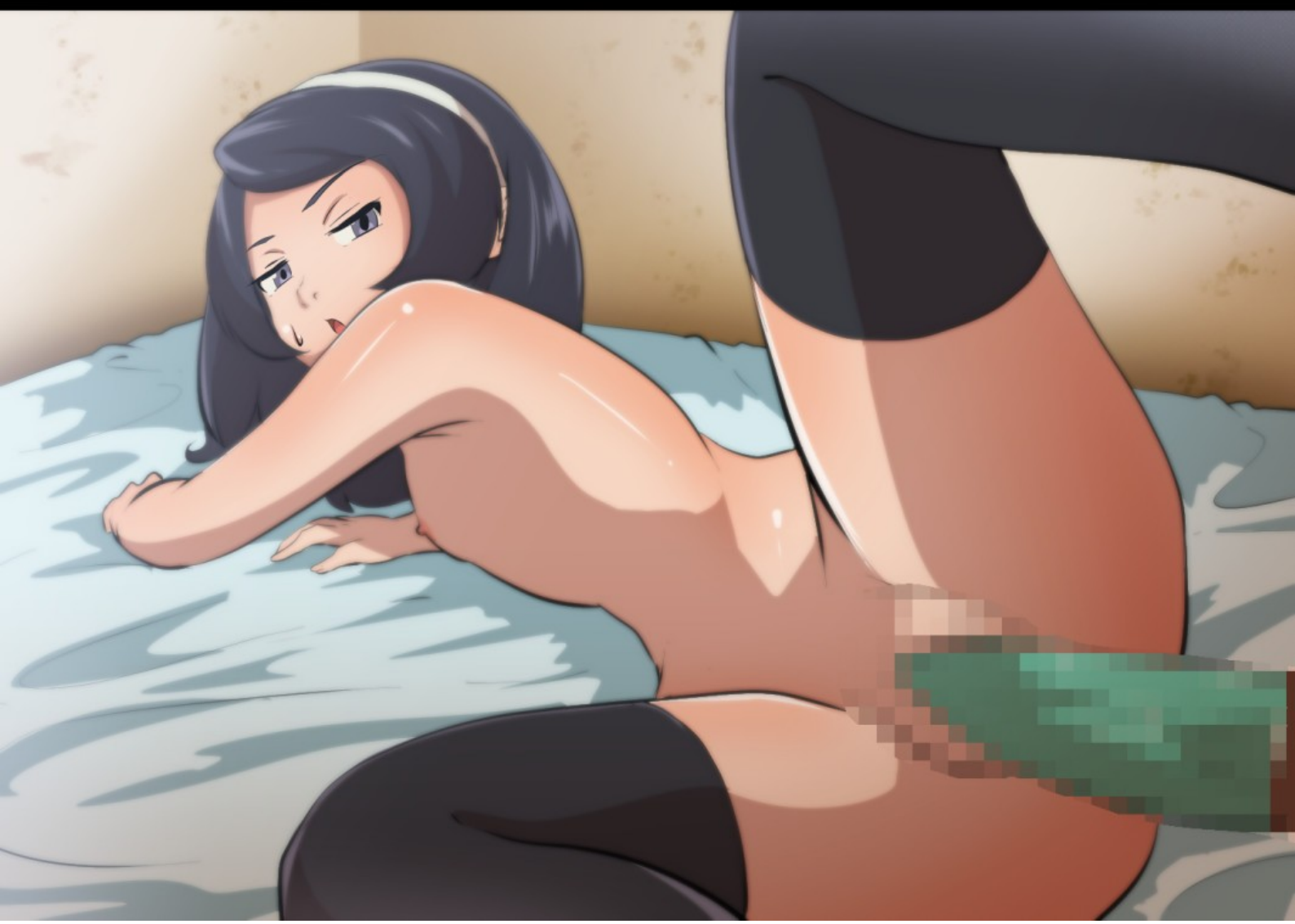
「体力的に疲れたりとかしないの」

吉田「ぜ、全然…こんなかわいい子と出来る
って思ったらやってない時間がもった
いないって感じちゃうくらいで…」

あめり「…」
「飯食べてる時とかもそんな
の思ってる訳？」

吉田「まあ…うん」

あめり「うわあ…」



吉田「あめりちゃんこそ、よく付き合っ
てくれるよね」

あめり「どうせ他にすることないし…」

「これで部屋を出られることに繋がる
ならって考えてるだけだから」

吉田「それにお互い気持ちよくなれるし
ね…」

あめり「別に私はそんな…」

吉田「じゃあ気持ちよくなってくれるま
で付き合っであげるね！」

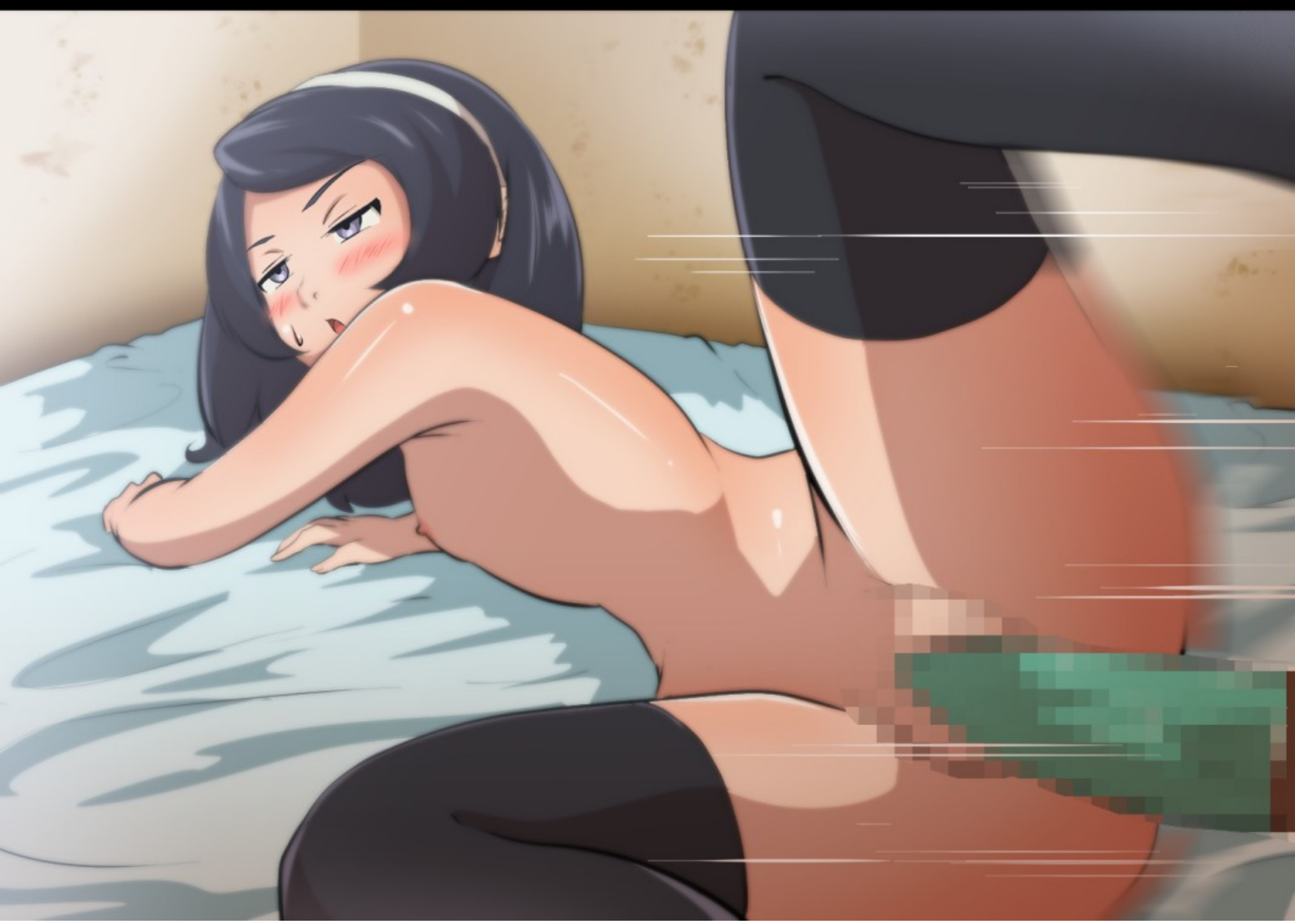
あめり「そういう事じゃ…ない！」



あめり「…てか、今更だけどイチャラブの
定義って何？なにがどうすればいいの」
吉田「とりあえず」「コミュニケーションだ
よ、お互いをじっくり知るためのスキン
シップ！いっぱいしよう!!」

あめり「ふっ！そんなの、おじさんにだけ
都合のいいような考え方で…！」

吉田「きっかけが肉体的なつながりだろ
うとそれが意識的な繋がりになればいい
だけだよ！」

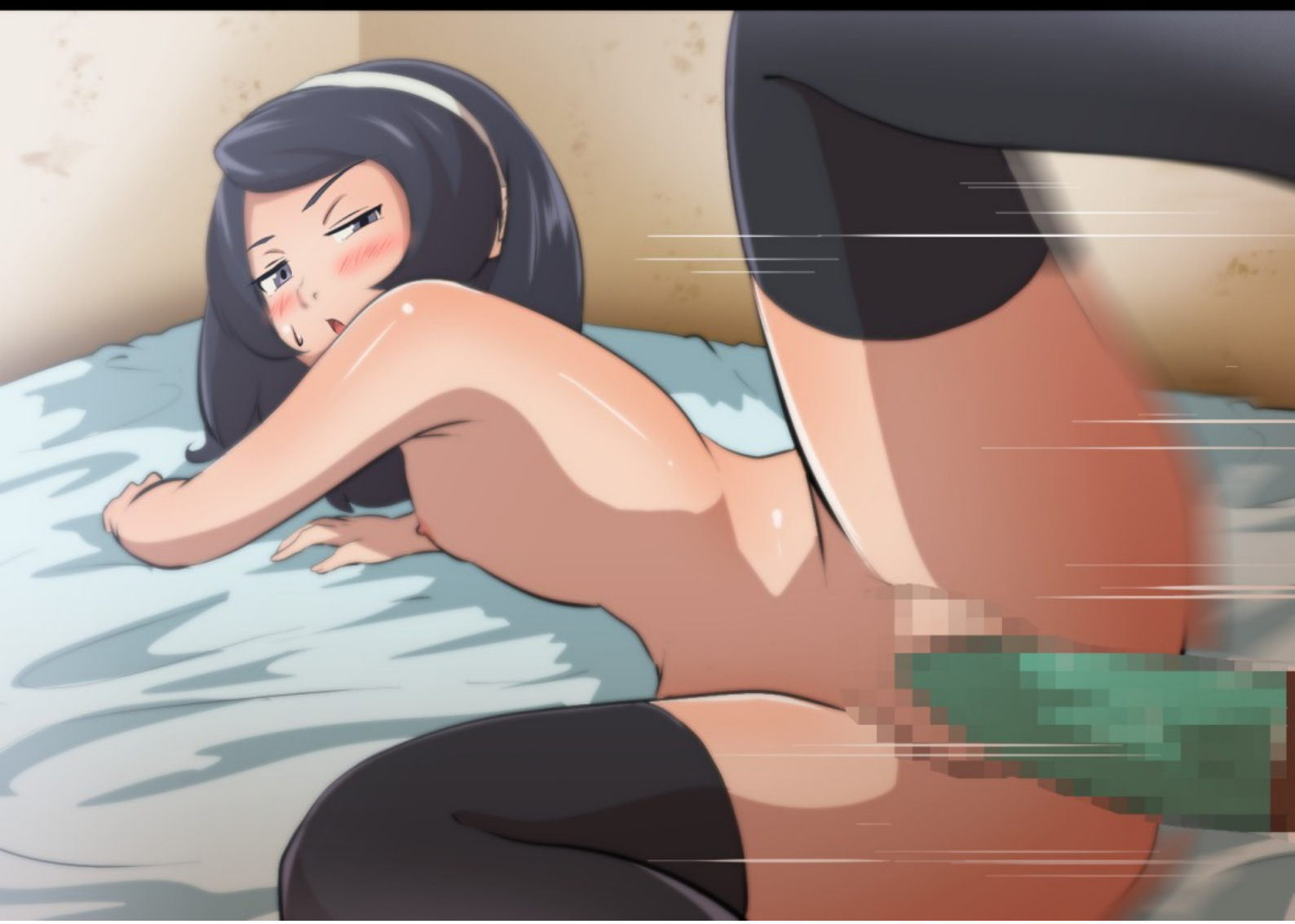


あめり「…そういうの堕とすっていうん
じゃないの？」

「おっさんってそうやってなし崩しに
女の子を手籠めにするんだね…怖あ」

吉田「…結果としてお互い思いあう様
になるなら無問題！」

あめり「~~~~~」



暑くもなく寒くもない室温。

いつもなら適温を保つための空調音
だけが聞こえていた部屋。

今はベッドの軋む音とお互いの身体
を打ち付ける音がリズムよく聞こえる。

吉田「あめりちゃん気持ちいい?」

あめり「…っ」



吉田「…じゃあこれだけは答えてほしい、
苦しいとか痛いってことはない？だとし
たら流石にやめるから…」

あめり「…別に、痛くはないでしょ…」

吉田「じゃあ気持ちいい？」

あめり「…うぎっ」

「おじさんさあ、何がなんでも私にそう
いっこと言わせたがるよね」

吉田「あめりちゃん可愛すぎて…」

あめり「…もしかして私がこうやって抵抗
してんのを楽しんでたりする？」

吉田「うん」

あめり「…」



あめり「じゃあ気持ちいい、めっちゃ気持ちいい」

吉田「…」

あめり「おじさんとのセックス気持ちいいです(笑)いえーいwww」



吉田「よかった、それならいっぱいしようね(笑)」

あめり「おっ……!」

吉田の思う様に事が進むのが何となく腑に落ちないあめり。

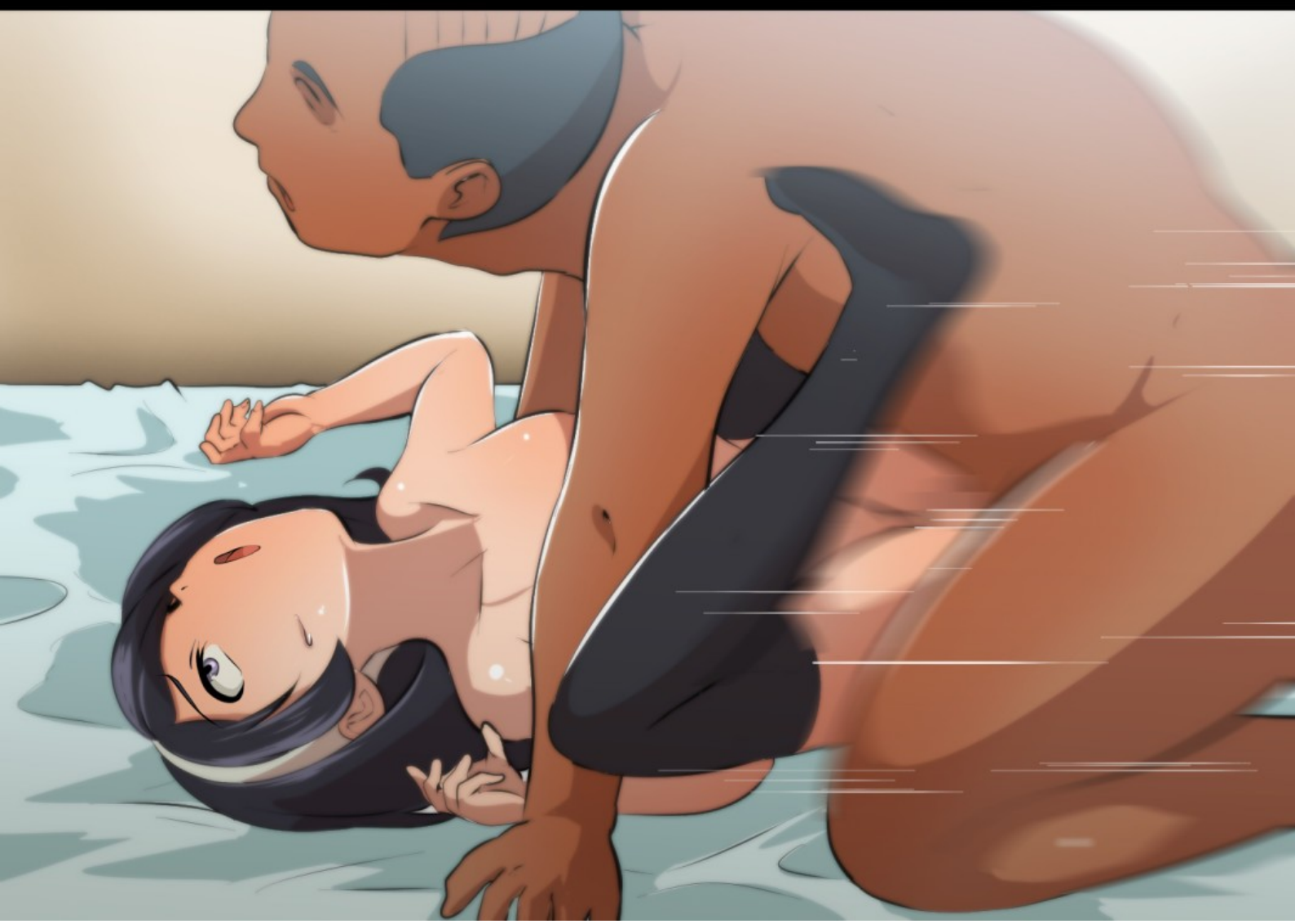
なんだかんだ付き合ってしまったている自分への思い。

あめりはつい、天の邪鬼的な返しをしてしまう。

しかしそれは吉田にとっては何も不都合な事ではない。

あめり「~~~~っ!!」

吉田「あめりちゃん気持ちいい?」



あめり「っ……うん、気持ちいいけど…？
それがどうかした？（笑）」

吉田「いやいや、ごめん聞いたただだよ♪
気持ちよくてよかった」

あめり「セックスが気持ちいいなんて当
たり前のことでしょー？おじさん変な事
言わないでよね…（笑）！」



吉田は遠慮なく腰を打ち付ける。

あめりも今さら発言を取り消すこと
も出来ず半ば意固地になっていた。



吉田「あめりちゃん……！」

あめり「んっ……!!」

吉田「……」

あめり「……」

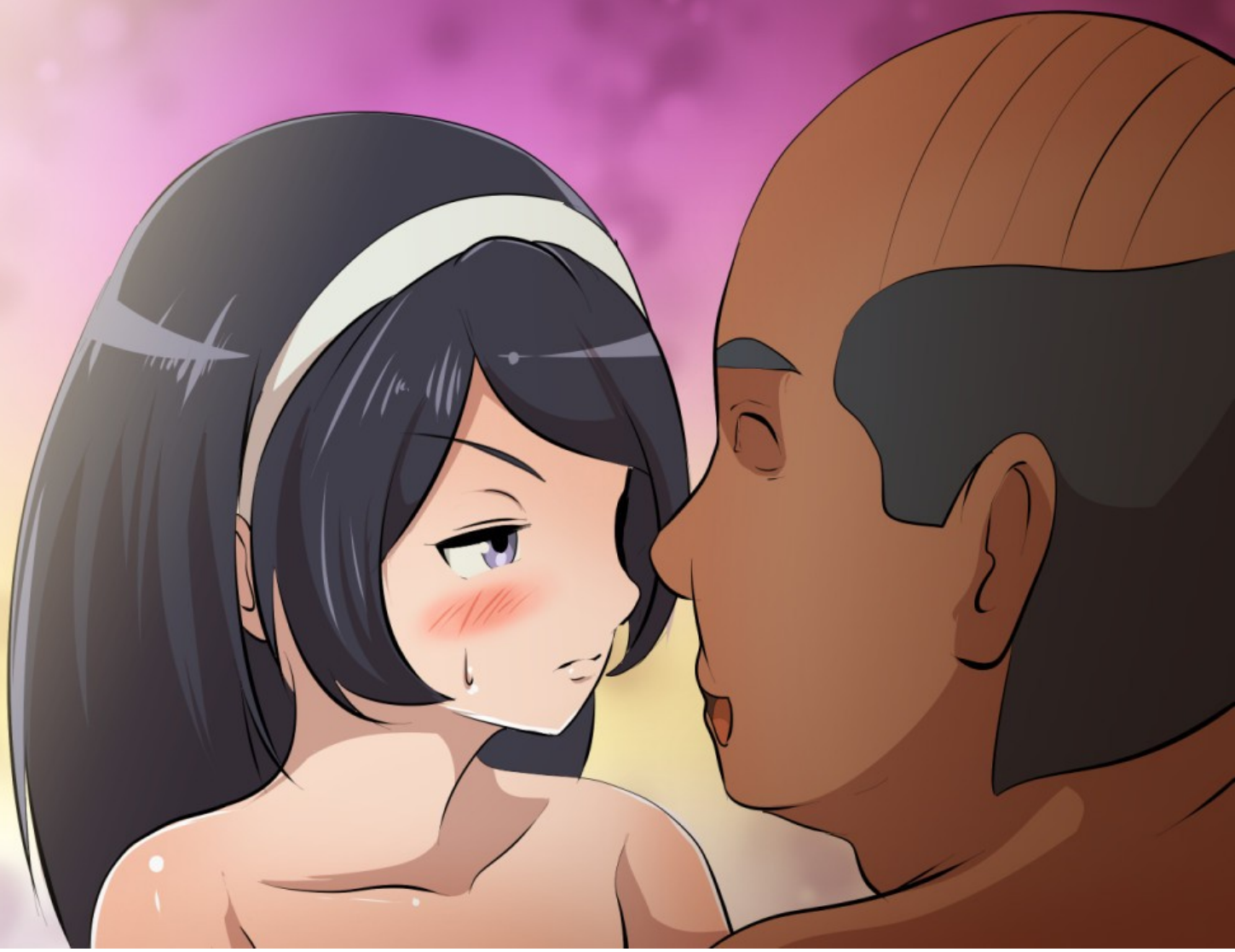


急に吉田の顔が近づいたと思ったら、それはすでに行われていた。

あめりは目を見開き、驚く表情を見せたが数秒してからゆっくりと目を細めて呼吸を落ち着ける。

吉田「…あめりちゃん、今までキスしたことがあった？」

あめり「…」



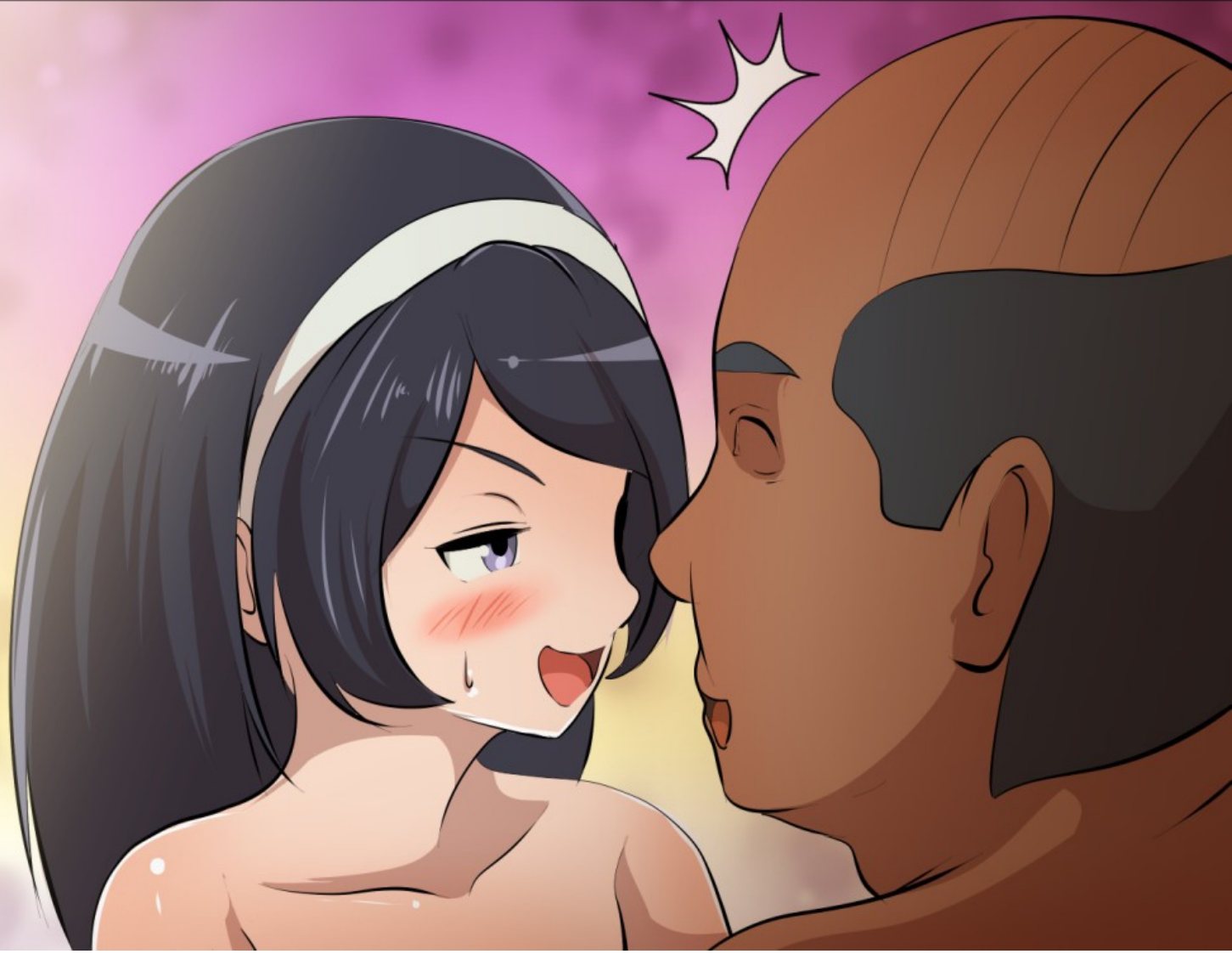
あめり「うん、あるけど？」

吉田「え」

先ほどまであめりを驚かしていたのに、
すぐさま吉田が驚き返された。

あめり「…変な部屋に閉じ込められた時に
一緒にいた冴えない中年おじさんに奪わ
れちゃったんだよねw」

吉田「…」



あめり「もっとロマンチックな雰囲気でするのに憧れてたけどまさかあんなあっさり済まされるなんてなあ〜(笑)」

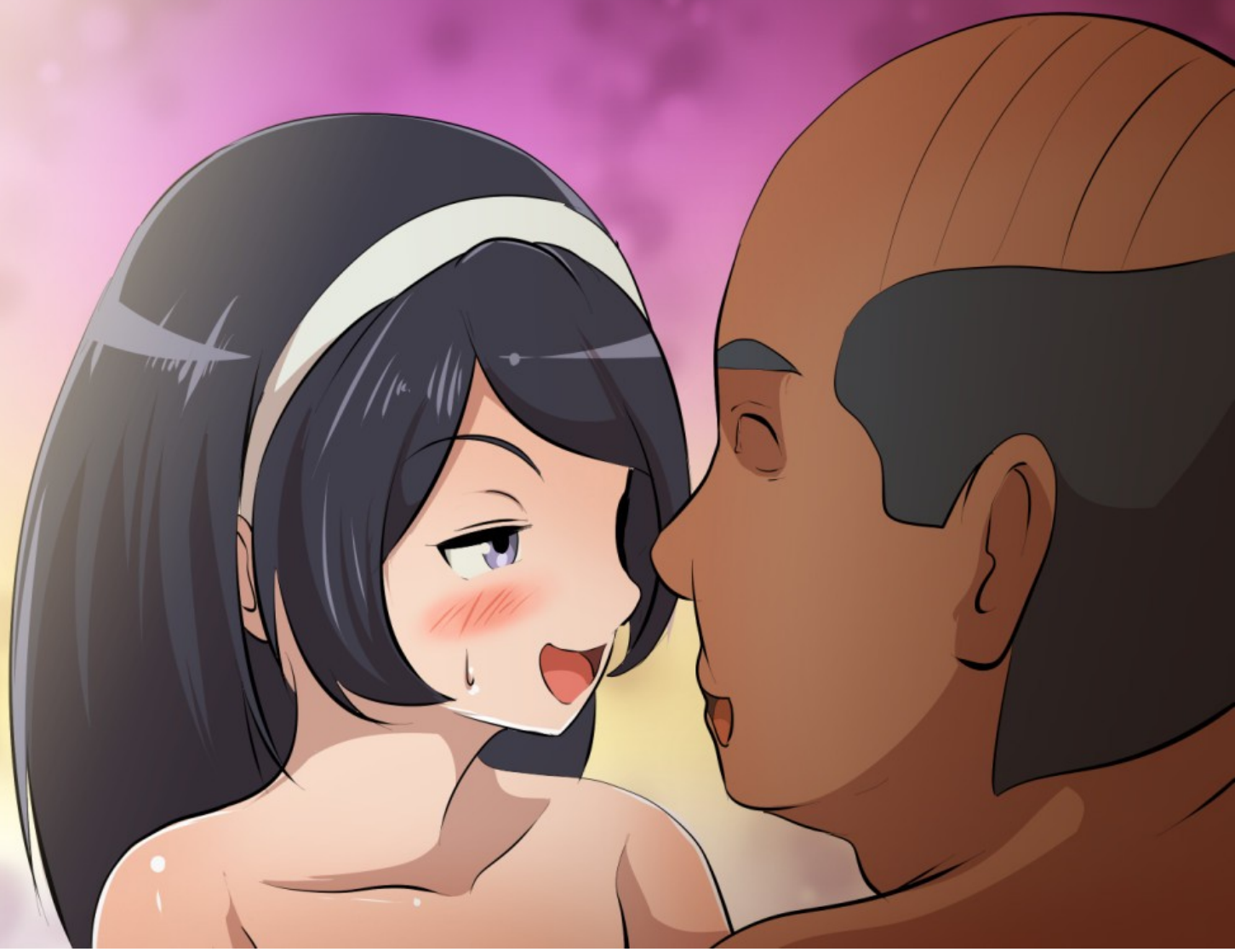
吉田「…あめりちゃんは情熱的なのがよかったの？」

あめり「…うん(笑)」

吉田「そのあとはどうしたの」

あめり「うーんどうなったっけ〜? 思い出せないなあ〜w」

吉田「…押し倒されて貪るようにキスしまくってそのまま熱いセックスをしたとか」
あめり「あゝ、言われてみたらそんな感じだったかも〜(笑)」



吉田「あめりちゃん!!」

あめり「んっ……♪」

吉田「あめりちゃ…あめりっ!あめりい…!」

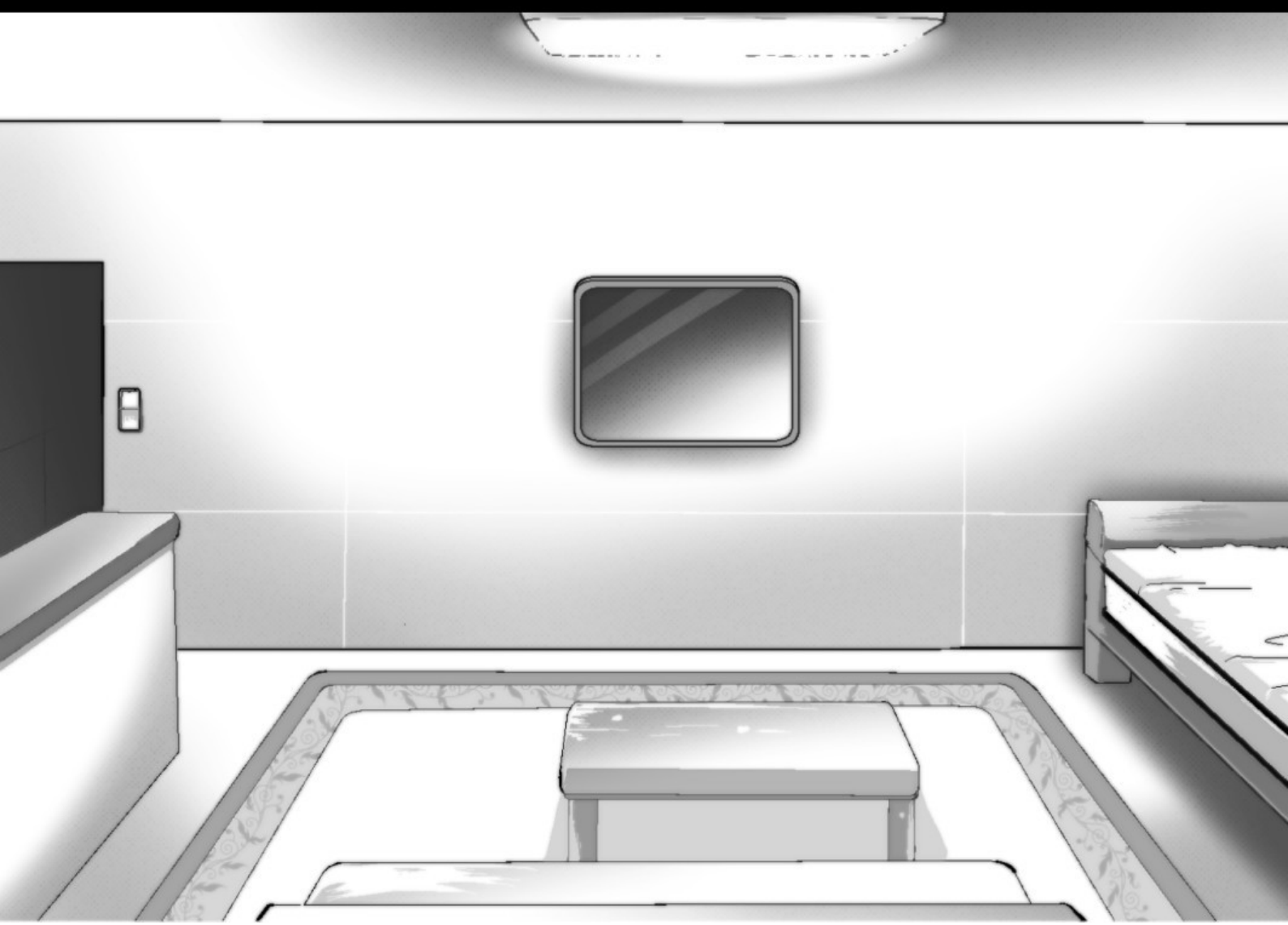
あめり「…♪」

5回やって一緒にお風呂に入った(お風呂でも一発やった)。



あめり「…おまたせ」

和田「…ごうごう」



あめり「…ホントなにこれ」

吉田「めっちゃ似合ってるよ、ヒロい…!」

あめり「あっそ…ヨカッタネ」



吉田が何となく寝巻姿のあめりを見ていた時。

支給(?)されたものなので特にこれといった飾り気もないシンプルなデザインだったが、もっとエッロイドすけべ下着みたいな寝巻にならないかなあ、と思った。

そうしたら、あめりの寝巻がいつの間にかこんなことになっていた。



あめり「あのさ、イチャラブって…」

吉田「うん？」

あめりが切り出す。

あめり「…お互い好きになるってことだよ
ね？」

吉田「…そうだね」

あめり「おじさんって私のこと好き？」

吉田「…好

あめり「好きなんだよね？」

吉田「…うん」

あめり「正直でよろしく」



あめり「…私はどうだと思う？おじさんのことどう想ってると思っ？」

吉田「…自分で言うのもキモいけど、好きだったら嬉しい」

あめり「へえ」

吉田「…」

あめり「おじさん言ってたよね、きっかけが肉体的なつながりだろうとそれが意識的な繋がりになればいいだけ！って」

吉田「言った、かも」



あめり「じゃあやってみてよ」

「私のこと、堕としてみて?」

吉田「じ、自分から言う事かなそれ…」

あめり「それで両思いになるならイチヤラブ
関係になれたってことだし、多分ここから
出る条件も達成するわけじゃん?」

「私の性格上、おじさん大好き♡愛して
る♡♡♡♡♡なんてなるわけないでしょ?口で
いくら甘いこと言ったって響かないんだか
ら体で教え込むしかないよね?」



あめり「ほら、チャンス与えてあげてる
んだから」

「生意気で余裕かましてる小娘をグ
デグデにしてみなよww」

「お・じ・さんww?」



吉田「ハアハア…あ、イへ…！」

あめり「いいよ～出てて出て～」

吉田「～っっっ!!」

あめり「はあ～いこれで三発目～♪三ッ三ッ三ッ達成(笑)」



吉田「ハアハア…ちよつと飲み物休憩…」

あめり「もうおじさんだらしがないなあ」

吉田「…これで本番、始めていいんだね？」

あめり「うん♪」

吉田「3回又いてからとは…」

あめり「ハンデっていつか…マジで私のこと好きならこのくらいしてても何の支障もないはずでしょっ」



吉田「…あめりちゃんのごことは好きだけど
…やっぱり結構疲労感は溜まるかも…」
あめり「え〜???おじさんの私への愛って
そんなもん?せつかくの待ちに待ったセ
ックスタイムだよ〜?」

吉田「…セックスし放題?」

あめり「うん♪何回でも何時間でも気の済
むまでずう〜と好きなだけやってい
いよ(笑)」

吉田「どんな体位でも?」

あめり「もちろんwなんでもしてあげる〜
ww」



吉田「よっ、じゃあ早くやるっ」

あめり「…え」

吉田のソレは瞬時に怒張した。

自慢の長さを誇るソレはピンと伸びている。

戦闘準備万全といったように。



吉田「ふっ…ふっ…お…!!」

あめり「~~~~っ」

あめりを後ろから抱きかかえそのままバックで突く。

あめりの足は床についておらず完全に主導権は吉田が握っている形だった。



つま先を何とか床につけようとパタパタ動かすが、吉田がその様子を見て腕をよりぎゅうつと体に絡め、体勢を崩さないようにする。

あめり「あ…くそ、今つきそうだったのに…」

吉田「一生懸命足つけようとしてるあめりちゃんかわいいよ」

「恥ずかしい?こんな一方的にモノミたいにやられるの」

あめり「別に…?てかこんなプレイ強要してイチャラブになれると思ってんの?」



吉田「あめりちゃん実はこういうプレイ嫌いじゃないでしょ」

あめり「…ちあゝぶじでしよう（笑）？」

お互いべったり体を重ねてしっかりと男女の営みを行っているのに、相手に指摘されるような弱みは見せまいと、内心距離を図りながらやりとりしている。



吉田「あめりちゃんは正直に言わないだろうし……うやって体で分からせるからね……♪」

あめり「どーぞどーぞ♪お好きなように(笑)
でも体勢的にもキツイだろうし無理はしな
いでね♪中・年・お・じ・さ・んなんだから(笑)」

吉田「ははは♪」

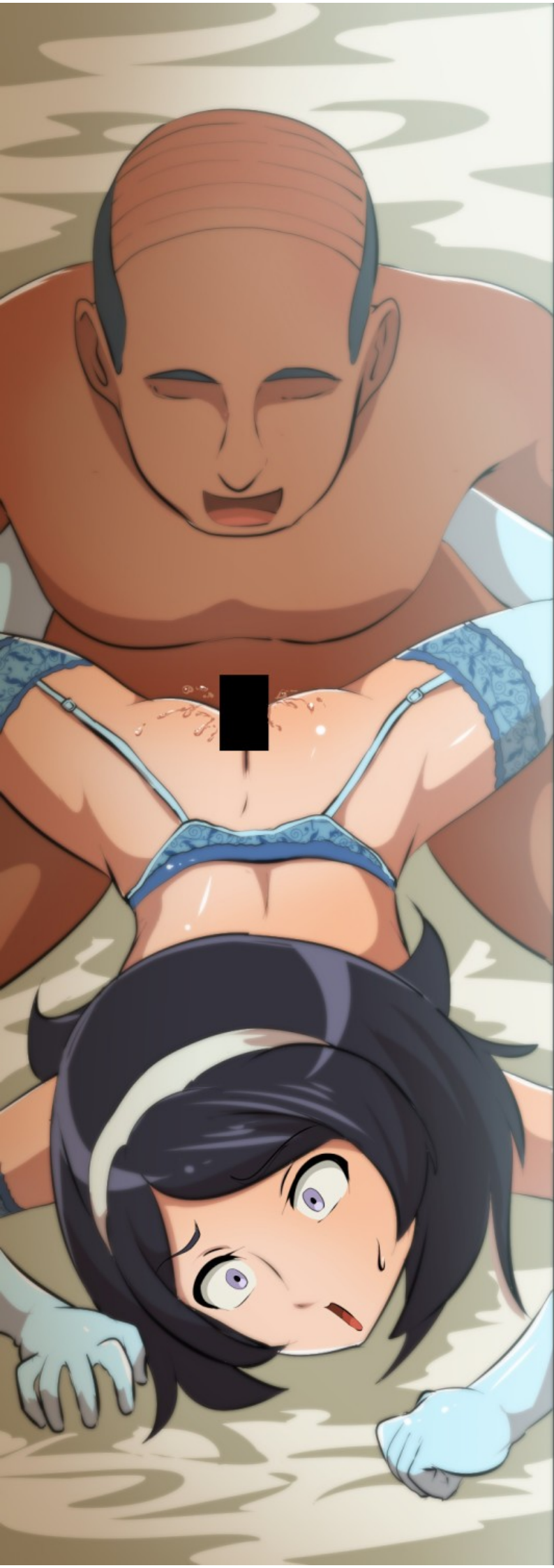
あめり「あははは♪」

二人「~~~~っ!!」



あめり「おっお…おっ…!!」

吉田「あめりちゃんは前と後ろどっちが好き？」

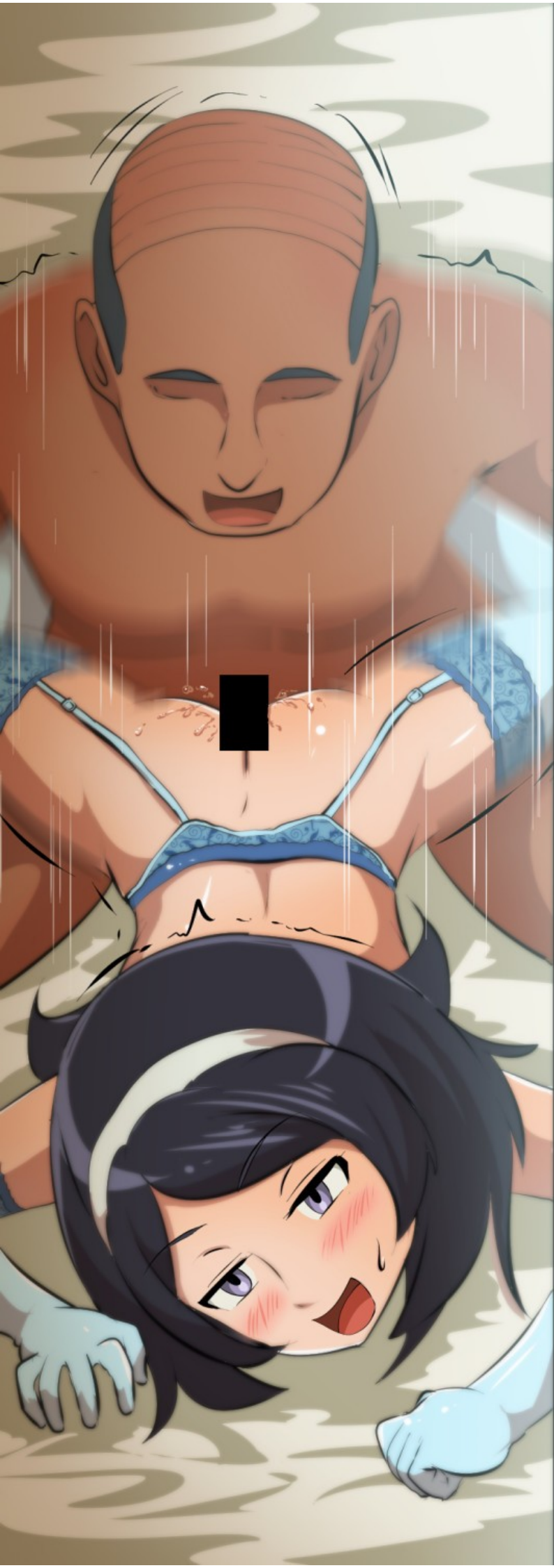


あめり「…知らなくい…(笑)」

あめりは茶化す様なトーンで返答する。
しかし、発する言葉の端々で息を切らし、
呼吸が乱れてきているのが分かった

吉田「とはいっても分かってるけど
ね…(笑)あめりちゃん後ろの方が好
きでしょ」

あめり「…はあ?..」



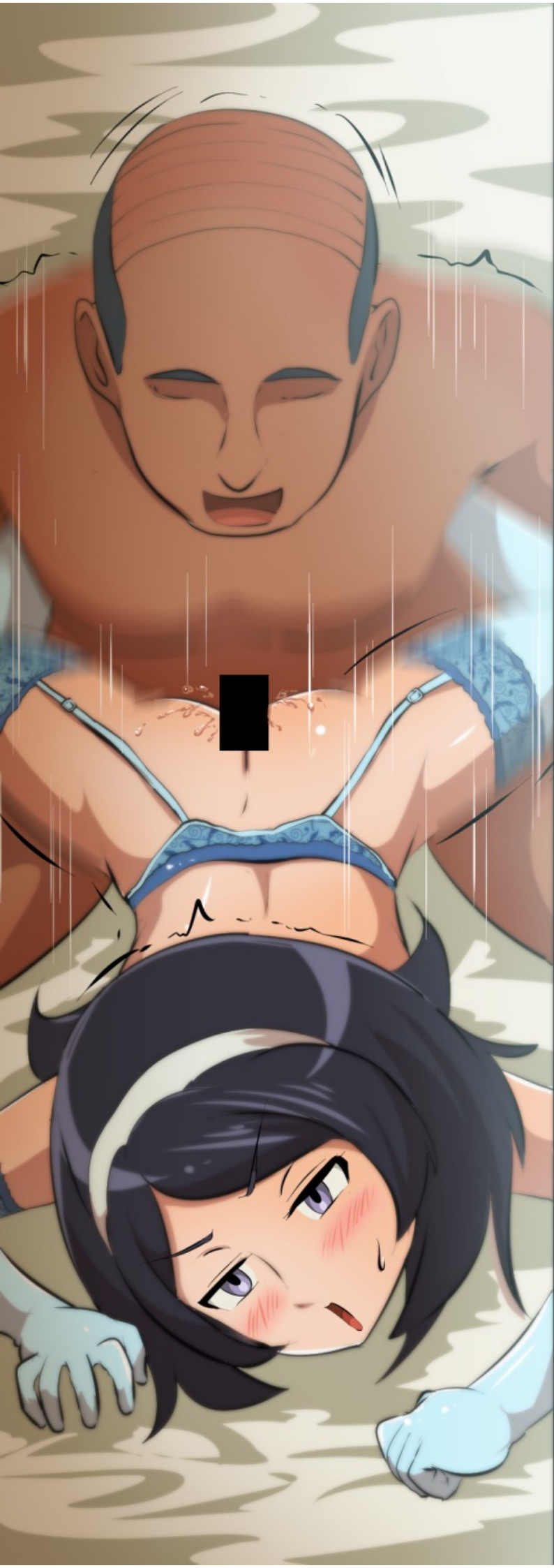
吉田「こっやってのしかかるみたいなプ
レス系の好きなんだよね〜?」

あめり「いや、勝手なこと…言わな、いで
…くれますかーw?」

吉田「そうだねごめんごめん、勝手な
こと言って」

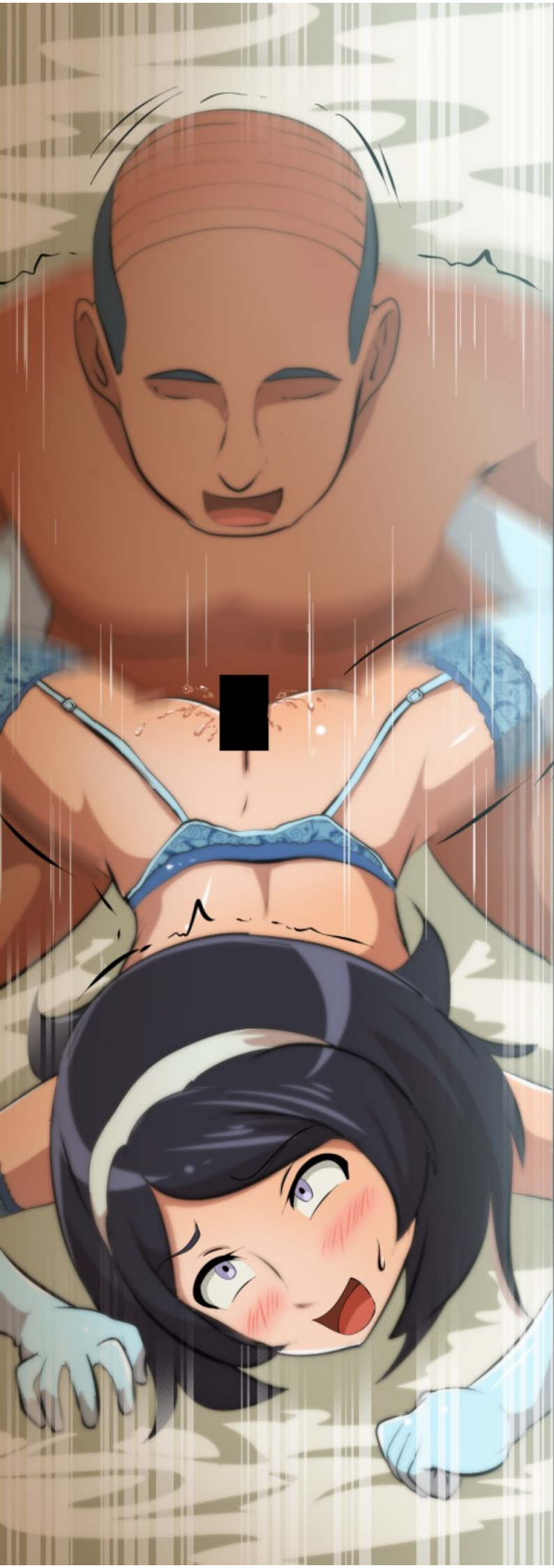
「あめりちゃんの身体に直接聞い
たほうが手っ取り早いもんね…!」

あめり「〜っ!」



吉田「あめりちゃん、ちんちん気持ちいいですか？？
あめりちゃんのだーい好きなバックいっぱいしてあげる
からねー」

あめり「！！」



あめり「はあはあ…」

あめりは四肢をだらんと力なく投げ出し、身体を
ベッドに沈み込ませていた。

うつ伏せで頭だけを横に向けて、呼吸を整えている。



吉田「少し休憩しようか、飲み物取ってくるからあめりちゃんもしっかり休んでね」

あめり「あ、ありがと…」

先ほどまでガンガン攻められていたが、火照った身体が水分を欲しがり、素直に敬礼を返してしまう。

返答した後に、余裕がないように思われたかもしれないと少し慌てた。



あめり「…てかやっぱりぶっ続けでなんて
出来ない感じ？おじさんじゃ体力的にも
キツイでしょ(笑)」

持ち直そうと、ゆとりがあることを主張
しようと思図的にそんなことをいってし
まうあめり。

吉田「まあそうだね、でもまだまだやるか
らね…覚悟してね」

あめり「……」

吉田「トイレ行きたかったら済ませてきた
方がいいよ」

「やってる時に催しちゃっても多分止め
られないから」



あめり「…あ、あどれくれいするじもり…？」

吉田「あめりちゃんが俺を好きになってくれるまで」

あめり「…」



ギッシギッシ、ギッシ……。――。

ベッドの軋む音。

互いの口から吐かれる呼吸音。

少しだけ上がった室温を適温に戻そうと
空調音が僅かに大きくなっていたが、そんなこと気づかないくらいに空間を漂っている音。

あめり「うおっ……おお……お……!!」

吉田「あめりちゃん……!あめりちゃん……!!」



吉田の巨軀が細く小さいあめりの身体にのしかかる。

押しつぶす様な勢いで腰を打ち付けている。

とはいっても、与えられているのは痛みではなく快感。

あめりの表情がそれをしっかり証明していた。

半開きにした口、トロンと焦点の定まっていない目。

その少し滑稽にも思える顔に苦痛という感覚は一切読み取れなかった。



吉田「あめりちゃん好きだ！愛してる！
愛してる!!」

あめり「おっお…お…!!」

あめりはもう喘ぎ声でもない、呻くよ
うな吐息混じりの声を短く発するだけ
だった。

どうみてももう余裕は感じない。
が、吉田はそれを煽るような真似はし
なかった。



吉田「あめりちゃ——あめり!!」

「好きだ好きだ好きだ!!愛してる!俺の女!!」

あめり「~~~~っ!!」

吉田「あめり!あめり!あめりい!!」

吉田も余裕などもうみせていなかった。

ひたすらガンガンと股間のソレをあめりの中へ何度も出し入れしては、想いを伝えようとしている。



吉田「愛してるー！愛してるー！愛してる!!」

「あめりー！あめりい!!俺の女になれ！俺の女になれえ!!」

あめり「お…おじさ…おじさん…!!」

吉田「おじさんじゃない…！ダーリンだ!!
分かったかあめりい!!」

あめり「あっ…あ…っ……………」
「!!」



他の誰に聞かれているわけでもない。
他の誰の邪魔も入らない二人だけの空

間。

こんな説明のつかない状況にかこつけ、
中年男性が親子間の年の差もある若い女
をモノにしようとしている。

しかし、男の一方的な行為というには、
女の反応からは何うことはできなかつ
た。



吉田「ハアハア…ダーリンって言え！俺が好きなら!!」

あめり「はあはあ…」

吉田「…」

あめり「…」



あめり『ダーリン♡』



あめり「ダーリン♪私の…愛しのダーリン♪」

吉田「…俺のこと愛してる?」

あめり「うん!大好き愛してる♡私は…ダー

リンの女だもん♪」

吉田「俺と結婚したい?」

あめり「する!したいじゃなくするの!!

絶対だからね♡」



本田「あふふ…♡」

あふふ「ダーコンハ…♡」

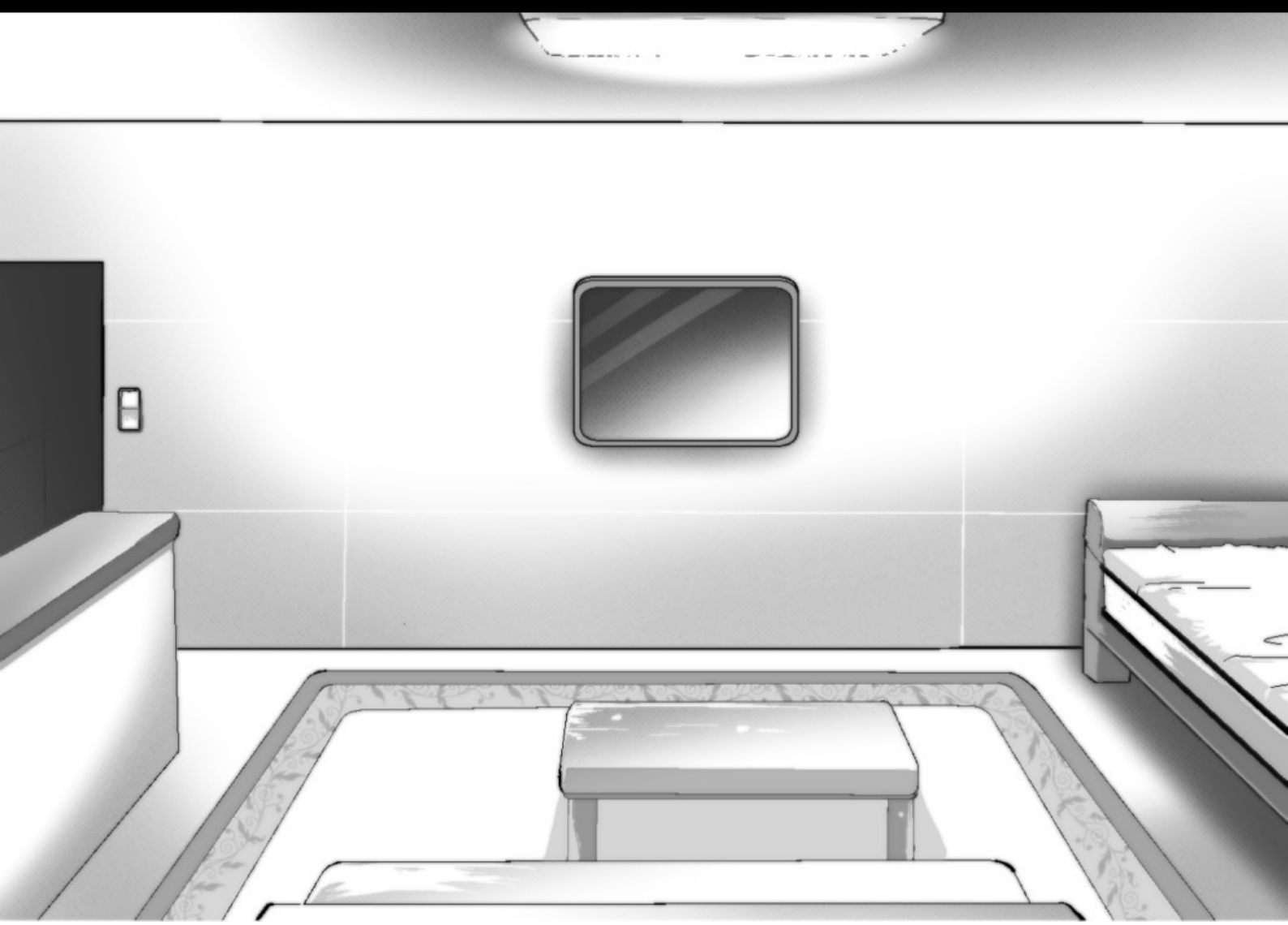


ピー……。

完全に二人きりの世界に入り込んで
いたところ、いきなり機械的な電子音が
聞こえた。

テレビモニターが久しぶりに点いて
いた。

メッセージが表示される。



『おめでとうございます』

二人は完璧な

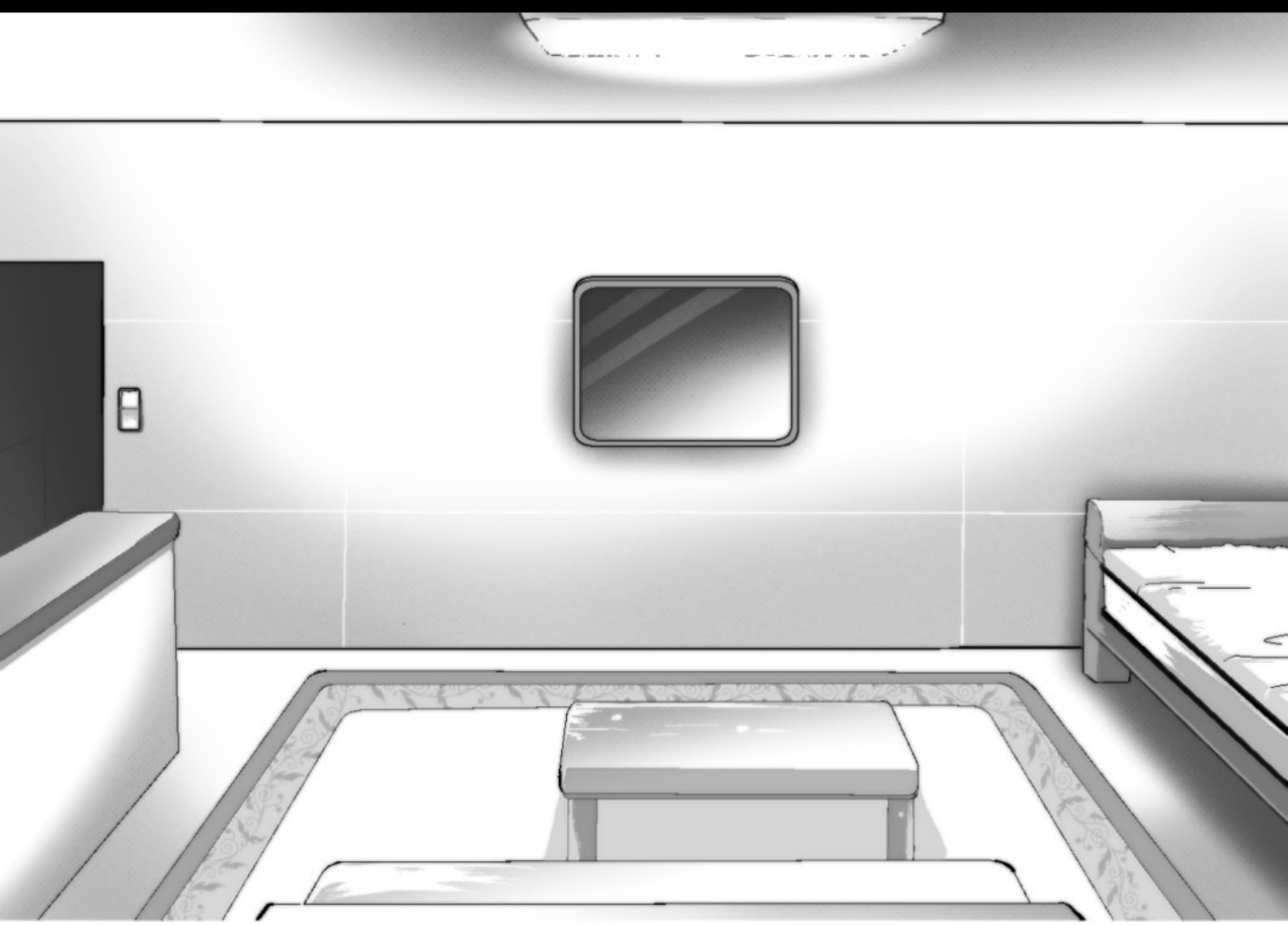
イチャラブバカップル関係に

なりました』

吉田「…」

あめり「…」

『おめでとうございます。
二人は完璧な
”イチャラブバカップル関係
になりました。』



あめり「…はい、じゃあそろそろいじょうど。
おじさんご苦労様〜」

吉田「あ、おい！あめり…ちゃん!!」

あめり「私お風呂入ってくるね」

二人きりだからこそできていた、恥ずかしくなるようなやり取りをしている最中に急に介入され、でろでろに骨抜き状態だった意識を急に現実に戻された。



巻き散らかっている使用済みのゴムや
ティッシュ。

べたべたに甘い空気が漂っている空間
で、あんなことを言ってしまった恥ずか
しさから、あめりは必要以上に澄ました
態度を見せようとしていた。

あめり「ちよ、まず私から体洗うから！」
吉田「俺が洗ってあげるよ、さあさあ！」
あめり「うげっー！」

吉田もあめりと一緒に浴室に入ってい
った。



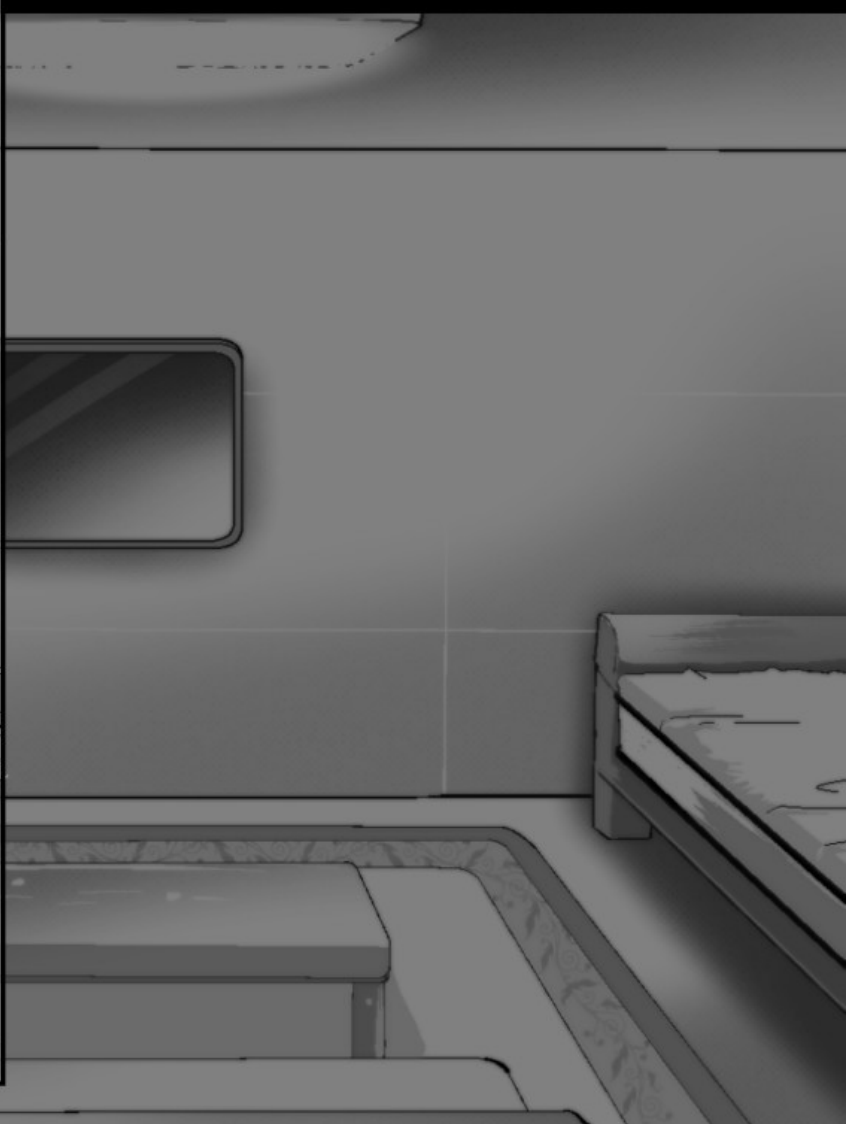
あれこれ軽快なやり取りをしながらも
あめりは吉田を浴室から追い出そうとは
しない。

当たり前のように二人だけの空間でい
ようとする。

「あめりちゃん、ありがとう。」瞬でもそう
いう想いを俺に向けてくれて」

「めちゃくちゃ嬉しかった」

「……」



「いや、一瞬っていうか…フツーに好き、
ですけど…?」

「え?何が?どういつい?と?」

「…ひい」

「…私、岩田天璃は、おじさんのことが好
きな」

「いっぱい言って…何回でも聞きたい」

「……おじさんのことが好き!すきすき
すきすき…」



「俺の方があめりちゃんのこと好き好き
好き好き好き…(笑)」

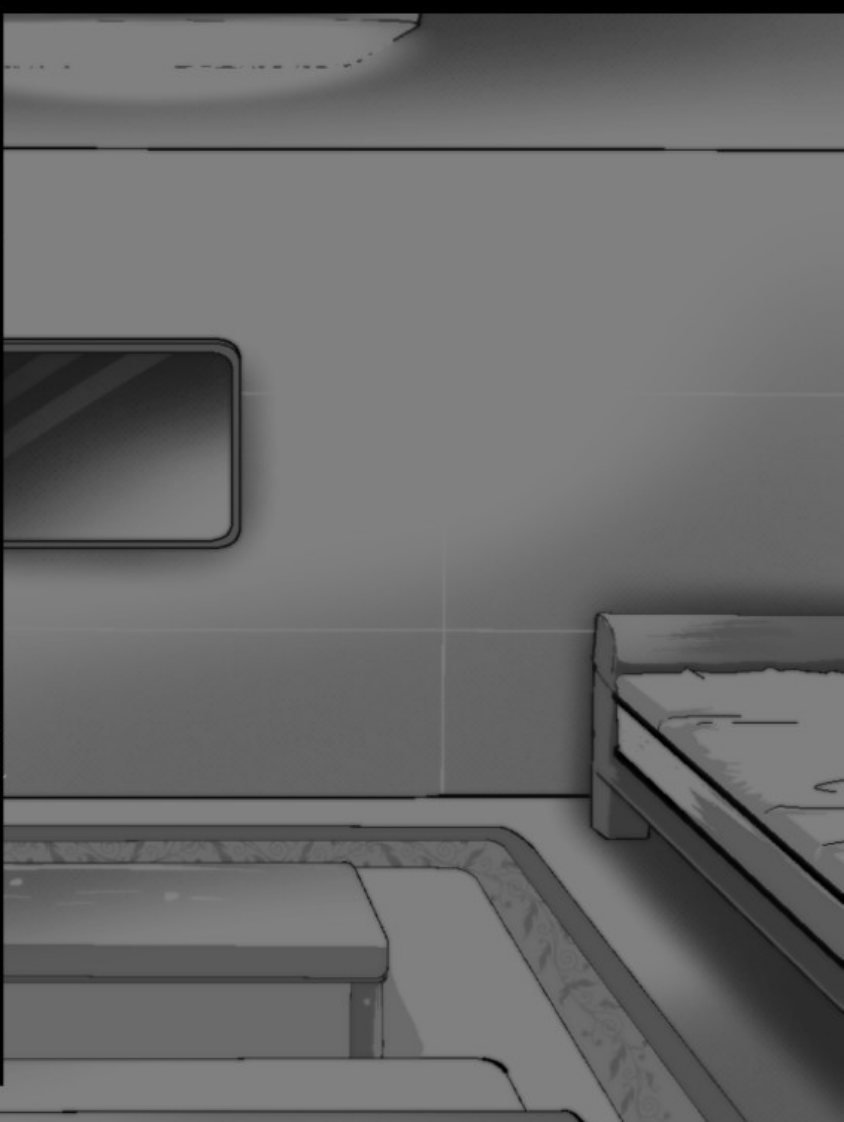
「(笑)私の方が好き好き好き好き
き…!」

「俺の方が…ww」

「私の方が…ww」

「♡♡♡♡♡」

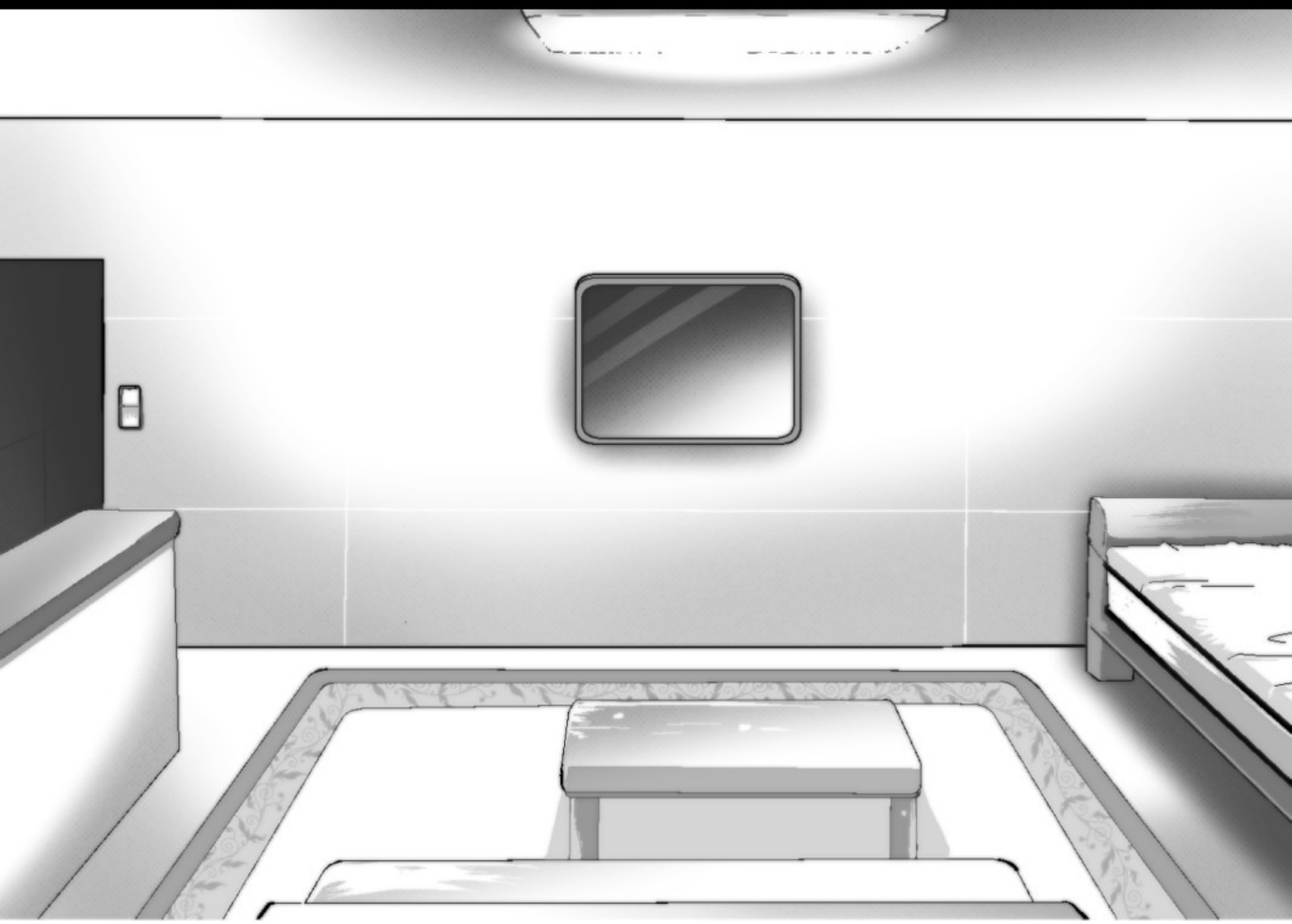
浴室なら先ほどのような介入はない
と、ここなら完全な二人きりのスペース
だと思ったのか、二人は再びお互いしか
見えない世界に入りだした。



二人が浴室でベタついている中、部屋ではモニターに新規のメッセージが表示されていく。

「あなたたちをこの空間に連れてきたわたしはいわゆる生命体ではありません。あなたたちの認識としては神さまといわれる概念と捉えてもらうのが一番手っ取り早いと思います。」

あなたたち二人は本来――――



1

o

2

3

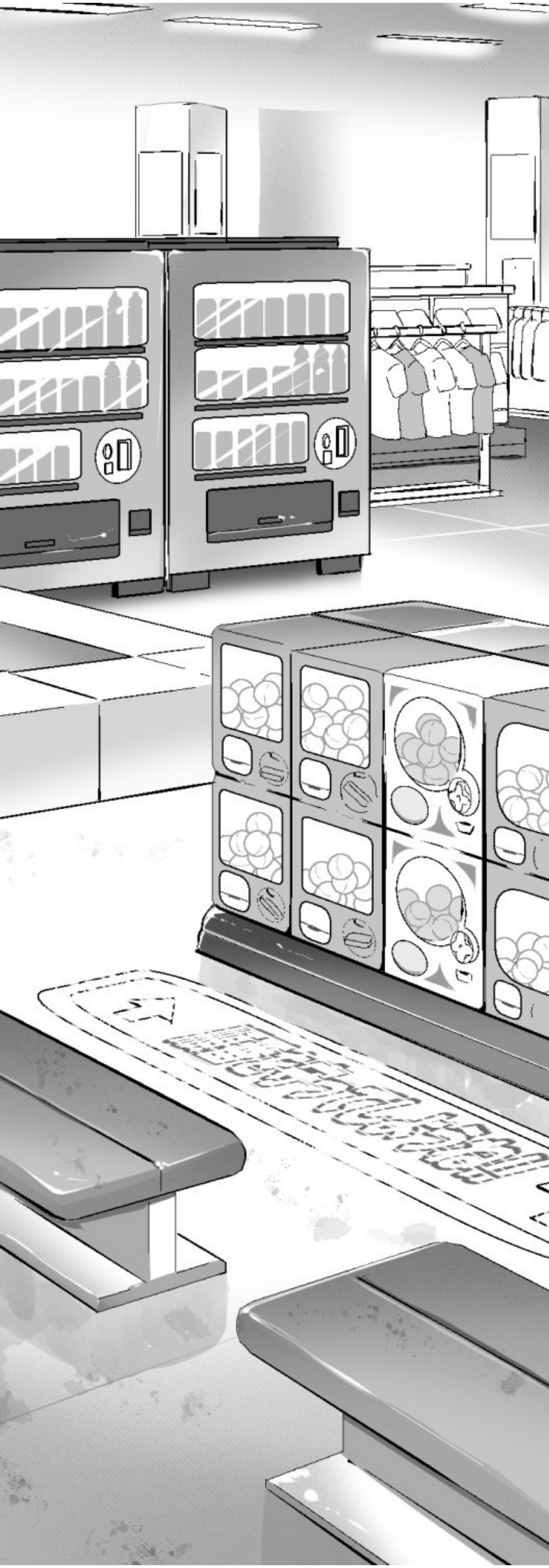
地元根付いた古き良き、といったタイ
プのデパートで清掃員として働く吉田誠
(よしだまこと)40代半ば。

今日も担当のフロア内で黙々と作業に勤
しんでいる。

やりがい：なんてものはそんなに感じ
ないが格段キツイこともない。

夏は涼しく冬は暖かい。

環境は決して悪くないだろう。

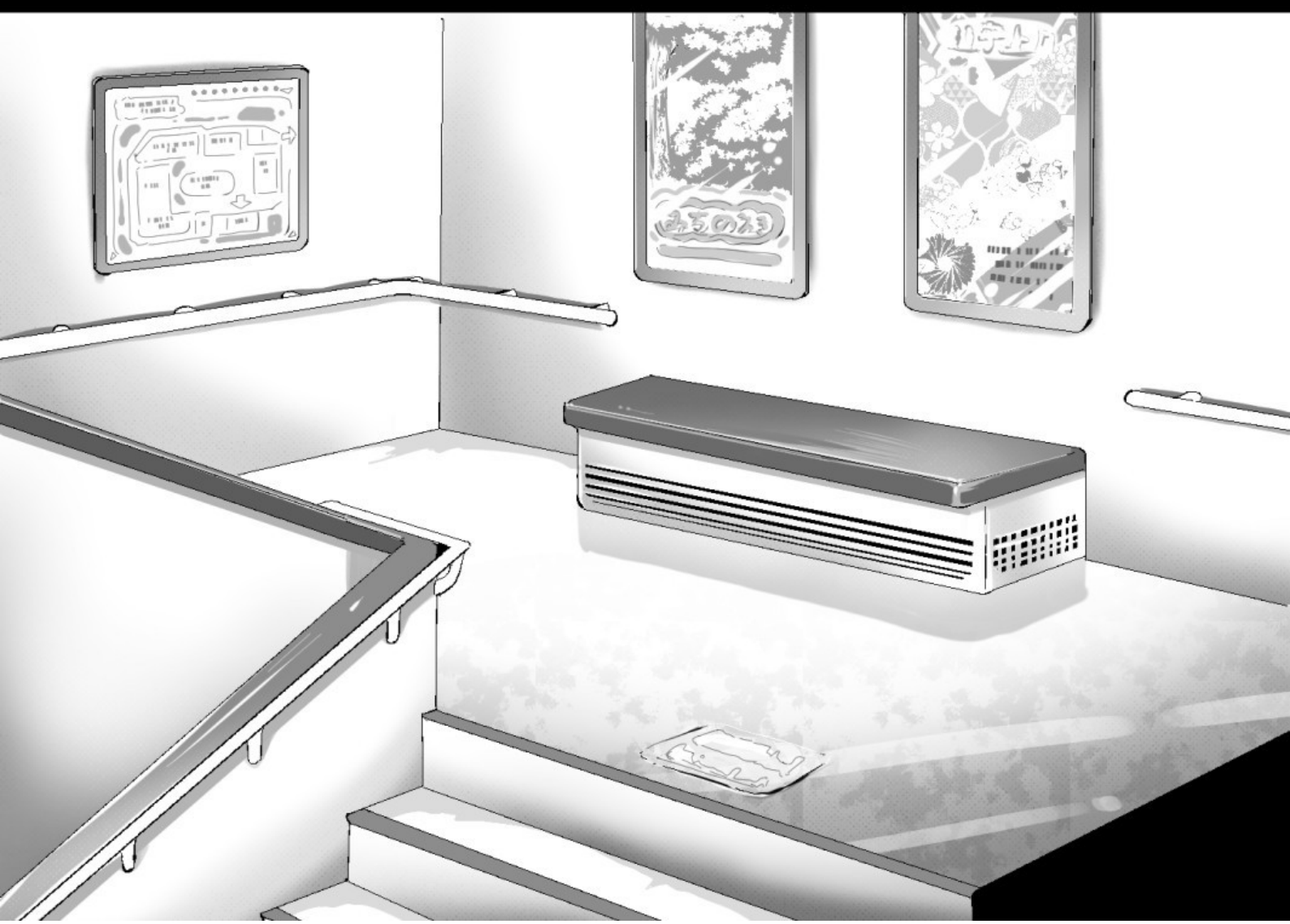


吉田「ふう、こんなもんだな」

階段の清掃を終えた吉田。

今は大型の施設ならば当然のようにエレベーターやエスカレーターが設置されているが、階段だってもちろんある。

利用者はほとんどいなくても、しっかり綺麗にはしておかないといけない。

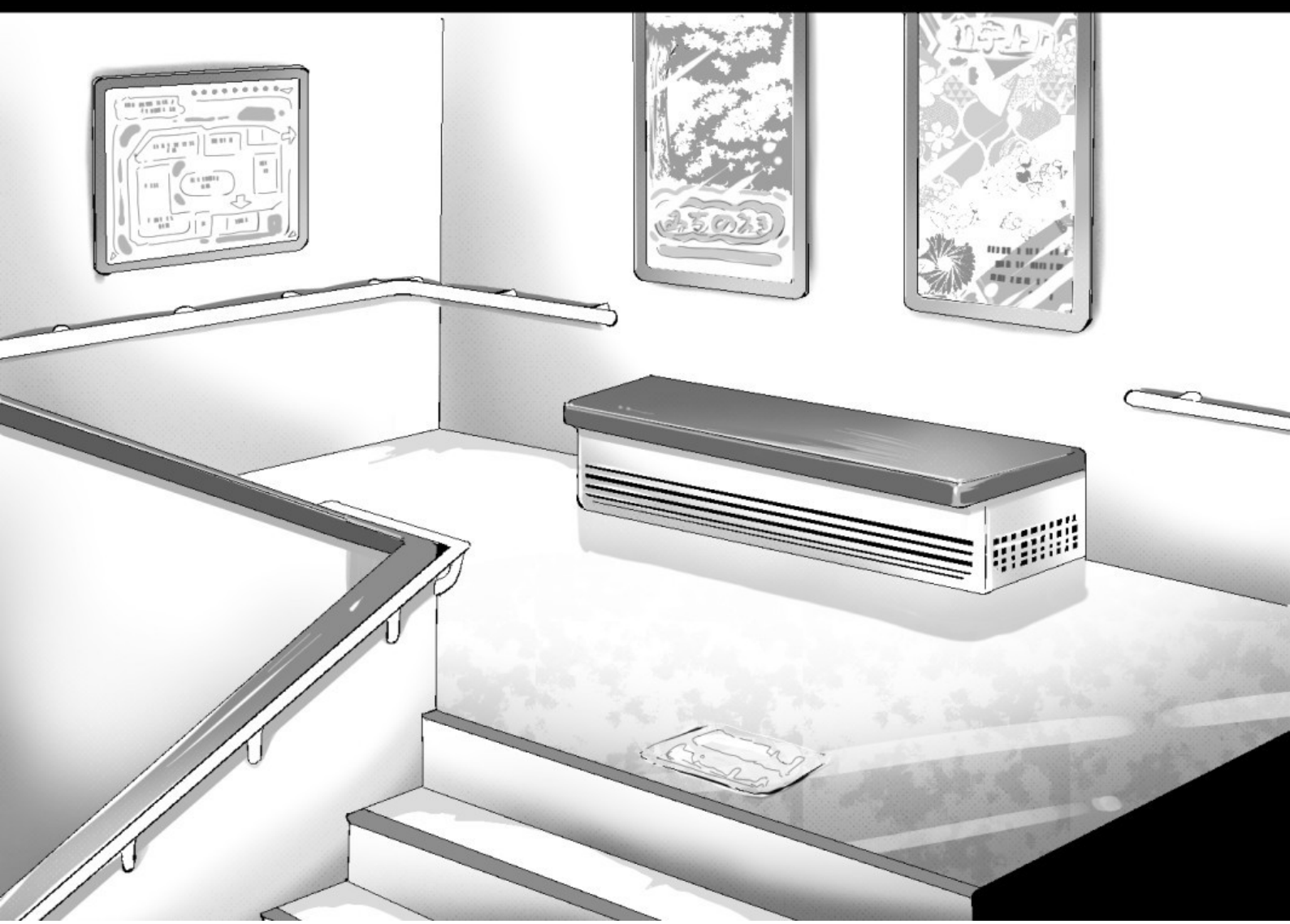


下の階へ移動しようと用具をまとめて
いたら女の子が一人、エレベーターに乗
り込んでいるのが見えた。

黒髪のセミロングにヘアバンドをつけ
ている。

芯がはっきりしてそうなパチとした
目。

スリム、というよりは華奢といった感
じの体型。



女の子「…」

吉田「…あ、すみません」

その女子は吉田がエレベーターに乗るものだと思ったのか開ボタンを押して待っていてくれた。

思わず会釈をして乗り込んでしまった。

女の子「…」

吉田「…」



女の子「今日は仕事何時ごろまで？」

吉田「…もう終わるよ、あとは帰る支度するだけ」

女の子「ふーん」

吉田「これからの事色々考えないとね」

女の子「…まー、すぐに決めなきゃいけない事でもないし…ゆっくり考えようよ」



あめり「セックスでもしながらさよ」

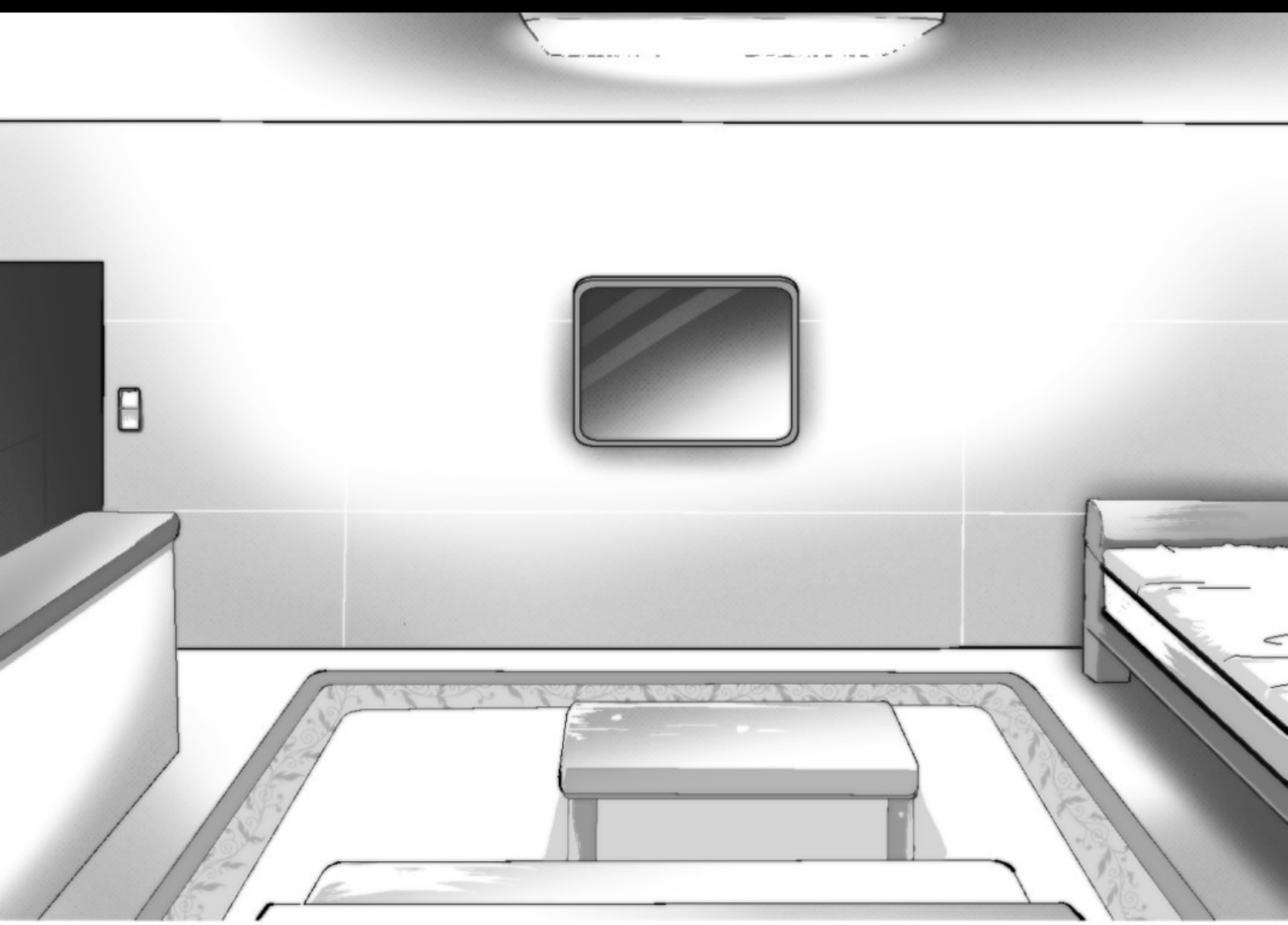


「あなたたちをこの空間に連れてきたわたしはいわゆる生命体ではありません。」

あなたたちの認識としては神さまといわれる概念と捉えてもらうのが一番手っ取り早いと思います。

あなたたち二人は本来夫婦になるはずでしたが僅かなタイミングのズレから年齢や生きる時代がすこしずつ変わってしまったのです。

そのため多少無理やりではありつつも二人がコミュニケーションをとる場を与えました。」

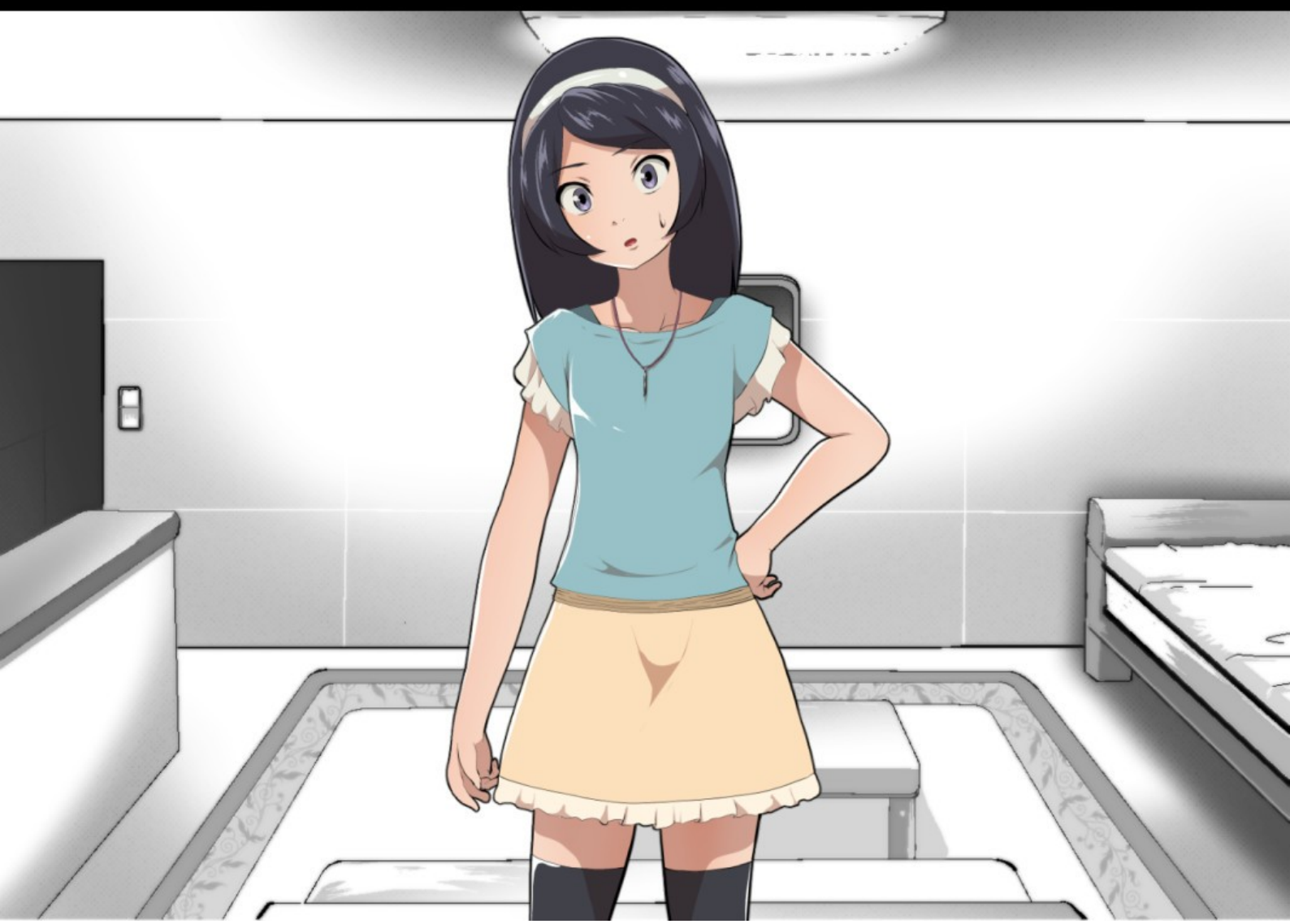


吉田「…」

あめり「…」

風呂から上がり部屋に戻ってきた二人。
理解が追いつかないがここまでの状況
を振り返ればそう思うしかないと感じる
二人。

モニターに続くメッセージ。



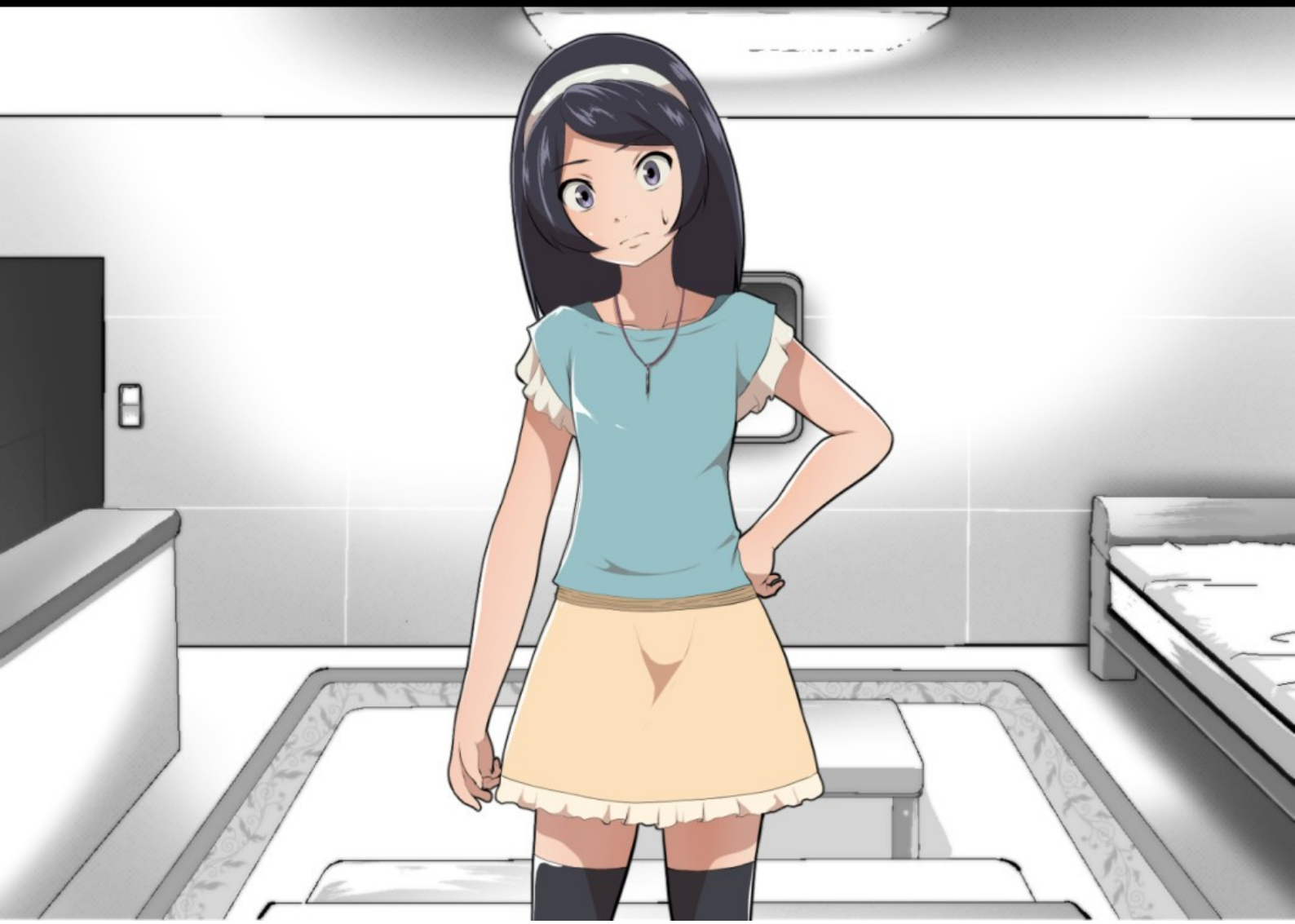
【選択肢を与えます。あなたたちは関係を築き上げましたが、現実に戻ればお互いに年齢や立場上の関係などを踏まえる必要があります】

『選択肢』

↓ 記憶はそのまま 関係も続ける

↓ 記憶の抹消 お互い別の道を進む

補足…記憶を消す場合、こんなことに巻き込んでしまったお詫びとして、実現できる範囲内で望みのある程度融通します。



吉田「…」

あめり「…」

確かな関係を築いた二人ではあるが
いざ、そんな選択肢を迫られると即答
などできないのが人という生きもので
ある。

二人が出した答えは。



あめり「一等当たってた♪」

吉田「…」

あめりが要求したのは、ストレートに

「大金、

シンプルかつ、無駄のない素直な要求。

どういった形でその願いが叶うのかは

不明だったが、

とりあえず宝くじを

数枚買ったら当たっ

たらしい。



望みを叶えてもらうという選択をしたため、あの空間での記憶はキレイさっぱりなくなる…はずだった。

あめりが吉田に指示した望み、それは『二人の記憶の持越し』
記憶を失うことなく現実に戻るという望み。

矛盾しているというか、そんなこといいのかと吉田は思ったが普通に叶えられた。願いを叶えてくれる魔物に願いを増やしてと言っているような不条理さ。
ちやっかりしているというか、この上な
いくらい行動的だ。



その願いを言った後、モニターに新規のメッセージが表記されるまで少し時間がかかっていた。

熟考しているのか、妙に人間臭く感じた。

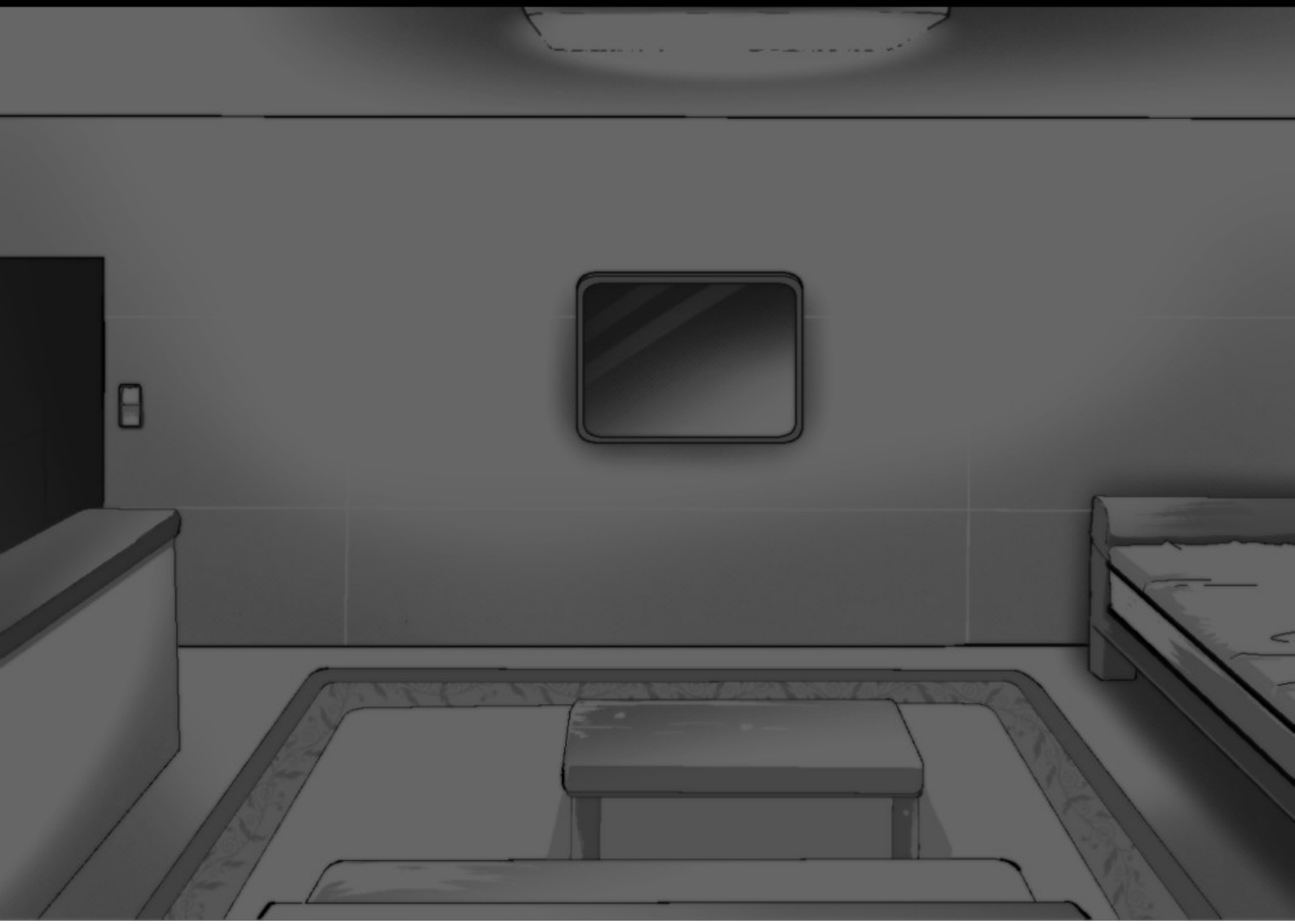
【おめでとーございます。

ちよっとズルいような気はしますが、その答えはきつと正しい判断でしょう。

わたしに感情と呼ばれる念は存在しませんが、心から二人の未来を願います。

いつまでも幸せでいて下さい。では…。

かみさまより】



□ちよいい高めのラブホ

あめり「いってみるもんだね」

吉田「いやホントに…」



あめり「まあ、ダメだったとしても私の願
いだけは叶えられるわけだし？ 私のお金
は確保できてたからね♪」

吉田「…」

あめり「そんな顔しないでよw こうやって
お金も愛する恋人も手に入って、ラブホで
平和にラブラブセックスできてるんだか
らさ♪」

吉田「俺のごと愛してる?」

あめり「はいはい、ダーリン好き好きだー
い好き♪」



吉田「…でも、大金が手に入って現実は無事に戻ってこれたなら、色々意識が変わったりとか…」

あめり「…」

吉田「あんな閉鎖空間で精神的にも窮屈だったから気の迷いでこんな中年と関係持っちゃったけど、やっぱりなかったことにしようと思ったたり…」

あめり「…ぶっちゃけ」

「自分でもそういう気持ちが出てくるんじゃないかなーって思ってたんだけどね…」

吉田「…」



あめり「…なんか、やっぱ私フツーにおじ
さんのこと好きだなんて…(笑)」



吉田「…あめりい♡」

あめり「うざっwあゝ言わなきゃよかったかな〜♪」

「てかさ、もう仕事辞めてもよくない？」

吉田「それとはまた別というか…可愛い恋人ができたって思ったら、これから築いていくもののためにしっかりと働いていきたい！って意気込みが出てきて」

あめり「立派な社会人か！」



吉田「それに…指輪くらいは自分で稼いだ
金で買いたいし」

あめり「っ」

吉田「俺の稼ぎじゃ高価すぎるのは買えな
いけど」

あめり「…」



あめり「(じぎっw)あーん♡ダーリンカッ
「いい♪素敵♪ずっと一緒にいようね♡
愛してるっ♡♡♡」

吉田「…」

あめり「あ、しまったー(棒)本音と心の声
が逆になっちゃってたさw」

吉田「このっ♡可愛いことしやがって…♡
もう一回言え♡」

あめり「嫌でーす♪調子乗らないでくださ
ー♡」

吉田「言うまで…やめないぞ♡」

あめり「じゃあ言いませーん♡」



吉田「♪」

あめり「♪」

度々会っては当たり前のように身体
を重ね、

そのうち当たり前のように同棲する
ようになり、

そのまま当たり前のように結婚した。



—おしまい



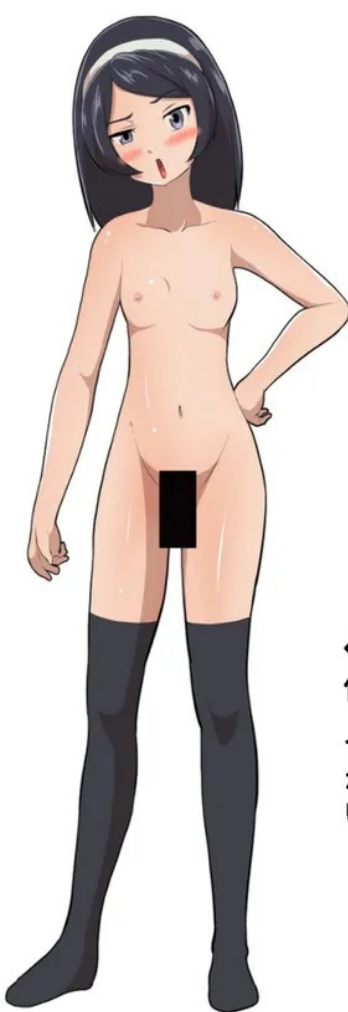
おまけ

愛しのダーリンが男の潮吹きを
体験してみたいと言ってきたので
極上のシチュエーションで
極上の体験を

—嫌と言わずに— 嫌と言っても

思う存分堪能させてあげた
やさしいあめりちゃん





◆使ってない

